
英雄伝説

カイラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説

【Nコード】

N4002V

【作者名】

カイラ

【あらすじ】

ゴドリック・グリフィンドル……今はホグワーツの“創設者”としてあいつらと同様、有名な俺だが当時は別の意味で有名だった。これはその当時の俺が忘れてしまった“記憶”からあいつらと出会ってやんちゃに暮らし……俺が死ぬまでの物語。

※『英雄後談』の創設者世代です。

※原作設定？んなもんは知らねえよ！ってな感じで無視をしている所があります。お陰で“迫害”所ではありませんし、人バタバタ死んできます。

※前回ほど毎日更新出来ない……かも？

設定（前書き）

皆様、おはようございます！

あらすじより注意書きが多くなってしまった“英雄伝説”です。

これは設定ですが、何分めんどくさー…いえ、執筆、執筆と考えいたせいでゴドリックの分しかありません。

まあゴドリックの分も以前のをコピーして少し加工しただけですの
で……後で書き加えると思います。

まあ見ている方も少ないと思いますし、へー…程度でお願いします。

設定

主人公

ゴドリック・グリフィン・ドール

(ラクス・ファーフラス)

年齢 ?

誕生日 ?

血液型 自称O型

身長 148 (伸びなかった)

性格

後世には勇猛果敢と残っている。…が実際には他の創設者には時々逆らえなかったりする。

基本ネガティブで考え無し、悪戯好き。サラザール・スリザリン曰く馬鹿で単細胞。しかし思考が分からないなど掴みにくい性格。創設者と居る時のみ性格が変わる。

追記

ゴドリック・グリフィン・ドールの容姿は赤髪に青い目、後に赤髪まじりの黄色の髪に毛に蒼い目。

髪型は後ろ髪を少し取り、強制的に結ばらされた。その結んだ所だけ伸ばし、他は長くなったら切ってもらう。(ヘルガカロウエナに)

右目には布、後に眼帯がしてある。しかし蒼い目になってからは実は左目も見えていない、盲目。

左手には指貫き手袋をしており、手の甲には魔法陣が描かれてある。額には見えないように眼帯の紐で隠しているが暗殺戦闘奴隷の印しがある。

ちなみに得意な事は暗殺。

プロローグ（前書き）

始まりました、創設者世代！

無計画な子世代と矛盾が起きないように頑張ります……

あ、後このプロローグの下の方は子世代を読んでいる方には分かる……と思いますが『英雄後談』の謎のプリンスに掲載していた続きになっています。

え？何それ？って方は暇な時間にどうぞ読んでみて下さい。

あ、でも読まなくてもこの『英雄伝説』に支障はありません。……多分。

プロローグ

夜とは違う暗闇。

暗い、暗い闇。

そんな暗闇の中カチャリと扉の開く音が響いた。

ボタンと扉が閉まる音が聞こえた後にカツカツと足音が定期的に響く。

そしてピタリと足音が止まった。

「さて、今年も頼むぞ。大切な『先見の巫女』よ」

「……今年は例年通りの何ら変わりません」

「……ふむ。ならばいつが“豊作”なのだ」

「……………今から、数年後の新生児……………です」

「そうか」

嬉しそうな男の声が響いた後にジャリと鎖が動く音が聞こえた。

「……貴様には何も出来んよ」

嘲ける様に男は告げた。

「……………」

「それではまた、我々が来た時にはぜひ頼むよ」

『先見の巫女』よ、と男は締めくくりカツカツと離れて行った。

ボタンと扉の閉まる音が聞こえ、静寂が広がる。

「つ……………すまない」

巫女は辛そうにそう言うとかシャリと手に付けられた鎖を鳴らしながら自身の首へと動かした。

あれから数年後、月に照らされながらも夜道に赤い髪をした子供を抱え荒れた地をジャリジャリと進む人間がいた。

「……このあたりで十分か？」

そう言いキョロキョロと辺りを見回すと近場にあった子供が横になるには少し大きめの石の上に子供を置く。

「さて、今日の仕事は此処までだったな」

子供を置いた人間はそう言うパチンと『姿くらまし』をしてその場を去って行った。

その場に残ったのは月明かりを浴びながら今だ目を閉じて寝ている子供だけであった。

プロローグ（後書き）

「えーと……『英雄伝説』において作者の勝手に作った設定や、此処から初めて読む方への詳しい設定説明を此処でゴドリックにしてもらう」……………えー」

俺はガサリと受けとった紙を丸める。

「めんどくさいな……」

大体、作中でもするんだし此処いらないだろ、と俺は吐き捨てながら丸めた紙を投げ捨てる。

「大体俺一人なんだー」

「いいや、違うぜ？」

「……！」

俺の言葉を遮り、バサリと侵入者は俺の前に現れた。

「……………誰だ」

「今回からオマエと一緒にやる事になった同業者だ」

そう言って奴はニヤリと笑った。

一話（前書き）

……何だか無理矢理感が拭えない。

しかも短いですし……

うーん……

毎回このくらいになるなら、頑張って毎日更新した方がいいよなあ
……

でもオリジナルだから前回程はスイスイ書けないし……

悩みどころです……

一話

暗闇からゆっくりと浮き上がる感覚で意識が戻り俺は目を開いた。

(……ここは?)

此処はどこなのだろう?

目の前には荒れた大地とかさかな草、葉っぱがついていない木々、そしてとても遠い人がいる。

(……こ、こは)

頭に浮かんでは消える何か。それは此処がへ“荒れ果てた荒野”でだと教えてくれた。そしてさらに何かは続いていく。

へ“荒れ果てた荒野”には職を失った無職の人や親に捨てられた子供が暮らす場所。無法地帯だ

(しょく? ことも? むほーちたい?)

しかし頭にはそれらについては浮かばなかった。浮かんだのは別の事。

へ今、世界には魔法使いとマグル、スクイプがいる

(まくる? まほーつかい? すくいふ?)

へマグルとは魔法使いでない者の事。魔法使いとは魔法を使う者だ……スクイプとは魔法使いの元に生まれたが魔法が使えない者の事だ

(まほう?)

しかし俺の疑問には答えずに淡々と教える。

へ今魔法界は身分制になっている。

一番上が三家……スリザリン家、ハッフルパフ家、レイブンクロー家、だ。

次に偉いのは魔法大臣。その次が魔法省……役人だ。

それからは色々複雑に入り組んでいる

(?????)

俺は何が何だか分からなかった。

「だが人……マグルや普通に働いている魔法使いより身分が下がある。まずマグルや魔法使いより上から没落した家だ。その下が孤児……親に捨てられた子供や無職な人々。そして魔法生物だ」

（まほー……せいふつ？）

「……その魔法生物より下がある。人として見られていない、奴隷だ。奴隷には三段階ある」

（……………）

「一般型奴隷、戦闘奴隷、実験中の暗殺戦闘奴隷だ。奴隷の中では上の一般型奴隷は……そうだな。人にこき使われる、とても言うおう。真ん中の戦闘奴隷はそれに戦闘……金持ちの娯楽の為の奴隷同士の喧嘩が入る。最後、下の暗殺戦闘奴隷は……戦闘奴隷にもっとも罪が重い“殺し”が入る」

（こ……れし？）

「殺し、だ」

俺は何一つ分からないまま浮かび上がっていた何かは消えていった。教えてくれた内容は何一つ分からないが忘れることは出来ずに、漠然と周りの荒れた大地を見渡す。

（……おれは？）

不意に湧き出てきた感情。

「おれはたれ？」

「だぁあれだろな？」

周りを見ていた俺の後ろから野太い声が聞こえた。

俺は後ろへ振り返る。

「……たれ？」

そこには真ん丸な頭に傷がついた顔の男が立っていた。

男はニヤリと笑う。

「捨てられたガキか。オマエにゃ悪いが……」

男は腕を上げる。

「死んでもらう」

男は腕を振り下ろした。

俺はまるで当たり前のように前……男の方へと走った。

「あゝあ？」

俺は男の足元までつくとおもいきりジャンプをした。

「ぐうあ……」

俺の頭が男の急所に当たり男は急所を押さえながらゴロゴロとたうちまわっている。

男は涙目になりながら立ち上がり話す。

「オマエ、やるじゃーねえか……」

俺はそう言った男に聞いた。

「なんてころころしているの？」

男は目を丸め、口をこれでもかと開き、驚いていた。やがてゆっくりと言う。

「無意識かよ……」

男は啞然と言った。

「めいしき？」

「……む・い・し・き・だ」

「むめしき！」

男は額に手を当てた。そしてしゃがみ、俺の目の前でハッキリと言った。

「む・い・し・き・だ、ガキ。遠くなってるぞ」

「むしき」

「ねえワザと？ワザだよな？ガキ」

俺はキョトンと傾げる。

「わさと？」

男はガクリと肩を落とした。

「誰だ……こんな言葉もろくに話せないガキを捨てたのは」

「す……てた？」

男は俺を見る。

「……はあ。このまま置いておくのはな……ガキ、名は？」

「な？」

「……ないのか。俺はエスタージオだ。エスタージオ・ニールランド。エスタージオって言ってみろ」

「え……えすた」

男はゆっくり大きく言った。

「エスタージオ」

「えすたすを」

「……エスタだ」

「えすた！」

「……ああ。それでいい」

何やらエスタは涙目だ。

エスタは立ち上がり手を差し出した。

「おら」

「……………」

「ったく」

エスタは俺の手を取り繋いだ。

「今から俺が使っている家へと行くぞ」

「えー！」

「……妙なものを拾ったな」

「？」

「何でもねえ」

エスタは俺をグイグイと引っ張って何処か検討もつかない場所へと連れて行った。

一話（後書き）

「俺の名前はエスタージオだ」

まあ作中でも出てたからこんくらいでいいよな、とエスタージオ……だったか？はそう言う。

「さて、おい！その同業者！」

エスタージオは俺を指差す。

「今日の設定は何だ！」

すげえ偉そうに喋る奴だな、と思いながらも俺は貰った紙を広げる。

「魔法使いとマグルについて……」

説明よろしく、と紙には付け加えて書いてあったが……まあこれは言わなくていいだろ。

「簡単だな。魔法使いは反則的なもんを使う。呪文を唱えて木の棒を振り回したり、円の中に変な模様を書いただけで炎やら水やら物を変えたり、動けなくする奴らを魔法使い、それらを出来ない普通な人を魔法使いが見下したようにマグルと言っているだけだ」

「……………」

いや、見下している以外は間違っではないけど……説明の仕方が他にあるだろ？

俺はため息をつく。

「何だ？ため息なんてついて」

んなもんはつくもんじゃないぞ、とエスタージオは言う。

「……そうだな」

……もう、いいか。

どうにでもなればいい。ついでにこのコーナーも終われ！！

俺は貰った紙を丸めて投げ捨てた。

二話

「此処が家だ」

エスタは目の前にある寝転びある程度暮らせる拓けた岩を指差した。

「いえ？」

「……発音が違うな。い・えだ」

エスタは俺を引っ張りながら岩に座る。

「いえ？」

「……よし。そん調子だ」

エスタはグシャグシャと俺の頭を撫でた。

「ぐえ……」

力が強すぎて変な声が出てしまった。

「ああ？……わりイ、強すぎたな」

エスタは頭の手を退けた。

「むう……」

エスタは退けた手を顎へ持って行き何かを考えているポーズを取った。

「さて、お前の名前だよな……」

エスタはうーん、と唸りながらブツブツと言い始める。

「ラルク…アルフォード…ジョン…」

俺は寝転んで空を見上げる。

空では白い雲がゆらりゆらりと揺れていた。

「……らく」

無意識に呟いた。

「ラク？お前の名前か？」

「う？」

「……………」

エスタは俺を見てニヤリと笑いピシリと指を指した。

「お前の名前はラクだ！」

「……………」

「……………」

「……………」

「あのな、黙るのは止めよう。な？」

「あい！」

俺は元気よく答えた。

「ラク、喧嘩をやるぞ」

「けーしゃ？」

「……喧嘩、だ。行くぞ」

エスタは俺の手を掴み岩を下りる。

エスタは“家”から離れ、草地が多いところへと連れて行った。

「此処でいいな」

エスタはパツと手を放し、俺から離れた。

「ラク、今から喧嘩を教えてやる。これから此処で暮らすなら必要になるからよく覚えておけよ！」

エスタはいきなり走ってきて蹴りを繰り出す。

「！？」

俺は避ける事が出来ずにもろにくらい、後方へとぶっ飛んだ。

「……つか……うえ」

ダラダラと涎を垂らす。

「……何だ？向かって来ないとお前が死ぬぞ？」

エスタはニヤリと笑った。

「……おほーしよて！」

俺はエスタにビシツと言った。

そんな俺にエスタはハッキリと言う。

「……わりイ、何て言ったのかわからねえ」

プツリと何かがいった俺はエスタに言う。

「いっはーしゅくらわあせーす！」

エスタを見るとニヤリと笑っていた。

「今のは何となく分かったぜ……一発食らわせてやる、だろ？やっ

てみるよ」

「……おほーしよてよ！」

エスタは何やらスツキリしたような顔で言った。

「ああ！覚えておけよ、か？口は言いから来いよ」

俺はエスタに向かって走り出した。

夜、俺はエスタと薪を焚いている岩の上に座っていた。

「むう……」

「俺に勝つのはまだまだ早い。十年どころじゃ足りねえな」

日が暮れはじめた頃まで俺はエスタと“喧嘩”をした。……エスタの一方的なボコ殴りの蹴り放題、やりたい放題だったが。

俺はエスタにやられた腕を見ていた。

「ああ？痛むか？」

「……………」

俺はムッスリとして答えなかった。

そんな俺を見てエスタは豪快に笑った。

「ークク……そんなに負けたのが嫌か？」

「……………」

聞かれてもなお答えない俺にエスタの笑い声の音量は上がった。

「ラク、オメエはこれから伸びるぞ。ほら、これを当てとけ」

エスタは夕食に食べた獣の肉を投げた。

俺はビチャという音を立てながら顔で受け止めた。

「にく？」

「肉だ。まあその肉には何も効果ないが……当ててないよりマシだろう」

「？」

キョトンと俺はエスタを見ていた。

「あー：こっち来い」

俺は立ち上がりトタトタとエスタに近づいた。

エスタの元へ行くとエスタは俺の手を掴み、無理矢理エスタの膝の上へと座らせた。

「おら、押さえとけ」

エスタは俺の腕の上に先程顔面で受け止めた肉を赤黒く変色した腕に乗せた。

「おさえ？」

「ああ、もう片方の手で押さえるんだ。こうやってな」

エスタは実際に押さえるところしてくれた。

「真似してみろ」

俺はエスタの真似をして押さえる。

「そうだ。俺が外していいと言うまでしておくんだ」

エスタはこう言うって押さえる真似を止めた。

俺はエスタに言われた通りに押さえ続ける。

「それと、返事はしろ」

「へーし？」

「返事だ。返事は先程のような感じで問われた時に使う。はいってな」

俺にはまだ難しく分からなかった。だからいつものようにエスタの言葉を繰り返した。

「あい！」

「よーし、いい子だ」

エスタはいつものニヤリじゃなく、ニコニコと嬉しそうに笑った。俺の頭をグシャグシャにしながら。

「今日使ったからな……」

エスタは横に置いていた剣をスラリと抜いた。

俺は剣を見ながらキョトンと首を傾げる。

「見たことないか？ 剣だ。もっともこれはナマクラもんだがな」

「つーき」

「剣、だ。動くなよ、ラク」

エスタは剣をなるべく薪の近くに持っていく。

剣は真っ赤な明るい炎に照らされてどす黒い赤色が映っていた。

「おなし！」

俺は剣のどす黒い赤色を指しながら肉を置いている腕と交互に指す。

「同じ？ いや、違うな。血の色は痣なんかとは違う。もっと暗い」

「？」

俺は首を傾げる。

「ようするに違う色何だよ、それとは」

エスタは俺の腕を指した。

「んー…同じならお前の髪と炎が同じだ」

エスタは俺の腕から髪を指し、それから真っ赤な炎を指した。

「おなし？」

「ああ、同じだ。メラメラと真っ赤に燃える。…オマエと一緒にだ」

エスタは笑った。ニヤリでもニコニコでもない笑いで。

「ああ、後はお前の目と空も同じ青さだな」

「そら？ おなし？」

「ああ。どこまでも青い」

エスタは剣に布を被せて手で押さえゆつくりと剣を動かしていく。

布から出て来た剣は先程みたいなどす黒い色ではなかったがまだ少し赤かった。

「ホントはもっとちゃんと手入れが出来れば良いんだがな…此処では仕方がないな」

エスタはポイツと布をそこら辺に投げた。

「さて…オマエさんの勉強といきますか」

「へんきゅー？」

「…まずは正しい言葉からだな」

エスタは剣をスラリとしまい、同じように隣に置いた。

「ラク、オメエはまず正しく発音をしねえと今のままじゃ誰も理解

出来ねえ。……俺も含めて、な」

エスタは真剣に、真っすぐと言った。

「だからまず発音をどうにかしねえとな。そうだな……」

エスタはガシガシと頭をかく。

「オメエは何が……いや、殆ど言えてねえな」

エスタはふと、目の前にあるたき火を見た。

「ラク、炎って言ってみろ」

「ほのお」

「……え？言えてんな、オメエ。じゃ薪だ」

「たたき」

「おー！？」

エスタは何やら考えこんだ。そしてこう言った。

「ラク、空を言ってみろ」

「そら」

「足はどうだ」

「あし」

「じゃ剣はどうだ？」

エスタは剣を指しながら聞いた。

「つーき」

「……成る程な」

エスタはうん、うんと言いながら頷いていた。

「オメエは濁音があるとまるでダメだな。後長かったり難しそうな
の。じゃそれからやるれば良いんだな」

んーとエスタは言った後にこう言った。

「ラク、スクイプはどうだ？」

「すくいふ」

「ス・ク・イ・プ」

「すくいふ」

「……何か遠くなったな？じゃあ……動物」

「とーふつ」

「ど・う・ぶ・つ」

エスタはゆっくり区切って言った。

「とうふつ」

「……近く、はなってるな。動物」

「とうふつ」

エスタは頭を手で覆った。

「はー……。ラク、棒はどうだ？」

「ほう」

「ぼ・う」

俺はゆっくりとエスタの言葉を繰り返す。

「ほう」

「……ぼーって言えるか？」

「ほー？」

「ぼー」

俺はエスタのをしっかり聞いて、言った。

「ぼー？」

「そうだ！それでぼ・う」

「ぼー……う」

「……まあまだまだ改善しないとダメだが……この調子で行くか。

今度はー」

エスタの勉強は俺のまぶたがくつつきそうになりながらコックラコックラ頭が動くようになってようやく終わりを告げた。

二話（後書き）

「またあるのか……」

俺は渡された紙にウンザリしながらも開く。

「えーっと“荒れ果てた荒野”について？」

……………面倒だな。

「オメエ知らないのか？ 荒れ果てた荒野は……まあ作中と同じ、職が無くなり独りになった奴や捨てられたガキ、離縁された奴や物好きな奴ら、後は……犯罪を犯した奴らが来る土地だな」

まあただ毎日殺れば良いだけの楽に暮らせる場所だ、とエスタージオは胡座をかきながら言う。

「へー…そんな所でよく子育てなんか出来たね？」

「俺が天才だからな」

ニコリと笑うとただ怖い顔にしかならないだろうに自慢げに笑う。

「……それでは、またなー」

俺は何も見えていない。あんな……自慢げに笑うと犯罪者にしか見えない笑顔なんて見てはない。

「あ、何勝手に終わってんだ！ テメエ！」

三話

朝日が昇り俺は目を覚ました。

(……ね、む)

ゴシゴシと目を擦る。

「起きたか」

エスタはすでに起きていた。

剣を持って俺を見ている。

「……………」

「まずは朝飯を取りに行くぞ」

「……………」

「おーい、起きてるか？」

「……あい」

コクリと頭が揺らぐ。

「…ダメだな。しばらく待つか」

エスタはよつと、と言いながら腰を下ろした。

「なあんで拾ったんだろうな……」

頭がボーとしていて何も処理されていない。そんな中でエスタの独り言を右から左に聞き流していた。

「この俺が言葉分かんねえガキに言葉教えて、飯食わせて…あけぐにあ“喧嘩”を仕込んで……」

「ホント、人生何処で変わるか分からねえな、親友」

「……………」

「……いい加減起きろ！」

エスタは俺に寄ってきて頭を叩いた。

「うつ……あ？」

「やっと起きたか」

行くぞ、とエスタは言い出していく。

俺は立ち上がりエスタの後を追いかけた。

エスタは昨日出会った場所へ来ていた。

「……？」

俺はキョトンと傾げる。

「……よく見ておけ！食料はこうやって得るもんだあ」

エスタは左側の草むらから出てきて襲って来た奴をその場でクルリと一周回り、襲って来た奴と向き合ったかと思えば瞬時に首を跳ねていた。

ブシャヤアと赤い液体が吹き出す。

赤い液体はどんどんと吹き出し地面を赤く染めていく。

「……えすた、これ？」

俺はエスタを呼びながら赤い液体に触る。

「ん？……ああ、血か？」

エスタはアツサリと教えてくれた。

「ち？」

「ああ。それはな人間には必要なもんだ。それがいっぱい、そうだなあ……今と同じくらい流れたらもう生きる事は出来ねえ」

「……？」

「まだ分かんねえか……」

エスタは俺の顔を見て笑った。

「よっと……」

エスタはヒョイと首がない体を抱えた。

「ちよっと川があるところに行くぞ」

エスタはスタスタと歩いて言った。

(あ！……)

俺は置いていかれないようにエスタの後に続いた。

しばらくすると俺よりずっと先を歩いていたエスタが急に立ち止まった。

「着いたぞ」

エスタの横に行き前を見ると青くすんだ川がサラサラと流れていた。

「わあ……」

「気に入ったか？」

「うい！」

「……今度はうかよ」

「……？」

「まあいい。飯が先だ」

エスタはこう言って体を抱えたまま川へと向かった。

エスタは川でジャブジャブと剣を洗い、その洗った剣を使って体を別けはじめた。

「えすた……？」

「人間ってのはな、食えるんだ。よく見とけ。いずれお前にも必要になる技術だ」

エスタはこう言ってザクザクと切り進める。

エスタが切れば切るほど周りが赤い血に染まっていった。

「よし、こんくらいか」

エスタは切り分けたいくつかの肉を側に置きながら言う。

「後は剣を洗ってすぐに離れるぞ」

獣や他の奴らを取りこぼしを狙いに来るからな、とエスタは言いながら剣を洗っていた。

エスタは何度もうん、うん、と言い振り返った。

「ラク、行くぞ」

エスタは俺の手を掴む。

「走るぞ」

エスタは駆け出した。

「!？」

俺は急いで駆け出す。

「ハア……ハッ」

エスタはとても早く俺がエスタの元へと着いた時には息が切れていた。

「此処まで来れば平気だろう」

エスタは俺を見る。

「……大丈夫か？」

「ハア……ハッ……」

俺は隣で座り込む。

「……少し休憩するか」

エスタは腰を下ろした。

「飯、食い終わったらまた“喧嘩”やるからな」

俺はコクン、と頷く。エスタを今度こそ一殴りしてる！

「で、その後は勉強な」

「……………やた」

「ダメだ。今もきちんと話せてないし、分からない言葉も沢山あるだろう？」

「……………」

エスタは立ち上がる。

「まだ座っていていい。だが動くなよ？俺は薪を拾ってくる」

エスタはタッタッと走って行った。

（はや……い）

俺はゴロンと寝転がる。

「そ……ら」

俺の目の前には青く透き通る空。そして青い空にフワフワに白い雲が浮かんでいた。

「……………」

ボー……俺は空を見上げる。けれど暇だとか暑いとかそういうふうには思わずにただ、ただそうするのが当たり前………みたいに感じていた。

いつまでそうしていたのかは分からない。ただユツクリと進んでいく雲をいくつも見ていた時に不意に声がかけられたのだ。

「おら、起きろラク」

ゲシツと軽く足で頭を踏まれる。

「むう……」

俺はエスタが足を除けるとすぐさま立ち上がる。………また踏まれた

くないし。

エスタは片手を薪で一杯にし、もう片手で肉を掴んでいた。

「……戻るぞ」

エスタはこう言った後にクルリと背を向けて駆け出した。

(わ……と……)

俺は置いて行かれないように急いで駆け出した。

四話

いくつもの朝と夜が経ったある日、俺は地べたに顔をくっつけていた。

(……?)

俺は目の前にあるギザギザな葉っぱを根っこから取り、トタトタとエスタの元へ向かった。

「えすた!」

「んあ?……どした?」

「これ」

俺は引き抜いた草をエスタに見せる。

「あー……そりゃ毒のある草だ」

俺が分からずにキョトンとしてしているとエスタはニヤリと笑い、言った。

「食ってみれば分かる」

(……たべる?)

俺はしばらく手に持っている草を見つめ、それからパクリと食べた。

「本当に食うか?」

エスタは呆れ気味に言う。

「うゝええゝ」

(まずい……)

草を食べてから舌がピリピリとし、何だか体が動きにくい。

「それは毒草だ。毒草っても舌がピリピリし、体が少し痺れるくらいの軽いもんだがな」

「むー」

「体の痺れがとれたら薬草探してこいよー」

エスタはゴロン、とまた寝転がる。

(むうゝゝ……)

絶対エスタが驚くようなのを取ってきてやる!

トタトタと俺は“家”から離れた。

(なにかあるかな?)

キョロキョロと注意深く周囲を見ながら俺は歩いていく。

(あれはちがったし……)

この辺りは全て終わったか?

(ほかのくさは……)

遠出しなれないかな?

俺は更に奥に行くために駆け出した。

何で俺がこんな遠い所までウロウロとしているかと言うとエスタが一言……

「腹痛いから薬草取って来い」

から始まった。

それで俺は片っ端から目についた草を抜いてはエスタに届けたのだ
が……見事に全て違った。

この辺の草は全て渡したので俺は今遠くの森へと向かっているのだ。

(うわああ……)

森はまた荒れ地とは違う植物で溢れていた。

(このどれかに、あるかな?)

俺はキョロキョロと周りを見渡しながらかさかさと進んで行く。

『クウウウ……』

「……え?」

今にも消えそうな動物だろう鳴き声。

俺はピタリと動くのを止める。

『クウ……』

(こっ……ち……?)

俺は声の主がいるだろう場所へと足を向けた。

かさかさと草を分けていくと不意に少し開けた場所に着いた。

(ひろ……)

キョロキョロと周りを見回すと開けた場所のちょうど真ん中くらい
にこの世にはいないだろう、と思うほどの不思議な色をした鳥が血

まみれで倒れていた。

俺はパタパタと駆け寄って行く。

（えー…と？）

とりあえず赤い液体をどうにかしなければ、と思った俺はその近くにあった草を沢山抜いていきそれらを地面に引く。

そしてそつと鳥を抱え引いた草の上にゆっくり乗せる。

（んー……？）

しばらく考え、思い出した。

エスタが同じように赤い液体を流していた俺に深い緑色をした葉っぱをギュッと握ってポタポタと出てきた汁を塗ると血が止まった気がする。いや、痛みが引いただけだったか？

（どっちはわからないけど……）

やってみるか。

そう思った俺は怪我をした鳥から離れ、あの深い緑色の草を探した。

「……………あ」

あの鳥から大分離れてしまったが、俺は湖の中にある深い緑色の薬草を見つけた。当然、その薬草が生えている場所が水の中なので取るには潜らなくてはならないが。

「……………」

俺はポチャンと先に足を入れ、スルリと水の中へ入る。

スウ……と息を入れ、止めてからバシャと潜る。

水の中は澄んでいてヒョロリとしていたり、プクツと膨れていたり、大きいものから小さいものまで見たことのない生物がそこには住んでいた。

俺は見知らぬものばかりでキョロキョロと周りを見ていたがそうするとあまり息が持たなくなり、何回か浮上するということが続いた。だが、やがて学習しキョロキョロと周りを見ることをせずに探していた薬草を探しはじめる。

（あった！）

一生懸命に手を伸ばし、プツリと薬草を抜いた。

俺は薬草を握りしめながら浮上する。

「ぷはっ……はぁ、はっ」

少しだけ息を整えてから陸に上がる。

（いそがないと……）

俺は陸に上がってからあの鳥の元へ走り出した。

（……いた）

俺が鳥を見つけた場所へ着くとそこには俺が見つけた時と何一つ変わらないうままで弱っている鳥がいた。

（こうしてつと……）

俺は取ってきた薬草を搾り、出てきた少ない液体を鳥にかける。

（……えーと）

この先どうするんだっけ？

俺がどうするか分からずにうろうろしていると鳥がクウ……と今だ弱々しくはあるが初めよりかは力強く羽をばたつかせながら鳴いた。

「……どうしよう」

これをとめないで、と俺は流れ出る血を見ながら言う。

『いや、大丈夫だよ』

鳥のクチバシが動き、幼い子供のような声でそう答えた。

「……え？」

『君が取ってきた薬草は血止めの効果があるやつだ。だから少し時間が経てばこの血は止まるよ』

（とり……と……り……）

「う……」

『う？』

「うぎゃあああああああ！」

俺は悲鳴を上げながらズザザアと急いで鳥との距離をあける。

そんな俺に不思議そうに鳥は聞いてきた。

『おいおい、どうした？』

「……はなしてる」

えすがどうぶつははなさないっていった、と俺は付け加える。

『ああ……成る程』

納得したように首を縦に振りながら鳥は言った。

『確かに動物は話さない。だが、全てが動物とは限らないんだよ』

「……………」

『うーん……そうだねえ』

キョトンと話している事が分からずに首を傾げると鳥はうーんと唸りだす。

やがて鳥は唸り声を出さなくなり、クチバシを開いた。

『似ている姿をしているからって同じ種族ではないって事だよ』

「……………」

『……………うん。あれだ……皆には秘密だけれども中には会話が出来る優秀な動物がいるんだよ』

「ほかにもいるのっ？」

勢いよく聞いた俺に鳥はスッパリと言った。

『さあ？』

「……………」

（……………なに、こいつ？）

俺は不信の目で鳥を見る。

『……………そんな目で見ないでくれる？』

「……………うそつき」

『え？何処が？』

「いるっていったのにいないっていう」

『僕が見たことが無いって言っただけだろ！』

「えすたはみたこと、かんじたことをしんじろっていった」

“喧嘩”をした時にエスタはよく言ってる。

『ぐう……………仕方ないなあ』

不確かな事を言ったのは僕だし……と鳥は呟いてからバサリと羽を広げる。

『うん、飛べなくはないね。……………さて』

そう言いながらバサリと鳥は羽を動かし空に浮く。

『君に……そうだな、贈り物でもしよう』

「……おくりもの？」

（おくりものってなんだ？）

後でエスタに聞こう。

『そう、贈り物。でも今すぐじゃないよ』

君が一番必要な時に必要だと思った物をあげる、と鳥は告げる。

『手当てをありがとう。僕は行くよ』

またね、と言ってバサリと羽ばたいたかと思うと鳥は消えた。

（あ……れ？）

「いない……………」

キョロキョロと辺りを見回すが地面に血が残っている程度で鳥がいた気配はもう無かった。

「……………」

俺は風が吹き抜ける中ただ呆然としていた。

四話（後書き）

「……もう無くなったと思ったんだが」

俺は出された紙をパシリと受け取る。

「前は作者が忘れただけだからな」

「……そのまま忘れればよかったのに」

ガサリと紙を開きながら俺は呟いた。

「で、なんだって？」

「……奴隷についてだってさ」

「あ？ 奴隷？」

じゃ俺はノータッチだな、とエスタージオは言う。

俺は眉を潜め、紙を握り潰す。

「俺も知らないな」

それにどうせ作中で説明あるだろうし。

俺は握り潰した紙を無言術にて燃やした。

五話

俺が鳥に会ったあの日よりも大分……いや、会話が成立するようになったある日、エスタが昼飯を食い終わり寛いでいる俺にこう言った。

「常識講習第一回開始！」

「……じょーしき？」

「そうだ。オマエも大分言葉を理解しているから、これからはこの世界の常識を教えよう」

知らないと恥ずかしいからな、とエスタは言う。

「まず、この世界には魔法使いとそうでない者に分けられる」

「まほう……つかい」

（それ、あのこえがいつてた……）

確かマグル……とかも言ってたな。

「ああ、魔法使いだ。魔法使いとは魔法が使える。魔法は……」
そこまで言ってエスタはポリポリと頭をかく。

「んー…魔法使いに会ったら嫌でも見るからな。そんな時に教えてやる」

エスタはそんで、と話しを続ける。

「魔法が使えない者……俺やオマエの事をマグルと言うんだ」

まあ、あいつらがそう呼んでいるだけだな、とエスタは眉を潜め嫌そうな顔をしながら言う。

「魔法界の事は詳しくは知らんが……知っている分を教えてやる」
知らないよりはマシだろ、とエスタは吐き捨てる。

「魔法界はどうやらトップに偉い家があるらしい。んでその次に魔法使いを管理している魔法省があるんだそうだ」

そう言った後にエスタはため息をついた。

「だが、風の便りだとうやらそのトップも形式的なだけで魔法省が一番偉いらしい」

「…………じゃあ、えらいのは？」

「魔法省だ」

エスタは迷わず言い放った。

「後は……奴隷がいるとも聞いたな」

だが、とエスタは眉を寄せて続ける。

「多分、嘘だろう。黒人なら分かるが同じ白人を奴隷にするなんて考えられん」

エスタはそう言って眉を潜めたまま黙り込む。

（……………どれい？）

奴隷とは何だ？

奴隷が何かを知るために俺はエスタに質問をする。

「えすた、どれいって？」

「……………」

しかしエスタは余程考え混んでいるのか返事をしない。

「えゝすゝたー！」

俺は気づかせる為にペチペチとエスタの足を叩きながら名前を呼んだ。

「ん？あ……どうした？」

やっと俺に気づいたエスタが慌てて問い直す。

「どれいってなに？」

「あー…奴隷はな自由がない人の事だ」

「じゆう？」

「ああ。何も出来ないんだよ。一人で遊ぶ事も、昼寝をする事も、好きな時に物を食べる事も出来ない」

何で、だろう？昼寝をしたいのならばすればいいし、食べたいのならば食べればいい。

自由が効かない理由が分からない俺はエスタに問う。

「なんで？」

「あー…きつびしいー奴らが居るからだな。もし勝手に昼寝なんかしたら蹴られたり殴られたり……飯は確実に無いし、場合によって

は大人の世界を無理矢理って事もある」

「……おとなのせかい？」

「……………それはまだ知らなくていい。いや、知るな」

エスタはボンと俺の頭に手を乗せながら言った。

「後は……ああ、この土地の事も知つとかなんといけないな」

エスタはスウと一息し、話し出す。

「此処は“荒れ果てた荒野”と呼ばれている。この荒れ果てた荒野は……そうだな」

エスタはうーん……としばらく唸った後に口を開いた。

「皆、身寄りが居ない。一人だ」

オマエみたいに捨てられたり、職が無くなり離縁されたり、犯罪者とか、とエスタは眉を潜めながら言う。

「そういう奴らが居るから当然治安も良くない。殺し合いなんて毎日だ」

オマエは嫌でもそんな毎日になる、とエスタは言う。

「ま、俺が死なない程度には鍛えてやる」

そう言っただけでエスタは頭に掛けていた手を離れた。

「ラク、常識講習第一回はこれで終わりだ」

今からはと言いながらエスタは距離を空ける。

「“喧嘩”の時間だ！」

エスタはそう言っただけで走って来る。

「……………」

いきなり始まった“喧嘩”に驚きながらも俺は何時でも動けるように体勢を低くする。

俺の元へと近づいて来たエスタはビュツと右手で殴りに来る。

俺は少し右に動き、エスタの殴りを避けてからエスタの足元を狙い蹴る。

しかしエスタは俺の足に気づき僅かに飛んで交わす。

そしてエスタはニヤリと笑いながら着地し、俺を目掛けて腕を振り落とした。

「ぐっ……」

蹴り終えた体勢のままだった俺はもろにその攻撃を受ける。

「まだまだだな。一撃目を喰らわなくてはなったが、攻撃し、交わされてからの二撃目が甘い」

だが成長としては速い方だ、とエスタは言う。

「次、行くぞ」

さっさと立ち上がれとエスタは言って俺から距離をとった。

「むう………」

“喧嘩”が終わった時にはエスタは何事もないのに対し、俺はボロボロなのがいつもだった。

「まだまだ甘い」

そう言いながらエスタはクシャクシャと俺の頭を撫でる。

「さ、飯を取りに行くぞ」

そう言いながらもエスタは俺を見ながら笑っていた。

(……………ぜったい)

ぜったい、いっぱつなぐってやる！

俺はいつの間にか先に歩いているエスタに向かって駆け出した。

五話（後書き）

「エスタージオ」

俺はふんふん鼻歌を歌いながら絵を描いているエスタージオに問う。

「なんだ？」

「作中の“喧嘩”ってあれは格闘を教えているんだよね？」

「あー…まあそうだな」

だが、まあ傍から見たら喧嘩っぽいからそう呼んでいるんだ、とエスタージオは言う。

「別に実技練習でも良い……よな？」

「……………あ」

それもそうだな、とエスタージオは呟く。

「でも、ま、喧嘩の方が覚えやすいし」

どっちでも内容に変わりはないからな、と言ってからペタペタと絵を描きはじめた。

「あ、ところでオメエは誰だ？」

……………今更？

「教えない」

俺はニヤリと笑いながら告げる。

「教えたって別にー」「じゃ、またなー」おい！オメエ！！」

六話

(……………あれ?)

ジンジンと太陽が照り付ける中、俺はエスタと一緒に食料(動物か人間)を探している時だった。

(……………きのせいかな?)

ちいさくて、きらきらして……………うすいそらをはなち、なんかぼわぼわしたかんじがつたわる。

それはビュンビュンと不定期に、しかし物凄いスピードで飛んでいる。

そして、きらきらとしているそれには嘴があった。

(……………とり?)

俺は隣でキョロキョロと辺りを見回しているエスタの服をグイグイと引っ張る。

「えすた、あれ」

なに?とビュンビュン飛ぶやつを指しながら聞く。

「ん?……………何の事だ?」

そう言っただけエスタはキョロキョロと指差した辺りを見る。

「あれ!」

俺は指を飛んでいるところを的確に指差す。

「……………何もいないぞ?」

暑いから何か幻覚を見たんだな。少し木陰で休もう、とエスタは言っただけ俺の左手を掴み木陰へと歩く。

(……………えすたにはみえないのかな?)

あんなにもきらきらしているのに。

ドサリ、と木陰に着いたエスタは座る。

「ほら、ラクも座れ」

俺はエスタの言う通りに座るが、目はずっとあのキラキラを追っていた。

(……………あ！)

キラキラがビュンビュンと俺の近くへとやって来る。

(そーっと……………)

俺はユツクリとキラキラに向けて手を伸ばす。

(もうすこし……………)

俺はあと僅かなキラキラへと必死に手を伸ばす。

「あ……………」

しかしキラキラはビュンと俺の手から上へと避け、逃げた。

「にげちゃった……………」

(あと、すこしだったのに)

「……………ラク？」

エスタはまだ見えるか？と眉を下げ心配そうに聞いてくる。

「いたのににげた」

「……………そうか」

もう少し居るから、と言ってからエスタはゴロリと横になり、目を閉じた。

(つかまえたかったな……………)

むう、とモヤモヤした気持ちのまま、ゴロリと横になる。

「……………あ」

横になってから、上を見上げた時だった。

「……………いた」

生い茂っているように沢山ある葉っぱの中、キラキラが太陽の光りに反射しながらも飛んでいた。

(……………でもとどかない)

精一杯手を伸ばしても全然足りなくて、空を切るばかり。

(……………むり、なのかな)

俺は少しずつ腕を下げる。

「さわりたいな……………」

俺はポツリと呟く。

それがあのキラキラにも聞こえたかは分からないがビュンビュンと

もうスピードで下りてきてちょこん、と俺の手の上に留まった。

「うわぁ……………」

手に乗ったキラキラはよく見て見ると羽は長いが体は小さくて丸く、鋭く嘴が伸びている鳥だった。

俺の手に乗ったキラキラの鳥は先程みたいに逃げる事はせず、長い嘴を長い羽へと当てて羽を整えていた。

（触っても……大丈夫かな？）

そろそろと手を伸ばし鳥に近づける。

そして、そつと触るとフワリとした感触が伝わった。

「うわぁ……………」

その感触が気持ちよくて、二度、三度と撫でて行く。

俺がニコニコと笑いながら撫でていてもキラキラの鳥は嫌がる様子を見せず羽を整えている。

「きれい……………」

綺麗なキラキラの色に見とれながらも俺は満足するまで撫で続けた。

「またねー！」

隣でいびきをかき始めたエスタを無視し、満足するまで撫でた俺はキラキラな鳥から手を離す。

キラキラな鳥は手を離れた瞬間にビュンと何処かに去って行った。

「えすた……………」

俺はクルリと振り返りエスタの元へと向かう。

「えすた！！！」

エスタの元へと着くなり俺は大きな声を出しながらブンブンとエスタを揺する。

「えーすーたー」

「……………んあ？」

ああ、ラク……と言いながらエスタは目を擦り、起き上がる。

「寝てたのか……」

ボリボリと頭を掻きながらエスタは言う。

「まだ陽はある……か」

空を見ながらエスタはこう呟いた。

「ラク、行くぞ」

そう言ってエスタは立ち上がった。

「今うろつけば鳥か兎くらいはいるかもしれん」

最も、陽が暮れるまでだからな、とエスタは続ける。

「陽がオレンジ色で一部が沈み始めたら“家”まで戻って来い」

迷子になったら動くなよ！とそう言ってエスタは駆けて行った。

（はやく、いかないと）

じゃないとかえれなくなる。

俺は食料を見つける事と同時に帰る事を意識しながら駆け出した。

六話（後書き）

「今回あいつは休みだそうだ。えーっと今回は……」

「作中にあったキラキラについて？」

俺は紙を見ながらああ、と貰った作品を読み始める。

「多分……エスタージオが見えていないからスニジェットだと思うけど……」

俺はペラリと貰った作品をめくる。

「丸くて羽が長い。くちばしも長くて素早い……スニジェットの特徴と同じだね」

「……スニジェットは魔法生物で親・子世代にはもういない生物だ。スニジェットは丸い鳥で動きが素早いためマグルに見る事は出来ない」

だからエスタージオには見えなかったんだよ、と付け加える。

「……俺らが死んだ後からはスニジェットはスニッチの代わりとしてクイディッチに使われたりして滅んだ。因みにスニジェットはとても脆いから握り締めるだけでブチリと死んだんだよ。だから俺も何回か聞いたんだけどスニジェットを握り――」

パラリと紙が落とされる。

「それ以上は止めて欲しい」……………一番これから楽しいんだけど……………まあいいや。またな」

七話

「……ん？」

俺がエスタと暮らし始めてからかなりの時間を共にしたある日、エスタは目を細めながら言う。

「エスタ？」

俺はもう、綺麗に話せるようになったし、獲物を取る事も、最近人は殺せるようになった。

「……いや、何だか今日は人が多いなと思ってな」

「……人が多い？」

俺は眉を潜めながらエスタが見ている方向に顔を向ける。

（百……近くは人がいるかな？）

“荒れ果てた荒野”に人が来ないわけではない。しかしそれは此処に住むことになる奴らしか居ないので一月に一、二人くらいしか居ない。

（あんな人数で来るなんて……）

まるで何かを駆除するみたいだ。

「まだ、遠いが……」

ポツリとエスタは言った。

（……………あれ？）

よく見れば全員が緑やら青やら赤やら色んな色を纏っていてズキズキと鋭く感じるのもあればユラユラとしたものもある。

（……………？）

これは……何なんだろう？

「おい、ラク。行くぞ」

俺の思考を遮るように不意にエスタが声をかけた。

「行く？」

「今は遠いがこっちに来るかもしれん」

そうなればあの人数に殺られるだけだ、とエスタは言う。

「オマエも強くはなったが……二人ではダメだ」
だから逃げるぞとエスタは言う。

「少し北に行く。あそこなら人が僅かに居る」
それに奴らがそこまで来ないだろう、とエスタは言い立ち上がる。
「分かった」

俺は立ち上がり、すでに先を歩いていたエスタの元へと駆け出した。

「此処なら大丈夫だろ」

エスタはそう言って立ち止まる。

「さて……ラク、今日の食料はオマエに任せる」

俺は薪やなんか燃えそうな物を取ってくる、とエスタは付け加えて言う。

「陽が暮れる前には此処に集合だ」

そう言ってエスタは地面に大きく丸の印を書いた。

「ほらっ」

そしてエスタはポイツと剣を投げて寄越した。

「……………っ」と

俺はそれをガシャンと両手で受け止める。

「じゃ、またな」

そう言ってエスタは駆け出して行った。

（……今日は何にしよう？）

兎か鳥か……魚でも良いし、人間を捌いてもいい。

（出会ったものでいいや！）

俺はエスタとは逆の方向へと駆け出した。

(んー……)

ガサガサと音を立てながら俺は森の中を歩く。

(……動物がいない)

いつもならよく見かける動物が今日はパツタリと見かけない。

(……人でも良いんだけどなー)

動物とは違い、殺すさいに煩く喚き場所が見つかりやすくなるがこの際それでもいい。

(………あれ?)

チラリと僅かに人影が見える。

俺は目をこらしそれを見てからニヤリと笑った。

(一人だ!)

一人ならば楽に殺れる。

俺は足音と気配を消ながらユックリと獲物に近づいていく。

「何なんだ? あいつらは……」

近くにつれ、獲物が息を切らし苦しそうな表情で言う男性だと分かった。

(男……)

俺は僅かに眉を潜める。

(男の肉って固いんだよね……)

でも、お腹はいっぱいになるけど。

俺は隠れられる草むらで足を止め息を最低限にまで殺し、獲物が近づいて来るのを待つ。

「信じられねえ……何であんな事を……」

こっちの上は何をしているんだ、と男はボヤキながら隠れている俺の近くへと来る。

「あれじゃ、まるで――」

(今だ!)

俺はガサリと草むらから出て首を撥ねられるように剣を構える。

「俺達を……うわぁ！」

男は草むらから出た音でこちらに気づいたのか驚いた表情をする。しかしすぐさま警戒し、体勢を整えた。

俺はそんな男の懐へと向かうふりをし、男へと突っ込むが直前でクルリと回転し男の真横を通り抜ける。

だが、俺は通り抜けるさいに体重をかけ男の足を踏む。

「って……」

男は眉を潜めそう呟いた。

俺はその隙を見逃さず、すぐさま心臓へ向けて突く。

「ぐっ……」

それは見事にグシヨリと心臓を貫いた。

俺はズルリと剣を抜く。

男は支えていた剣を抜いたからかドサリと地面に崩れた。

（確認しないと……）

俺は男に近づき首に手を当てる。

（………うん）

ドクン、ドクンと脈が動いている様子は無い。

（殺れたね！）

俺は首から手を離し、スルリと方に男の手を俺の肩に回す。

「捌くのは……エスタに頼もう」

ズルズルと引きずりながら俺は歩き始める。

「重い……」

人は死ぬと体重が増えるのかな？

「むう……」

あまりの重さに俺は肩から俺の手を下ろし、腕を掴む。

「よし！」

そしてそのまま俺は引きずって集合場所まで歩いた。

七話（後書き）

「俺が休みから帰って来たぜ！」

バターンと扉を煩く開けながらエスタージオは言う。

「あー…派手に登場した所悪いけど今日はネタが無いから特に何もなくていいって、作者からの伝言」

ペラリと本をめくりながら俺はエスタージオに伝える。

「はあああああああああああああ」

（……すごい音量）

「俺が此処へ来た意味は！？」

「無いな」

スッパリと俺はエスタージオに告げる。

「嘘だろ！？」

「嘘じゃない。またなー」

俺はヒラヒラと手を振る。

「俺の出番が！」

「もう充分出てるよ」

八話

「……エスタ？」

昨夜は俺の企み通りにエスタに持ち帰った材料を捌かせて食べた。ちなみに朝食は昨夜の余り物だ。

「……………ラク」

そんな朝食を食べ終わってからエスタはずっと眉を潜めている。

「あそこを見てみる」

オマエならよく見えるだろう、とそう言いながらエスタは指を指す。

「……………分かった」

俺はエスタの指指した方向を見る。

(あ……………れ?)

そこは昨日と同じ様な集団がこちらに向かっていた。

(あの色も同じだ)

纏っている色も感じるのも同じ。

「エスタ、あれ昨日の……………」

「……………やっぱりか」

そう言っってエスタは俺を見る。

「今からなら間に合うか……………」

「エスタ……………」

ポツリと呟いたエスタの言葉に俺は不安が過ぎる。

「ラク、オマエだけでも逃げろ」

「……………え？」

エスタは、どうするの？

俺がこの言葉を出す前にエスタは告げる。

「俺が此処の奴らと共に時間を稼ぐ。その間にオマエは逃げろ」

「……………やだ」

俺は、一人だけ逃げたくない。逃げるならエスタも一緒だ。

「ダメだ!!」

エスタは眉を潜め、鬼の形相で声を荒げる。

「今ならまだ間に合う！！逃げろ！」

「嫌だ！！」

大きな声で怒鳴るエスタに俺は引かない。

「俺一人逃げるなんてしない！！」

「ちっ……我が儘もいい加減にしろ！」

今は一人でも逃げるのが先だ！とエスタは怒鳴る。

「それに昨日よりもあいつらは上へと上がって来ている。恐らく奴らは一時的な殺しみたいなのもなく、此処にいる俺ら全員を殺す予定だ」

子供だろうが容赦ないだろう、とエスタは言う。

「……………それでも、やだ」

俺は震えながらもハッキリと言う。

（だって……俺が逃げても……）

エスタが言ったように皆殺しに来たならばエスタは死んでしまう。

（それは……嫌だ）

「……震えながらよく言うもんだな。いいから早く——……ちっ」

エスタは急に表情を変え舌打ちをする。

「やけに早いな。もう無理か」

そう言ってエスタは俺をつまみ上げる。

「いいか？もうオマエが逃げる時間もない。逆に逃げてる間に殺される」

エスタは真剣な顔で、話す。

「だからオマエが出来る事は声を出さずに、気配を消すだけだ」

いつもと同じようにしていれば運が良ければ気づかれずに助かるだろう、とエスタは付け加える。

「……いいな？何があっても出てくるな。声を出すな。気配を消せ！」

そう言ってエスタは横の茂みへと俺を投げた。

「ふぎゅ」

ズシャと俺は顔から地面に着地する。

（痛っ……）

涙目になりながらも俺は草影で見つかりにくそうな場所を探す。

（あった！）

その場所へと俺は座り、エスタ達が見えるように草むらを少しだけ分ける。

（エスタ………）

俺は掻き分けた小さな隙間へと顔を向けた。

「……来たか」

エスタはポツリと呟いた。

「部長、此処で最後ですかね？」

「ああ。あちらの大臣から聞いた話しではこの集落で最後だ」

全く、何で俺達がこんな事を、とあいつらはエスタ達の存在がまるで無いように話していく。

「ったく……力があるからって仕事を回し過ぎだろ」

「……………力だと？」

力、という単語にエスタの眉が寄せられ不機嫌そうになる。

「ぶーちよ、とりあえず……先にこいつら殺りません？」

エスタ達に気づいたのか先程とは違うやつが部長とやらの聞く。

「……………そうだな。ただし、向こうの要望で一人は残す事だ」

「「了解」」」

部長、という奴以外が一斉に言った次の瞬間にはあちらこちらに緑の閃光が広がった。

そして緑色が収まったかと思えば周りいた人間はバタリバタリと倒れていった。

「オマエら……魔法使いか！！」

エスタは先程よりも憤怒した真っ赤な顔で叫ぶ。

（魔法………使い）

ならばあれが魔法か？

「死の呪文だ。最も、貴様は向こうからの要望で死の呪文では死な

ないが。エスタージオ・ニーランド」

部長はそう言って、纏っている薄い緑とは違う薄い青色で円を書いていく。

「貴様には燃やすように言われてる」

最もその前に前座があるがな、と言いながらも円は完成し中に変な模様を書いていく。

「前座？それよりも、何故俺の名を知っている」

エスタは不思議そうな顔をする。

「それ以上は言えないな。向こうからのストップがかかってる」

始める、と手を振りながら言う部長の声で奴らは杖を振り下ろしながら一斉に駆け出した。

「っ……何をした」

普段のエスタならヒョイヒョイと避けるなり動くのに今はただ上半身をモゴモゴとしているだけだった。

（……………エスタ？）

「っ……何をしやかった！」

「少し動きを止めただけさ」

逃げられないようにな、と部長は言う。

「魔法陣も完成したし……ちょうど良かったな」

「何が……」

しかし、エスタが言い終わる前にあいっらはいつの間にか持っていた剣で四方八方から刺した。

「ぐっ……」

エスタはゴポリと血を吐き、周りの地面は赤い血へと染まっていく。

「……ではな、エスタージオ・ニーランド」

そう部長が言った後に書かれていた変な模様は消え、代わりにエスタの足元からゴォォと炎が現れた。

「ぐ……う、ああああああああ」

エスタの、苦しそうな叫び声に俺はビクリと反応をする。

（エスタっ！）

俺は立ち上がろうとし、立ち止まる。

……何があっても出てくるな。声を出すな。気配を消せ！……

(エスタは、こう言った)

俺だけでも、生きて欲しくて。

(~~~~~)

俺は、涙目になりながらもストーンと座る。

「さて……一人だけ残さなくてはいけないんだったな」

残りは殺せ、と言い放たれる。

「「了解」」」

そしてあいつらは剣を持ったまま、近くにいた奴らを斬っていく。

目の前には見慣れた赤い血が舞い、地面は赤い色で染まっていく。

「うわああああ」

そして斬られた時の叫び声が響き渡る。

(エスタは……)

エスタは生きろと言った。ならば俺は気配を、呼吸を殺さなければいけない。

だが俺の思いとは裏腹にカタカタと体は震えていく。

「……これで残り一人、か」

すでに地面は赤黒くなってしまった時に部長が言う。

「お前ら、一人残ったからこれで仕事は終わりだ」

向こうも文句言わないだろう、と部長は疲れた表情で言う。

「よっしゃー！ぶーちよ、今回頑張ったから何か奢ってくれない？」

そう言いながらあいつらはザクザクとこの場所を離れていく。

「俺ん家の箒でいいならやる」

「えー？ぶーちよのところの箒、乗りにくいんだよなあ」

「貴様……良い度胸だな？」

「わっ……すみません、ぶーちよ」

「大体そのぶーちよってのは止めろ！」

「ぶーちよはぶーちよです」

ギャンギャンと響き渡るくらいな大声で言いながらもあいつは見え

ないところまで去って行った。

「こんなっ……こんな事を！」

魔法が使えるからって、と生き残っただろう人が言う。

「……許さない。たかがマグルでも、許しはしない」

ザクリと立ち上がる音が聞こえ、やがて殺気を纏いながら去って行く気配が伝わった。

「……………エスタ」

俺はフラフラと、エスタが居た……今はただの黒焦げな何かへと向かう。

そしてその近くでペタリと力無く崩れる。

「魔法使いって……あんな事をするの？」

何も抵抗出来ない俺達に、と震え、涙目になりながらも言い続ける。

「ねえ……！エスタ、答えてよ！」

もう、生きてない事も分かっている。

だって目の前にある黒焦げな何かはどう見ても人間ではないから。けれど俺は赤黒い地面へとだらけた手を土を削りながらも握りしめる。

「エスタ……………！」

カラカラになりかけな声で、俺はエスタの名前を呼び続けた。

八話（後書き）

「あー！もう俺死んでんじゃねーか」

部屋に入ってきたエスタージオは叫び出す。

「もう此処でしか出番がない……」

ガクリと肩を落としたエスタージオ。

「……俺、此処でもエスタージオの出番後少しって聞いたんだけど」

俺は渡された紙を見ながらポツリと告げる。

「……………は？」

エスタージオは信じられないのか間拔けな声を出す。

「まあ、噂だし……気にするなよ」

俺はポンと肩に手を置きながら適当に慰める。

「俺とオマエしかいないのに噂なわけないだろ！」

ガウと噛み付いてくるエスタージオに俺は自分が思っている事を告げた。

「本編で死んだから此処でも解雇されたんだろ」

九話

「……………はっ」

エスタが殺されてから数日後、俺は“荒れ果てた荒野”から出る為に歩き続けていた。

「……………もう、少しだよね……………」

辺りを見回しても異臭を放ち始める死体と赤黒い地面しか見えず何処までが“荒れ果てた荒野”なのか分からないけれど。

「でも……………此処から出ても……………」

何をして良いのか分からないよ……………」

「……………まあ、出てからでいいや!」

今はとにかく臭い此処から出ないと!

俺はそう意気込み、駆け出した。

「はっはっ……………ぐえ……………あれ……………は?」

日が暮れ始めた頃、ずっと走ったり歩いたりしていた俺の前には今、地面に印されている赤い線があった。

「……………?」

この赤い線は何だろう?

俺はポリポリと頭をかきながらじっと赤い線を見る。

(……………まあ、いいや)

俺はヒョイとその赤い線を越える。

(……………行こう)

俺は振り返りもせずに駆け出した。

日が暮れ、夜になっても敵を警戒しつつ進んだお陰か日が上り人々が活動する時間に俺は初めて“街”へと来ていた。

(……………人がいっぱい)

こんなにも集まって何をするのだろうか？

キョロキョロと見回しても人しかない。

「うわっ……汚っ」

「何処の子供よ……」

周りからはポツリポツリと汚い、や親は何をしているのかしら？と言いながら俺をジロジロと見てくる。

(……………に?)

何で俺をジロジロと見てくるの？

俺はジロジロと見てくる人間達を恐る恐る見ていく。

皆、エスタやあそこに居た人達とは違う目で……異物を見るような目で俺を見下ろしている。

(っ……な……ん……で?)

俺はジロジロと見られている理由が分からず、ジリジリと後退していく。

「おい、誰だ？こんな所に餓鬼を置いたのは」

後ろから聞こえた怒りを含めたような低い声と共に襟首を捕まれ足が地面から離れる。

「……此処にいる奴らではないか」

「ウゝェルトさん！」

俺を捕まえている奴がめんどくさそうに言った後に大声が響いた。

「……フィルか。どうした」

「荒れ果てた、荒野でっ」

茶色の髪で灰色に近い黒の目を持った男性が息を切らしながらも告

げる。

「あそこにいた皆……殺されているそうです」

「……………何だと？」

どういう事だ、と俺の襟首から手を離す気配を見せずにそいつは問う。

「“荒れ果てた荒野”の向こう側の村へ行っていたんですが……そこに“荒れ果てた荒野”から血まみれの奴が来たんです。そしてそいつは『俺は荒れ果てた荒野から来た……お前達からしたら落ちこぼれだ！だが、今は関係ない！なぜなら……俺達はマグルだからって魔法使いに皆殺されたからだ！』とかツラツラ話していました。そして最後に共に復讐しようとも言っていましたね」

「そいつの言う事は正しいのか？」

「……………そう思いますよ」

思う？ 確実ではないのか？ とそいつはザワザワと周りが騒ぎ出したなか問う。

「そいつも殺されました。復讐どうたら言った後に緑の閃光で呆気なく……………」

今、向こうの村ではあいつが言った事を真実だと受け止め、殺気立っています、と茶色髪は眉を歪めながら言った。

「……………いくらあそこに居た奴らが落ちこぼれだとしても、殺されたのは同じマグルだからな」

それに微かに家族なり縁を持っていた奴もいる、と聞いたしなと近くに居たせいか小さくポツリと言った言葉も聞こえた。

「……………こんな事をしている場合ではない」

そう言って俺を掴んでいた手を離す。

「ぶっ……………」

結構な高さから落とされた俺は変な声を上げ顔から地面にぶつかる。

「向こうを止めなければ……魔法使いと殺るなんて無駄に死ぬだけだ。フィル！」

「分かってます」

俺が涙目になりながらも顔を上げた時には周りにはバタバタと駆け出していて誰も俺を見てなんかいなかった。

（誰も、見てない）

俺はホッと胸を下ろしながらも立ち上がり、いち早くこの“街”から出るために駆け出した。

九話（後書き）

「今回は結構遅かったな」

ズズッと紅茶を啜るように飲みながらエスタージオは言う。

「作者が話しが思い付かないって言って逃げていたからな」

紅茶は啜りながら飲むのではない、と軽く注意をしながらも俺はペラペラと本をめくる。

「あ、そうだ」

「あ？」

「エスタージオ、お前の解雇が確定したって作者からの伝言だ」

俺はペラリと貰った紙をエスタージオに見せる。

「……………嘘だろ？」

「交代は……外伝あたりだって」

「……………」

黙りこんでしまったエスタージオに俺はニヤリと笑って聞こえるように言う。

「次は誰だろうね？」

それを聞いたからかどうか分からないがいきなりエスタージオが叫びだす。

「……何で解雇おおお」

「嫌い!!」

俺は耳を塞ぎながらエスタージオを蹴り飛ばした。

十話

あれからあちらこちら色んな街へと入ったけれど“親”というものが居ない俺は奇妙な目で見られる事が多かった。また、邪険に扱われる事も多かった。

「ほらっ、行け！」

そう言いながら僅かにパンをくれた人は俺の背中を押す。

俺は何も言わずに僅かなパンを貰った人に促されるままその場を去った。

（今日は何処で食べよう？）

俺は街から出てキョロキョロと周りを見渡す。

「あそこにしよう！」

俺が目にした場所、それは人間ならば近づかない切り立った崖だった。

「よっ……と」

ゆっくりと進んだその崖の先端近くに俺は腰掛ける。

俺は足をブラブラとさせながら貰ったパンを取り出す。

「またこれえ……」

取り出したパンは、先端に向けて細くなり、かなり固いパンだった。

「今日は……昨日よりは大きいかな？」

昨日よりは指一本分くらい大きい気がする。

広げた手の平と見比べながら俺はそう思う。

「いったきまーす！」

ニコニコと笑顔が漏れながら俺はパンにかぶりつく。

「んぐっ……ふぁた」

グイグイ引っ張ったりギリギリ歯を左右に立ててやっとなブツリと噛み切った。

「……………」

そこからはひたすら噛みつづけパンを咀嚼していく。

「……ねえ!」

幾度となく咀嚼しやっとな飲み込めた頃、真横から声をかけられる。

「……………っん?」

(……………真横?)

真横からの声に驚き、俺は顔を向ける。

そこには俺よりかなり大きい女の子が俯いてた。

「……たの、せいで!」

「……………」

ポツリと呟いたかと思うと鬼の形相で顔を上げ叫んだ。

「あんたの、せいで!うちの評判落ちたじゃない!!」

そう言って女の子は

ドンツと俺の背中を押した。

「……………え?」

俺がそう呟くがその時は既に遅く、体はほうり出されていた。

「うぎやあああああああああああああああ」

俺の叫び声と共にゴウゴウと風を切る音が聞こえる中俺は先程居た場所へと目を向けた。

(……………え?)

そこには嬉しそうにニコニコしながら去って行く女の子が居た。
スウ…と体の何かが冷めていくような感覚がする。

(……………笑って、た)

人が、落ちているのを見て笑っていた。

(……………)

ゴウゴウと風を切る音の中、俺の気持ちに恐怖はなかった。
ただ、体が気持ち冷えていくだけ。

(……………そんなに)

落ちていく俺を見て笑うほど、邪魔だった?

ゴツンと体が地面に当たり俺はプツリと意識を失った。

(……………此处、は?)

少しずつ瞼を開けていくとうっすらと青色が見えてきた。

(ああ……………そういえば)

何者かに落とされて……………落とされて?

(何でそうなったっけ?)

……………分からない。

(“荒れ果てた荒野”が何とか言っていなかったっけ?)

いや、それはまだ前な気がする。

(んー…マグルがどうか)

誰かが言っていた……………よーな……………

(……………誰だっけ?)

「……………分からないな」

俺はゆっくりと起き上がる。

「知識ならあるけど……………俺の名前とか」

今まで何をしていたのかが、綺麗に分からない。

(……………っ)

記憶を思い出そうとしたからかズキリと頭が痛む。

(いっ……………)

ズキリズキリと痛む頭に同じく痛む右手を無理矢理動かし抑える。

「あちらこちら痛い……………」

しばらく動くのは無理そうだな。

俺は右手がヌルリと血に染まっている事にも気づかずただ空を見上げていた。

十話（後書き）

「うわぁー…」

貰ったばかりの内容を読みながら思わず言葉が漏れる。

「女の子に落とされてる……」

「そいつぁ間抜けだな」

フンツと鼻で笑いながらエスタージオは言う。

「落とす奴もどうかと思うが落とされた方は間抜けだ」

そいつの気配に気づかなかったって事だしな、とエスタージオは付け加えながら言う。

「……………」

その言葉に俺はただ、黙るしかなかった。

「ま、記憶を無くした様だしラクはもう無理だろ」

俺も交代するし、後は文句言いながら残り少ないのを見るだけか、とエスタージオは言いながら寝転ぶ体制に入る。

「さて、寝るか」

「寝るな」

「お休みー」

俺の言葉も虚しくエスタージオは睡眠へと入ってしまった。

「……間抜け、かぁ」

俺は突き落とされたシーンをボンヤリと見ながら呟いた。

外伝・情報屋（前書き）

短いですが十話で一幕終わりです。

あ、一幕とはプロットに書いている一区切りみたいなものです。確か四幕十プロローグとエピローグだったかと。

また、外伝（この話しを含む）を二つ投稿した後、十一話を載せません。

外伝・情報屋

「んー……？」

ただ今、エスタに言われて薬草を取って来るように言われ森にいる俺……ラクです。

「これは……なに？」

現在、俺の前にある物……白い、フワフワした物体。

（……食べ物？）

俺は手を伸ばし、ギュツと握りしめる。

『キャン！』

（キャン……？）

甲高い声が聞こえたかと思えば、グルル……と威嚇をする声が聞こえガサリと立ち上がり白い物体の先が見えた。

「あ………」

俺が現在進行で握っていた物は白く、大きい犬の尻尾だった。

『グルルルウ』

俺はパツと犬の尻尾を離すが時は遅く、犬はこれでもか、とシワを寄せ警戒をしている。

『ワンッ！』

大きく吠えたかと思えば白い犬は噛み付かんばかりの勢いで俺目掛けて走って来た。

「ごめんなさいいいい」

俺は謝りながらも白い犬から逃げ出す。

『バウワウ！』

犬は許す気はないのか、スピードを落とさずに追い掛けてきた。

「え……エスターアアアア！」

俺はエスタの名前を叫びながらエスタの元へと向かった。

「エスターアア!!」

最近やっと会話が出来るようになったラクが俺の名前……いや、あだ名を叫んでいる。

（何をしたんだか……）

正直、自分が子供を拾うなんて天地がひっくり返るくらいに有り得ない事なんだが更に拾った子供は何かと問題を起こしたりして正直疲れていた。

（やっと薬草を取って来るって事で離れたんだが……）

俺はため息をつく。

（別にあいつを嫌っているわけではないんだがな……）

ただ大人には一人になりたい時もあるのだ。少し前まで独りだったのでよいに。

「エスターアアアア」

たすけてー…と叫びながらラクはドタドタと俺の元へと来た。

「ラク？」

どうした？と俺は付け加えながら問う。

「い……いぬ」

「……………は？」

こいつ……………もしかして犬ごときで逃げてたのか？

俺は呆れながらも、あれ……………と言ってラクが指差した方を見る。

「……………でかいな」

白くてかなりの大きな犬がグルルルウと獲物を捕らえんばかりのスピードでこちらに来ていた。

（……………ん？）

あの犬、前もどこかで見かけたな……

（何処だったかな……）

俺が昔の記憶を引き出そうとしている最中にラクが俺の後ろに回り

俺を盾にする。

「……………おい」

俺はラクに問い掛ける。

「おれじゃむりい！」

ブンブンと首を横に振りながら俺の背中を押す。

（……………俺にしろ、と）

ため息をつきながら俺は犬を見る。

「……………さて、あれだけ肥えているなら」

晩飯に出来るな。

「ラク、今日は贅沢に犬肉だ！」

俺はニヤリと笑いながらラクにそう告げる。

「ちょ……………ちょっと待って！」

（……………あ）

突如響いた声。だが俺はこの声を知っている。

「お前のだったか。セーシェ」

「セーシェ？」

ラクが不思議そうに聞いてくるが俺は無視をする。

（あいつのなら食うわけにはいかないな）

俺は迫って来た犬の体を掴みその上に座る。

『ギュル……………ウ』

苦しそうに鳴く犬に対して俺はニヤリと笑う。

「うわゝ相変わらずな極悪な笑い方」

ってか、ボクのボスタに乗らないでくれる？ そう言いながらセーシ

エはゆっくりと俺達の元へと来た。

「……………お前、何処に居た？」

「んゝ？ 少し左にある高台だよ」

エスタージオも知ってるでしょ？ とニヤリと笑いながらこいつは言う。

「エスタ、このおんなのこだれ？」

ラクのこの言葉にブフゥとセーシェは吹く。

「お、女の子……」

もう、そんな年齢じゃないのに、とか言っているが俺は無視をする。

「こいつはセーシェ、情報屋だ」

だからこいつには気をつけろ、と俺は付け加えながらラクに伝える。

「じょうほーや？」

だがラクは情報屋が分からないのかコテンと首を傾げる。

「可愛いー！！」

「抱き着くなよ、セーシェ」

今にもラクの側に行きそうなセーシェに釘を刺す。

「えゝ：可愛い物には抱き着きたいじゃないか」

「だから言ったんだ。……いや、嫌われても良いなら抱き着け」

ニヤリと笑いながら俺は告げる。

「それは嫌だなー」

そう言いながらセーシェはラクと距離を置く。

「情報屋だったな……情報屋とは何でも知っている奴の事を言うんだ」

だからこいつは俺とオマエと一緒に居ても何も言わないんだよ、と俺は付け加える。

「そうそうー。大抵は驚く君の知り合いでもボクだけは知っていたから驚かないんだよー」

でも君が何処から来たのかまでは知らないけどね、とセーシェは呟いた。

（……こいつでも知らないのか）

こいつはごく僅かだが魔法界の事を知っている凄腕の情報屋だ。

（知らないとなると……）

魔法界の者かも知れねえな。こいつは。

「ところで……セーシェ」

ラクがすごいひとだーとか言っている中俺はセーシェに話しかける。

「こいつをどうにかしろ」

そう言いながら俺は指を今だ座っている犬へと指した。

「あゝ……分かったよ」

とりあえず下りてくれる？とセーシェが言うので俺は立ち上がり犬から離れた。

「ボスタ、ステイ」

襲いかかろうと起き上がった白犬はセーシェが放ったその言葉にすぐに従った。

「すごい！！」

「でしょー？お姉ちゃんは凄いの！！」

キヤイキヤイ何やら話しながらもセーシェはラクの相手をし始める。
(相変わらず仲良くなるのは上手いな)

あいつは誰だろうと仲良くなるのが上手い。それが老人であろうと、幼い子供であろうと変わらない。

俺はラクと馴染みつつあるセーシェに声をかける。

「おい、オマエは飯はどうする気だ」

自給自足なのだ。そんなにラクの相手は出来ないはずなんだが……
そう思って声をかけた俺に対し、あいつはこう言った。

「えゝ……せっかく君に会えたし、ご馳走になるよ」

「あゝあ？」

ふざけんな、と言う俺にニヤリと笑いながら告げる。

「なんなら今日一日この子の面倒見るけど？」

君ならば食料取るの苦労しないし、自由な時間が出来るんじゃないかな？と奴は言い放つ。

「今日一日ボクが増えても問題ないでしょ？」

ラクも一緒に居たいよねー？とセーシェは笑顔でラクに問う。

「うん！！」

ラクは笑顔でこう言った。

「……仕方ないな。そのかわり一日しろよ」

俺はため息をつきながら告げる。

「もっしろーん」

セーシェはしてやったり！と言わんばかりの笑顔で言った。

(……この糞女)

狙ってやがったな？

俺は殺意が立ちながらも食料確保の為に二人から去って行った。

外伝・雪

自分の記憶が無いまま数ヶ月、俺は一人であちこちを移動していた。
(……………さむっ)

今まで何をしていたのかは分からないが、戦闘や薬草、動物・人の殺し方や捌き方などの変な知識だけはあったので一人でうろつくいても死ぬ事は無かった。

(……………風が出てきた)

季節は冬に入ろうとしているのかビュウビュウと聞こえる風は冷たい。

「……………町に入らないと」

町に入れば建物があるから少しは風が防げる。

「今度の町で冬を越さないといけないかな？」

最近、薬草が見かけなくなってきた。

(無いわけじゃないけど……………)

夏よりも数が少ないのだ。

「急がないと……………」

日が暮れるまでには街に入りたい。

俺は街に向けて歩くスピードを上げた。

「っ、疲れた……………」

ヘナヘナと無事日が暮れるまでに入れた街の入り口で脱力する。

(後は……………今日の食料だけ)

「人が良さそうな人が居れば……………」

食料を恵んでくれるんだけど。

(誰か居ないかな)

俺は氣力を振り絞り辺りを見回しながら歩き始める。

(うゝん……見る限りは)

居ないようだな……

そう思いながら視線を左側から前へ戻した瞬間だった。

ドンッ

(あ………)

周りに気を向けていたせいか前の人物に気づかずにつつかってしまった。

「す、すみません！」

俺は慌ててぶつかった相手に謝る。

「あゝあ？ どうしてくれんだ？ ガキ！」

そう言いながら相手は俺の胸倉を掴み持ち上げる。

(う、わっ……)

急な浮遊感に驚きながらも持ち上げられた事により相手の顔が見える。

(男……？)

ぶつかった相手は顔が整っていて、一見女の人に見えなくはないが、何となく俺の勘が男だと告げる。

「てめえみたいな汚いガキにぶつかったせいで服を洗濯しなきゃならねえじゃないか！」

俺は洗濯が一番嫌いなんだよつと男は言い捨てる。

「ちやーんと、責任取るよな？」

男はそう言いながら怪しく笑っていた。

「ぐっ………」

バキィと嫌な音が辺りに響く。

「おーっと？今ので何処か骨が折れたかもな？」

悪いね、と言いながらも男はニヤニヤと笑う。

「大分スツキリしたし、次で終わらせてやるよ」

そう告げた男はニヤリと笑いながら俺のお腹めがけて蹴りを繰り返した。

（これで……最後）

普段なら避ける蹴りも、男から言わせればこれはぶつかった代償らしい。

そう言われれば避けるわけにはいなくて、今まで大人しくやられていたのだ。

ドゴォと見事に当たった音と共に俺は吐血する。

「げほっ……」

吐血する俺を男は見下しながらこう告げる。

「こんなものか。次はぶつかんじゃねーぞ」

そう言って男はクルリと俺に背中を向け去って行った。

「いっ……」

ズキリと痛む体を僅かに動かし俺は横になる。

「とんだ災難……」

ぶつかってしまったせいで今日は飯抜きになってしまった。

（自業自得だけど……）

はぁーと傷にさわらないように息を吐く。

「……………あ」

いつの間にかどんよりと灰色になっていた雲からふわりふわりと白い点々が下りてきた。

「……………？」

下りてきた白い点々が頬に当たるも当たった感触はなくただ冷たい小さな水となっていた。

「……………綺麗」

灰色の中から次々と現れる白。

それは俺がこの数ヶ月には見た事のない景色で、俺は思わず両手を伸ばす。

「……………うわぁ」

俺の伸ばした手にも次々と白が降り注ぎ、まるで汚れている俺を白で染めるかのようにだった。

それからどれくらい時間が経っても、俺は灰色の空を見上げ続けた。

外伝・雪（後書き）

「こんにちはー、今日付けで配属されたアルフォードです」

赤い髪に青い目の少年がそこに居た。

「ニックネームはアルです」

……何だかつい最近蘇った記憶にいたな。こんな奴。

「アル？オメエラクに似てるな」

「ラクを知ってるの！？」

「あ、ああ。少しだけ一緒に暮らしたが」

「……ラクは双子の弟なんだよ」

今はどうしているんだろう？と言うアルの言葉に俺は目を逸らす。

「……………アルが来たからエスタージオはこれで御役目御免だな」

正直アルの方がやりにくいが……仕方が無い。

俺は二人を遮りエスタージオに花束を押し付ける。

「二幕からは俺とアルでこのコーナーを担当だ」

「みんな、よろしくねー」

「俺、これだけえええ？」

煩く叫ぶエスタージオを俺は蹴り飛ばした。

十一話

目を覚ましたら記憶が無くなっているという驚くべき体験をした日から数年、俺はブラブラと各地を移動している。

俺の日常はこれと言ったような目的も何もなく、ただ一日中食料を探して（盗んで）その日をやり過ごす。けれど冬近くになれば別だ。冬近くになると薬草や動物が減るため、その日の食料とは別に冬までに持つような乾燥食を集めなければいけないのだ。

そうしなければ、凍え死ぬだけではなく餓死する確率も高くなってしまう。

俺はそれを当たり前の様に知っていて、理解もしていたしちゃんと実行もしてきた。そうでなければ今生きてはいないし、実際に餓死してしまった子供や大人を見てきてもいる。

「……どうしよう」

冬がどれ程厳しいのか分かっていて、はずなのに……

「何も、無い……」

（ああ……俺の人生短かったな……）

たった数年しか生きてないのに……

町中を歩き回り、疲れてしまった俺はフラフラと人気がない脇道へ入り膝を抱える。

（そもそもこの冬が予想外だった）

こんなにも、早く冬が来るなんて……

冬の始めこそはまだ余裕があった。けれど冬が早く来たって事は冬の期間はいつもより長いつて事だし、食料もいつもより少なかった。（ここ数日何も食べてないな……）

最早感覚が無くなった膝をボンヤリと見ながらそう思う。

（餓死が先か、凍死が先か……）

俺が今いる町は周りから“風の谷”と呼ばれている。

聞けばこの場所はその名の通りによく風が吹くらしい。それが夏だ

ろうが、冬だろうが変わらない、とも。

（凍死が先……か）

ビュウビュウと容赦なく吹く冷たい風を受けながら俺は目を閉じる。

目を閉じてからどれくらいの時間が経ったのかは分からない。長かったのかもしれないし、短かったのかもしれない。俺は突然声をかけられたのだ。

「……生きてるのかな？」

まだ何とか意識があった俺はスツと目を開く。

「あ、生きてた」

最初に飛び込んで来た景色は白い髪に、灰色のような目。ヘラリと笑った顔、だった。

良かった、と言いながらひょいとそいつは立ち上がる。

（……………男？）

「た……………れ……………」

掠れた声で俺は問う。

「うん？俺はスーザーだよ」

そう言いながらスーザーは俺に背を向けしゃがんだ。

「……………」

これを、どうしろと？

俺はキョトンとスーザーを見る。

「乗って？」

スーザーは振り返り苦笑しながら告げる。

「乗……………る？」

「あ……………分からないか」

そう言ったかと思うとスーザーは俺に背を向けたまま俺の手を引つ

張った。

「うわっ……」

俺は引っ張っられ、スーザーの背中とぶつかる。

「よし！」

(……………?)

スーザーがそう言ったかと思うと俺の足を持ち、俺が背中にいる状態で立ち上がった。

「!？」

「あ、ゴメン、ゴメン」

ビックリした？とスーザーは聞いてくる。

「……………なんで？」

けれど俺はそれに答えず、問う。

「ん？」

「なんで、こんな事をする？」

「あー…それはな」

ザクザク、と音を立てながらスーザーは歩き始める。

「拾いたいから拾ったんだよ」

「……………は？」

思わず俺は口が開いたまま固まる。

(今、なんて言った?)

拾いたいから拾った？

(……………頭がおかしいのかもしれない)

“何処の子供か分からない”俺を拾うなんて、頭が壊れてる。

「だってさ、お前こんなに冷えてるし、きつと結構長い時間あそこにいたんだろ？」

固まって何も答えない俺にスーザーは一人、話していく。

「……………今の大人達は孤児だなんて見向きもしない。子供が殴られようが、蹴られようが、一人でポツンと座っていいようが見て見ぬ振り。まるでそれが当たり前のように通り過ぎて行く」

「でも、それは全員じゃない。俺がそうだった様に運よく拾われる

子供もいる」

孤児だった俺は拾って貰ってから180度世界が変わった、と思うとスーザーは続けていく。

「凄く今の両親には感謝している。それと同時に俺は自ら決めている事がある」

「見て見ぬ振りをする奴らとは違って俺は、“見て見ぬ振りをしない”だ」

「見知らぬ子供が一人いる。ならば“無視”ではなく、俺は手を差し延べる」

お前はそれの一人目だな、とスーザーは言う。

(……何だろ?)

俺はフンワリと、寒いはずなのに暖かい何かを感じる。

「あ、お前名前は？」

「……………ない」

「……………そっか」

名前無いと不便だよな、とスーザーは呟く。

「まあ、両親と一緒に考えるか。そろそろ家に着く頃だし」

見えるかな?と言いながらスーザーは右斜め前方にある雪に覆われた家を指差した。

「あそこだ。帰ったら先に風呂だな」

こんなに冷えてるしね、とスーザーは白い息を吐きながら言う。

「……………ふろ?」

俺がスーザーの言葉を繰り返すとスーザーは少し驚愕したように聞いた。

「…………お風呂、知らない?」

「うん」

「じゃあ俺も一緒に入らないとね……」

何もかも知らないだろうなあとスーザーは呟く。

「まあ楽しみにしててよ」

そう言いながらスーザーはニヤリと笑った。

十一話（後書き）

「今回からこのコーナーに入るアルです」

ぺこりとアルは頭を下げる。

「それで……君の紹介をしてくれるかな？」

その言葉に内心面倒だな、と思いつつ口を開く。

「ゴドリック・グリフィンドールだ」

よろしく、と言いながら俺は手を差し出す。

「よろしく!!」

ガシッと凄い勢いで掴んだ後にゴドって呼んでいい？と言いながらアルは言った。

「……構わないよ、アル」

「良かった」

アルがそう言ったところで俺達は手を離す。

「ところで、この話しは？」

アルはペラペラ本編の紙を揺らしながら言う。

「……どういう事？」

全くもって主旨がないアルに俺は聞き直す。

「だから、この話しは誰の話し？」

「……………俺だけど」

今更ながらの質問に若干引きながらも俺は答える。

「え、ええ〜！！」

アルの叫び声が煩く響いた。

十二話

「ただいまー」

そう言いながらスーザーは辿り着いた家の扉をドカッと蹴って開けた。

「「お帰りー」」

ズカズカと上がっていくスーザーは先程声が聞こえたところへ向かって声をかける。

「母さーん、お風呂入れるー?」

「入れるわよ?」

その声とともにバタバタとこちらへやって来る音が聞こえる。

「珍しいわね。スーザーがすぐにお風呂に入るなー!」

そう言いながらひよつこりと薄い紫色の髪に青色の目をした女性が現れた。

「……………」

女性は俺を見るなり固まる。

「母……………」

どうしたの、とスーザーが恐る恐る声をかける。

「あ、何でもない。お風呂ね? 入れるわよ」

その子も一緒? と女性は俺を見ながら尋ねる。

「うん。孤児らしくて風呂とか分からないって言うし」

「……………」

（あれ……………」

今はニコニコと笑っているけれど俺を見て一瞬だけ、悲しい顔をした。

（……………」何かした?」

何処かで会っても……………」ないし。

俺がコテン、と首を傾げている間にスーザーはいつの間にか風呂場へと入っていた。

「はい、脱いでー」

「……………へ？」

「いや、服を脱ぐんだよ」

キョトンとしている俺に、スーザーは俺の服を掴み脱がそうとする。

「……………え？」

脱ぐ……脱ぐ……脱ぐう！？

（それはつまりこの体を見せるって事だよな…………？）

無理、いや……それだけは嫌だ！！

「恥ずかしがらなくてもいいよ」

スーザーはニヤリと笑いながら言う。

「う……ぎゃああああああああ」

逃げ出そうとする俺の襟首をスーザーは掴む。

「はいはい、脱ぐよー」

「た、助けてええ」

俺の叫び声がお風呂場で虚しく響いた。

「暑い……」

初めての風呂から上がった俺はモクモクと湯気が上がり体が暑かった。

「あー…悪い。長く浸からせてたみたいだね」

そう言いながらスーザーは俺の後ろに立った。

「ほら、着ないと湯冷めするよ？」

そう言っではバサリと俺の頭に服を落とす。

「ぶう……」

だが俺より大きかったその服を俺は全身で受け止める事となった。

「あ、悪い。俺の子供頃なんだが……大きかったみたいだね」

モゾモゾと落とされた洋服から俺は脱出する。

「えーっと、俺のは……」

俺はキョロキョロと見回しているスーザーを横目で見ながら貰った洋服を見る。

(……大きいな)

バサリと上着だろう洋服を広げてみるが……明らかに俺が着たらダボダボになるだろう。

「スーザー、俺の服は？」

「ん？ああ、母さんが洗濯するから心配するな」
捨ててないから、と言ってスーザーはゴソゴソと着替えを続ける。

(……上着だけでいいや)

ズボツと大きい洋服に俺は頭を突っ込む。

(……やっぱ大きい)

ゴソゴソやって上着を着るしてみると足は膝まではいかないが隠れているし、手は袖から出ていない。

「……上着だけで良かったみたいだね」

スーザーは苦笑しながら俺の方を見て言う。

(俺がチビみたいに言う)

「……………」

モヤモヤした俺は何も言わずに眉を潜める。

「じゃ、行こうか」

しかしスーザーはあっさりとそう言ってひょいと俺を抱える。

「い、行く？」

(何処にいい?)

スーザーのその言葉にモヤモヤは飛び去り俺はスーザーに再度問う。

「父さんの所だよ。まだ会ってないでしょ？」

「……………あ」

「やっぱ」

これから一緒に暮らすから顔くらいは合わせておかないと、とスーザーは言う。

(…………あれ?)

なんだか一緒に暮らすなんて聞こえたんだけど。

疑問に思った俺は聞き返す。

「暮らす?」

「うん。拾ったからね」

サラリとスーザーは言いながらトントンと移動していく。

「まあ……反対はされないだろうし、気楽に考えていいよ」

そう言ってポンポンとスーザーは俺の頭を軽く叩いた。

「君がスーザーが拾った子供?」

スーザーと共に部屋に入った俺は席に着いた瞬間、スーザーの父親だろう夕焼け色の髪で薄い緑色の目を持った男性にニコリと笑顔で言われる。

俺はいきなりの笑顔で驚きながら怖ず怖ずと頷く。

「……そうか」

男性はフンワリと先程との笑顔とは違う優しい顔でそう言う。

(…………あ)

フンワリとした感覚と同時に、薄い赤色が溢れ始める。

(これ、何だろう?)

「……どうした?」

コテン、と首を傾げた俺に男性はそう問いかける。

「……なんでもない」

「そ……うか」

そこからスーザーと父親、母親で俺の話をしていた。

俺はこの家族の中に無理矢理入った感じなので黙って見続けていたが……ウトウトと瞼が下がってきていた。

(こんな、ところで……)

せめてこの家族の話し合いが終わるまでは起きておかないと。
だが、一人でいた俺は眠い時に寝てお腹すいた時に食べる生活だった
ので我慢など出来るはずもなくどんどん瞼は下がっていく。

(お……きて、ないと……)

けれど俺はぼやけた三人を最後に暗闇へと身を任せた。

十二話（後書き）

「ゴドの過去!？」

アルは驚いた様に言う。

「うん？」

何か問題でもあったっけ？

確かに俺の過去はグロいと言うか、悲惨と言うか、残酷と言うか…
…まあ、あまりいいものではないけれど。

驚くようなものか？と俺は首を傾げながら言う。

「だってあのホグワーツを建てたゴドの過去だよ!？」

書類も何もない、貴重な過去なのに!？とアルは言う。

(……あの?)

あのホグワーツ？

(一体どのくらい美化しているんだろう)

「うわー!これ初めからある？」

読まない!と物凄く嬉しそうにキラキラしながらアルは言う。

「探せばあると思うけど」

俺はそんなアルに引きながらも答える。

「ありがとう!!」

ウキウキと探し始めたアルを横目に俺は今回の分を破り捨てた。

十三話

ふ、と目を覚ますと天井が目に入った。

(……………天井?)

ギシリと音を立てながら俺はベットから起き上がる。

(……………ベット?)

確か話し合いをしている最中に寝たん……………だよな?

俺はキヨロキヨロと周りを見てみると今使っているベットとは違う空いたベットが隣にあり、部屋のすみにはおもちゃ……………だろ?物が置かれていた。

(スーザーの部屋……………だったのかな?)

俺はトンツとベットから足を下ろす。

「あ、起きたー?」

ガチャリとドアが開く音と共にスーザーが部屋へ入ってくる。

「結構睡眠時間長いんだね」

今もう昼だよ、と言いながらスーザーは近づいてくる。

俺は気になる単語を繰り返す聞く。

「……………昼?」

「うん。下りて来ない君を心配して俺が来たんだよ」

父さんと母さんも心配していたね、とスーザーは言いながら俺の頭を撫でる。

「ま、起きたからいいや。昼ご飯があるから下にちゃんと下りて来るんだよ?」

そう言っスーザーは手を話し部屋を出て行く。

(昼、ね)

まさか昼まで寝てるなんて。

ギシリ、と音を立てながら俺はベットから下りる。

(とりあえず顔は出さない)

トンと立ち上がり俺は部屋を出て行った。

「起きたんだね。おはよう」

いや、もう昼だからおはようではないかな、と言いつつも父親はむしゃむしゃと昼飯を食べていた。

「はい。これで足りるかしら？」

足りなかったら言っただけ、と言いつつも料理を置いている母親。今までとは180度違う態度に俺は一瞬固まる。

(……あ、そうか)

これがきつと“家庭”と言うものなんだろう。

そう納得した俺はユックリと昨日座った席へと向かう。

カタンと椅子を引いて座り、目の前の料理を見る。

(えっ……と)

これはどうやって食べるのかな？

(今までみたいに手で食べていいのかな？)

でもそれならこの黄色い水みたいな物は……ん？

(これ、さっきも見た……)

黄色い水の隣にあった銀色の物を見た俺は顔を上げて父親を見る。

「ん？食べても構わないよ？」

遠慮なんてしないでいいから、と言う父親の手元を俺はじつと見る。そこには先程見た銀色で丸い奴が握られていた。

(これを使うのか)

俺は同じ丸い銀色を持ち、料理を見る。

(えーっと……？)

これを使って何を食えばいいのかな？

「これはこのスープに使うのよ」

ひょいと薄い紫色の髪を揺らしながら母親が黄色の水を指しながら

言う。

「スー…プ？」

「そう。そのスプーンですくって飲む食べ物よ」

美味しいから食べてみて、と母親は付け加える。

俺は言われた通りに持っているスプーン…だっけ？それをスープの中に入る。

スプーンにスープが入るのを確認してから恐る恐る口へ運ぶ。

(……………あ)

フンワリと甘くて美味しい。

「美味しい？」

母親がニコリと微笑みながら俺に問う。

「……美味しい」

俺はポツリと呟いてからスープへと手を伸ばしていった。

時間がかかったが見よう見真似で昼食を食べ終えた俺は満足感に浸っていた。

「あ、昼食食べ終えたんだ？」

ひよっこりとリビングに入って来たスーザーは俺を見ながらそう言った。

「じゃあこれから暇だね？俺と遊ばない？」

(……………遊ぶ？)

たった数年間だけでも、その中でも初めて聞いた単語だった。

(……………遊ぶって何？)

俺はキョトンと首を傾けた。

十三話（後書き）

「うう……」

涙目になりながらも結構苦勞しているんですね、というアル。

俺は何も言わずに横目で見ながら積み重ねた本へと手を伸ばす。

「ゴド!!」

新しい本を読みはじめて五分経ったくらいにバンツと机を叩きながら俺の名前を呼ぶアル。

「あんなの悲しすぎるよ! 何でエスタージオは殺されなきゃならなかったの? 魔法使ってそんなに偉いの? 俺、そんなに知っている訳じゃないから教えて! 馬鹿でも分かるように!! 後……」

まるでマシンガンのように次々と話していくアル。けれど、少し頭を前に戻して欲しい。

先程アルは机を叩いた。

そしてその叩いた近くには俺が積み重ねた大量の本。

それらは今、怪しくグラグラと揺れていた。

「――出来れば一から! 良いかな?」

「……………アル」

「何？」

「今、凄くこの積み重ねた本が危ない」

「うわぁ!?!」

グラグラとしている本を指差して教えて上げれば驚くアル。

「でも、何もしなければ平気だから今のうちに席を――」

……聞いていないのか、血迷ったアルは手を伸ばして上の数冊を持ち上げた。

当然、少しは持ちそうなバランスだった本はバランスを崩して俺の方へと落ちて……いや、降ってきた。

ドサササ……と落ちる音が埋もれかけている俺にも聞こえるくらい響いていた。

十四話

キョトンと首を傾げている俺をいきなり引っ張って外へ出たスーザー。

「今日は此処から少し離れている場所に行くけど……大丈夫？」

散々引っ張られた後に幼いからかスーザーは氣遣うように俺に聞いた。

「大丈夫」

伊達に今まであちらこちらウロウロしていない。子供ではあるが、体力ならばそこら辺の子供よりはある……はず。

前を進んでいるスーザーはそっか、と呟いた後に言う。

「辛かったら言ってね」

(……え、辛い?)

それ程までの場所へと行くのだろうか？

「ねえ、スーザー。辛いつてそんなに――「さあ、行こうか!」……

……」

俺の言葉を遮った挙げ句に急ぐように歩き始めるスーザー。

(崖とかあるのかなあ)

俺はスーザーに気づかれないように小さくため息をついた。

「此処だよ」

スーザーが辛かったら、とか言ったからてっきり崖があるかと思っていたのにただ平坦な……いや、坂はあったが結構な距離を歩いただけだった。

「……うわあ」

スーザーが俺を連れて来た場所は“風の谷”が一望出来る高台だった。

「綺麗でしょ？此処は町を一望出来るけれど町からは見つけられないように上手く隠れている場所だよ」

まあ、隠れている分狭いし生い茂っているけれど、とスーザーは話していく。

「町を見る分には支障はない」

俺はスーザーの話しを聞きながらも眼下に広がる景色に見入る。

「……………凄い」

「気に入ったみたいだね」

良かったと言いながらスーザーはドスンと座る。

「ほら、座って見たら？」

そう言っただけ俺の腕を引っ張り無理矢理座らせる。

「うわっ……」

俺は引っ張られるままにドスンと尻をつく。

（いっ……た……）

俺は怪我をしていないか振り向きながら腰を摩る。

「スーザー、別に引っ張らなくてもー」

怪我が無い事を確認した俺はスーザーに話しかけながらひよいと顔を戻すとそこにはニヤリと何かを考えているような笑顔でスーザーがいた。

「綺麗なのは町だけじゃ無いんだよね」

そう言っただけスーザーはドスン、と俺に乗っかってきた。

「……………え？」

俺はいきなり突っ込んで来たスーザーに耐えられるわけもなく、ドサッと倒れる。

「スーザー「ほら、上見てよ」……………」

ニヤリと笑いながらスーザーは俺の言葉を遮り言う。

（……………上？）

俺は渋々スーザーへと向けていた顔を空へと向ける。

(…………あ)

見上げた空は雲一つない快晴。

「青い……」

「今日は快晴だからね。寝転がって見るのも綺麗だと思ったんだよよ……と、と漏らしながらもスーザーは俺の上から下り、隣に寝転がんだ。

「今日は仕掛けを確認して遊ぼうかと来たんだけど……まあ、ノンビリするのも良いよね」

スーザーは顔を横に向けニツコリと笑いながら言った。

「あ、いたいた！」

あれから太陽が真上に来たくらいにそろそろ仕掛けを確認するか、とスーザーは言って起き上がった。

俺も何時までも寝転ぶわけにはいかないからスーザーと共に起き上がり、座った。

俺が座ると同時に立ち上がったスーザーはスタスタと仕掛けを見に行っていたのだ。

「今日は豪華になるよ！」

仕掛けにウサギがいたからね、と掴まえているウサギを振り回さん勢いでスーザーが駆けて来る。

「ウサギが死にかけてるよ？」

俺は横目でそれを見ながら声をかけた。

「大丈夫だよ。死なないと食べられないし」

「……………」

(……大丈夫?)

それは食べるから死んでも良いと言う事なんだろうか？

キョトンと首を傾げる俺に対しスーザーはああ！と何かを思い付いたのかこう言った後に俺に告げた。

「君も仕掛けを作りたいの？」

どう捕まえたのか仕掛けが気になるんだよね？と言いながらスーザーは俺の手を掴む。

「なら、一緒に仕掛けよう！」

仕掛け場所は少し先だからね、と言ってグイグイ引っ張って行く。

「スーザー、俺「大丈夫、俺も一緒だから失敗しないよ！」……」

スーザーはキラキラな笑顔で俺の言葉を遮る。

反対に俺はキラキラな笑顔で言い切るスーザーに対してブチリと青筋を立てていく。

「スーザー、少しは人の話を「あ、着いたよ」……」

……うん。決めた。

（絶対に今度は俺が振り回してやる！）

人の話を聞かない苦勞を味わえ！！

そう決め込んだ俺は怪しく笑いながらスーザーを睨みつける。

しかし俺を見たスーザーはさらにニツコリと笑って言った。

「そんなに楽しみにしていたんだ！」

なら大掛かりな仕掛けでも作ろかな？と言ってスーザーは短刀を取り出す。

「まずは……枝を鋭く削って貰おうかな？」

そう言いながら短刀を持つスーザーは極悪人みたいな顔で笑っていた。

十四話（後書き）

「だ……大丈夫？」

アルが心配そうに眉を潜め、言う。

「……誰のせいでこうなったと？」

ついさっき、本の山から脱出出来た俺は不機嫌に告げる。

「……ごめんなさい」

「……………別に外傷はないみたいだし、良いよ」

素早く告げなかった俺にも非は……………あるかもしれないし。

「それよりも」

「……？」

俺はションボリと落ち込んでいるアルにサッと先程貰った物を見せる。

「これ、なーんだ？」

「最新の……！」

ガバッと先程とは180度打って変わりまるで犬の耳と尻尾がついていてフリフリ振っていてもおかしくないくらいに喜ぶ。

（俺の過去の何が楽しいんだか……）

正直、過去の印象は八割と言わずに人をひたすら斬りまくっただけなんだけど？

（……他に何かしたっけ？）

サラザール達ならばまた別の回答が来そうだが俺は斬りまくった、しかない。

（まあ……人それぞれ、と言うから）

俺は早く、早くと言うアルに最新の奴をため息つきで渡した。

シュツと素早く受けとったアルはすぐさま読み始める。

「……紅茶でも飲むか」

特に興味がない……いや、全てを知っているからこそもう見たくない俺は紅茶の用意をする。

「今日は……カモミールかダージリンか」

他には……アッサムとかも良いかもな。

「んー……」

確か、茶葉も貰ったよな……

「緑茶、にしようかな？」

普段あまり飲まない物だけれど……美味しかったっけ？

「ま、飲めば分かるか」

俺は貰った緑茶の茶葉をつまみ、容器へと入れた。

十五話

此処数日、俺はスーザーを連れてあちらこちらへと引っ張って行つた。だが、流石に俺よりもスーザーの方がこの近くの地理は詳しく何時も俺が振り回される毎日だった。

（そう、だから……）

プツリと頭にきながらも俺は別の方法で仕返しをすれば良いことに気づいた。

（今日こそは仕返しを！！）

何だか少し目的が変わった気もするが今はもうスーザーに一泡吹かせる事にしか頭に無かった。

ゴソリと俺は近くで作った泥団子を手に持つ。

「スーザー、今日で仕留めやる！」

俺はそう言いながらボタンと扉を蹴り飛ばしスーザーの部屋へと入って行く。

「……ん？」

最初はキョトンとしていたスーザーだったが俺の手に持っている泥団子を見てニヤリと笑った。

「今日はお出かけじゃないんだね」

そう言いながらもスーザーも周りにあった本を手に持つ。

「振り回すのは無理そうだったから」

だから近所の子供をヒントに作ったんだ、と付け加えながら俺はジリジリと足を動かしながら適度な距離をとる。

「たまには人の苦勞を味わえ！！」

「振り回さないと家から出ないだろ！！」

スーザーの言葉を最後に俺は泥団子をスーザーに向かって放つ。

しかしスーザーはひょいと本を泥団子の予想した軌跡上へと持ち上げる。

その予想は当たりバンと泥団子は本へと当たる。

「甘い!!」

そう言いながらもスーザーはブンツと俺へ向けて本を投げて来た。それを見た俺は瞬時に左へと避けながら泥団子をスーザーの足元へと投げる。

スーザーはニヤリと笑いながらもひょいとジャンプしながら重そうな本を投げて来る。

俺の投げた泥団子がビシャと床についた音が響く中俺はスーザーの投げた本を避け泥団子を投げた後にスーザーの元へと走る。

スーザーは着陸した途端にひょいと泥団子を避けながら走ってくる俺へ顔を合わせた。

ベシヤリと不発した泥団子の音を聞きながらも俺は床に泥団子を一つ落とし、もう一つをスーザーへと投げる。

(これで、全部使った……)

スーザーはひょいと顔を動かしてそれを避け近いて来る俺をニヤリと笑いながら迎える。

俺はニヤニヤするスーザーをひょいとジャンプをし男の急所目掛けて蹴り出す。

「残念」

スーザーは短くこう言いガシリと俺の頭を掴む。

「体重が軽いから持ち上げやすいんだよね」

そう言ってギリギリ頭を掴みながら俺を持ち上げていく。

「此処に来て初の悪戯は失敗だね?」

スーザーは俺を顔の前まで持ち上げたと同時にニヤリと笑いながら告げた。

俺はその言葉に舌打ちをする。

(スーザーがああ落とした泥団子を踏めば!!)

でも、スーザーは踏まないだろう。あんなに分かりやすい罠にひっかかる奴なんていない。

(正々堂々と、じゃダメだね)

今みたいに繰り返しになるだろう。

(頭を使わなきゃ)

正直、頭を使うのは苦手だけれど、そうしないとスーザーに仕返しが出来ない。

俺がグルグルと考えている間、スーザーは俺を掴んだまま扉へと向かっていったらしい。

「大体正面から来たら簡単に勝て――」

しかしスーザーは最後まで言わなかった。いや、言えなかった。

なぜならズルリとスーザーの体が傾いたから。

「……………あ」

ポツリとスーザーが言った頃は遅く、スーザーはドスンと派手に倒れた。

(……………え)

いきなりスーザーが倒れた事により俺の意識は脳内から現実に戻る。

(……………?)

俺はスーザーの上に乗りながらも倒れたスーザーの足元を見ると駄目元で置いた泥団子が潰れた姿があった。

(馬鹿?)

内心少しスッキリとしながらもスーザーの馬鹿さに思わずため息を漏らす。

「い、たた……」

ムクリと頭に手を当てながらスーザーが起き上がる。

俺は痛そうに少し眉を潜めながら起き上がったスーザーの顔を見て思わずニヤリと笑う。

「お前……こんなの勝ちに入らないからな」

「なら、今度も悪戯?でスーザーに仕返ししてやる」

「今度も?いや、今度で、だろ」

お前の悪戯にひっかかったりはしないから、と鼻で笑いながらスーザーは言った。

「大丈夫。スーザーは馬鹿だから」

「……………馬鹿?」

誰が、馬鹿だって？とスーザーが脅すように言った瞬間だった。

「ちょっと、二人とも！！」

扉の方から大声が飛んで来た。

「仲良く遊ぶのは良いけれど、こんなに汚してどうするつもりかしら？」

俺が扉の方へと顔を向けるとそこには眉をこれでもか、と言わんばかりに吊り上げ手を組みながら如何にも怒っている様子である母親が立っていた。

「こんなに部屋を汚して……誰が掃除をするのかしら？」

その言葉と共に俺はキョロキョロと部屋を見回す。

部屋は泥まみれの本まみれだった。壁には何箇所か泥が着いていたし、床には泥の上にスーザーが投げた本で散らばっている。

「……………」

部屋を見回した俺はスーザーへと視線を向けるとスーザーの顔は青ざめていた。

「……二人とも、下へ来なさい」

ニツコリと笑った母親の言葉に俺は普通に、スーザーは顔が青ざめたまま従った。

十五話（後書き）

「……………あの、さ」

「ん？」

アルはつい先程まで読んでいた最新を見せながら言う。

「悪戯好きになったきっかけてもしかして……………今回ので？」

今回？

今回、今回……………あースーザーに真っ正面から泥団子ぶつけたやつか。

「あー……………どうだろうな。まあきっかけ、か？」

あれからスーザーを仕留めるために幼いながら頭を使うようになったし……………

「……………きっかけだな。多分」

「……………純粋なゴドが汚れたああああ」

（……………は？）

俺はポカーンとアルを見る。

「アル、頭大丈夫か？」

「大丈夫。だってあれが無かったら……悪戯好きにならなかったら顔良くて頭良い、綺麗なままだったのに！！」

悪戯好きにならなくて顔が良くて頭が良くても人を殺している時点で綺麗じゃないよな？

それともアルの頭では顔良くて頭が良い人間は人を殺してもそれが無かったようになるのだろうか。

「スーザー……ゴドが許しても俺は許さないからな」

(……………)

……本当に俺はアルと双子？

(……俺、ここまで変じゃない)

人を殺していても、馬鹿でも、ここまで変ではない。

俺はフルフルと頭を横に振る。

(……に、人間育つ環境が違々と双子でも性格違うって言うしな！)

気にしないでおう。こんな少しずれているのが双子の兄って事は。

今だにスーザーに対して叫んでいるアルを横目にそう結論を出した俺はお菓子へと手を伸ばした。

十六話

あの悪戯の後、母親から数時間に渡る説教を喰らった俺とスーザーはピタリと家の中で悪戯をするのを止めた。

それから数日が立ち雪が積もった今日、俺はスーザーと父親、母親の四人で外に出て雪合戦と言う遊びをしていた。

「くそっ……！」

ゼーハーゼーハーと息を切らしながらスーザーは悔しそうに言う。

「何で当たらないんだよ！」

雪合戦とは固めた雪を人に当てると言う遊びらしい。凄く気分がスツキリとするし、人に当てても前回みたいに説教が無いという実に素晴らしい遊びだ。

そこで意気揚々と俺はスーザーを狙いバンバンと当てていく。当然、スーザーも俺を狙って雪を放つがヒョイヒョイと避ける俺に雪を当てる事が出来ていないでいた。

「それはスーザーよりあの子が素早いからでしょ？」

あー、やっぱり歳なのかしら？と言いながらも母親は雪を手にとって固めていた。

「そういう母さんだってあまり当たって無いでしょ？」

父さんだって母さんと同じくらい当たって無いし、と言いながらスーザーは反対側に居る父親を見る。

「俺ばかり当たってない？」

「スーザーが遅いからだろ？」

呆れながら言う父親も雪を投げる準備をしている。

ゴソゴソといくつか固めた雪を足元に置き、俺は手に置いた雪玉の一つを取る。

「スーザー、覚悟！」

俺はスーザーに雪玉を見せながら言う。

「……もう来やがった」

スーザーは嫌そうな顔をしながらも雪玉を持つ。

「一発くらいは当てないとな」

ヒョイと俺の投げた雪玉を避けながらスーザーは言う。

俺はスーザーの言葉を見殺し、ドンドン雪玉を投げていく。

スーザーは数発当たりながらも避け、俺に向かって雪玉を投げてくる。

（簡単だね!!）

今までずっと雪が積もろうが泥沼だろうが歩いて来たのだ。雪には慣れてるし、脚力だっけについている。

ヒョイと素早く左へと避け、五、六発の雪玉をスーザーに向けて放つ。

「ちっ……」

スーザーは悔しそうに舌打ちをしながらも避けていく。

（……………ん？）

チラリと視界に見えた白い何か。

だが、それは何であるかはすぐに分かった。

（雪……………!）

誰が投げたのかまでは分からなかったが俺はすぐさまその場にしゃがみ込んだ。

俺がしゃがみ込んだ瞬間、雪玉が頭上を通る。

（危なかった）

「隙あり!!」

俺が立ち上がった瞬間にそう言いながらスーザーが物凄い量の雪玉を俺目掛けて投げてきた。

「うわ……………」

運良く俺とスーザーとの距離が余り離れてなく、またスーザーが俺がしゃがみ込んでいる時に投げたので急いで後ろに下がるだけで雪玉に当たりはしなかった。

「これで終わりではないからね？」

そうニヤリと笑いながらスーザーが先程の倍ある量の雪玉を投げて

きた。

(……………え?)

その多さに一瞬固まったがすぐさま俺は避けながら玉が来ないように後退していく。

(いつ作っただろう?)

先程といい、今といい、俺がしゃがみ込んでいる間に作ったにしては量が多すぎる。

走りながら俺はチラリとスーザーの方へと顔を向ける。

(……………あんなのあり?)

そこには父親と母親がスーザーの近くで二人仲良く雪玉を作り、スーザーはそこから雪玉を奪っていた。

(二人がスーザーと組んだああ)

いや、あんなの反則だろう。三人で一人を狙うなら幾度となくあつたけれど、二人が雪玉を作り一人が投げる共同作業なんて最早こちらに雪玉を作る余裕は無い。勝つなんてものは当然無理だし、全ての雪玉に当たらないなんて事も無理だ。

(運良くまだ当たってはなないけれど)

それも時間の問題だろう。

チラリとスーザーを見ると物凄く良い笑顔で雪玉を投げている。

(…………あれを見たら当たりたくはないんだよね)

当たりたくないならば雪玉に当たらずにこれを終わらせる方法を考えなければいけない。

(うゝん…………相手に降参をさせずに終わらせる、か)

俺が降参をしても…………確実に降参が伝わる前にかなりの雪玉に当たるだろう。

(…………いや、あった)

俺が降参を言葉に出さずに告げる方法が。

(家に入れば良い)

あそこは俺もスーザーも手は出せない。つまりあそこに入れば自然に雪合戦は俺の降参で終わる。

(他には……俺がこの雪合戦に勝つか)

この雪合戦は最早俺対スーザーになっている。

スーザーを負かせば二人は雪玉を作らないだろう。……多分。

(そこは……運だね)

後は……どちらを選び行動するか、だ。

(どうしよう……)

俺は走りながら、どちらを選択するか考えている時だった。

俺はチラリと見えた物に反応し、駆け出す。

(あれはっ)

チラリと見ただけだったが雪にまみれながらも僅かに見える棒があった。

(あれは武器になる)

ザッと雪煙りを上げながらも落ちている場所で止まる。

そして俺は急いでそれを握り、掘り起こす。

(ほ……箒?)

掘り起こしたそれは古びて捨てられただろう箒だった。

(……仕方がない)

俺はジクジクと刺さりながらも箒を括られてある藁のギリギリまで持ち、柄の部分を雪を投げるスーザーに合わせる。

(もう勝つしかない)

此処から家に行くにはもう無理があるし、それにこれを取った時点で俺の頭に“降参”は無かった。

(……行くか)

俺はビュンビュン飛んで来る雪玉の中、スーザー目掛けて駆け出す。

「……う、わっ」

バシィと俺に当たりそうだった雪玉を箒で切る。

切られた雪玉はパララ……と雪みたいに崩れていった。

「危なかった」

「今にその危なかったが沢山増えるよ」

「その前にスーザーに勝ってやる!!」

そう俺は叫び、一步駆け出した瞬間だった。

「ぶへっ!!」

ガクンと足を躓き、バターンと音をたて盛大にこける。

「……………」

「……………」

「……………」

(……………うう)

お、起きにくい。

今、この場所には先程とは違い静寂が広がっていた。

誰も話さないし、雪玉を投げる音も作る音も聞こえない。

(……………どうしよう)

誰か、助けて下さい。

十六話（後書き）

「良いなー…」

「……どうした？」

最新を読みながらアルは言う。

「俺も雪合戦やりたい」

「……………」

二人で？ いや、そんな事アルは言わないだろう。

（多分……）

「スーザーとああ……エスタージオも呼んで後はゴドに任せるよ」

（やっぱり……）

四人では無理がある。

（だからって呼んでもなあ……）

ハリーにロン、ハーマイオニーに俺、ライル、ソーラスにアルにスーザー、エスタージオ……

（うん、九人しかない）

後一人……誰か居たか？

「……アル、諦めろ」

「えー？」

俺がそう告げると嫌そうに言うアル。

(……………)

正直、雪合戦はしたくない。人数を集めるのも面倒だし、年なのか体が動かしにくい。

……まあ、一番の理由はそんな気分じゃないから、だけど。

(まあ、それでも負ける気だけはしないがな)

だが残念ながら雪合戦は今度、だ。

俺は杖を取り出し、振るう。

「うわー…雪だ」

残念ながら本物ではないけれどそれでも十分楽しめるはずだ。

(本物降らすには時間があるしな……)

時間は沢山いるし、魔力も当然沢山いる。

疲れるだけなので出来ればこちらで満足して欲しい。

（でも、多分本物の雪が降らせられるか聞くだろうから……）

聞かれる前に退散するでしょう。

俺は喜んでいるアルに気づかれないように去った。

十七話

あの雪合戦は結局俺が父親に起こされ抱っこされる、という事で終わった。

俺自身は抱っこにも抵抗があつたのだが起き上がる精神力は既に無く、なされるがままスーザーの大爆笑を聞きながら家へと帰った。それから数日は大人しくしていた。外に出てスーザーに仕掛けたり、家にて物や玩具で遊んだりせずただ起きて飯食って寝るの繰り返しだった。

（それだけだったのに、なあ）

俺は現在、熱を出していた。

頭が痛いや頭が熱いよりも体中が凄く熱い。まるで体の中に炎があるみたいに頭から指先まで体温は上がっていた。

「大丈夫？」

薄い紫色の髪を揺らしながら母親が俺の顔を覗く。

「……う、ん」

生返事をし、ボンヤリと眺めていた俺にペタリと冷たい手が額に当たる。

「まだ熱いわね」

その手があまりにも冷たくて熱を出している俺には丁度良かった。

（きもちいい……）

トロリと瞼が下がってくる。

「……お休みなさい」

ニコリと微笑む母親を最後に俺はプツリと意識を失った。

「……………ん？」

薄く、目を開くとそこに見えたのはぼやけた緑色だった。

「あー…起きちゃったか」

そして聞こえてきた声。

(スーザーの……父親?)

何故、彼が部屋に?

俺はパチリとハッキリ目を覚ます。

すると目の前には緑色で円がありその中に変な模様がある不思議なもの父親の顔だった。

(……………あれ?)

父親の周りにある薄い赤い奴が緑色の所に行って色が変わっている。

「……………?」

キョトン、と俺は首を傾げる。

それを見た父親が苦笑しながら告げた。

「明日、話すよ」

だから今はお休み、と言う言葉と共に俺は瞼が閉じていった。

スウと気持ち良く目を覚ました時にはもう昼で。

昨日みたいに熱は出ていなかったから俺はベットから下り下へと向かった。

「おはよう」

どうやら今日は仕事が無いのかニコリと微笑みながら父親がリビングに入るなり声をかけてきた。

「……………」

「……昨夜の事だね」

話すからまず座りなさい、と父親は告げる。

俺は素直に従い向かいの椅子に座る。

「まず……魔法使いを知っているかな？」

言いにくそうに父親は言う。

「……単語だけなら」

俺がそう言うとき、と言って昨夜みたいな円を書いていく。

「魔法使いとは魔法が使えるものだよ。こうやってマグル……普通の人間には出来ない事をするんだ」

そう言った瞬間にその円からボツと炎が現れた。

「……！！」

いきなり現れた炎に俺は驚く。

（また……）

けれど驚いたのはそれだけではない。昨夜と同じような事が起こっていた。ただ違うのは炎が出る前に赤い奴が緑の円に集中した事だけ。

「……その、赤い奴と緑の円が色が違うのは何で？」

分からないならば聞けばいい。そう思った俺は父親に問う。

しかしそれを聞いた父親は驚いていた。

「やっぱり見えるのか……」

そうポツリと言って父親は話し始める。

「赤い奴は俺の魔力だよ。魔法の源とも言えば良いかな？……これは普通、見えたりはしない」

見える以外にもいるかな？と父親は急に聞いてくる。

「……フンワリとはする」

やっぱり、と言って父親は話し出す。

「それは滅多にいない能力だ。魔力が分かる……視覚でも感覚でもそれを鍛えれば何処に誰がいるかすぐに分かってしまう」

魔力は一人一人違うからね。特に魔法生物とかとは違いが出来るから、と父親は言う。

「……違い？」

俺はそう問うが父親は何も言わずにこう告げた。

「……それは誰にも話してはならない」

「……………何で？」

次々に変わりながらも進んでいく話しに混乱しつつも、俺は頭に入れている。

「先程、滅多にいない能力、と言ったよね？鍛えれば何処に誰がいるかすぐに分かってしまう、とも。それは魔法使いにとってどれだけの金を払おうが欲しい能力だ」

それがあればマグルか魔法使いかすぐに分かるし、魔法使いの特定も出来て素早い魔法生物も見つけられるから、と父親は言う。

正直、魔法生物が何なのか分からない。

けれど見つけてはいけないものなのだろう。

真剣な顔で話す父親を見て俺は強くそう思った。

誰にも話してはならないよ、ともう一度言い父親は話を戻した。

「話しが随分ズレてしまったけれど……俺が魔法を使えるって事は魔法使って事は分かるかな？」

俺はコクンと頷く。

「昨夜、俺が君に使っていた魔法は――」

父親は途中で話を切り、凄く言いにくそうな顔をする。

そして決意をしたような顔で口を開いた。

「昨夜、君に使った魔法は君の中にいた悪い物を取り除く魔法なんだよ」

だから熱を出してないだろう？と父親は言う。

「君が目覚めますとは思わなかったけれどね」

そう言っ父親は苦笑した。

「……………」

正直、よく分からなかった。分かった事と言えば魔法と魔法使い、普通の人間をマグルって言った事と俺に魔力が分かる珍しい能力があるって事とそれを話してはいけなくてだけ。

理由なんてよく分からなかったし、昨夜の事についても何だかモヤモヤする。

けれど聞いてももう答えてはくれないだろう。父親は既にこの場を去ろうとしているのだから。

「はい、昼食よ」

時期を見計らっていたのだろう。母親はカタンと昼食を出してきた。モヤモヤモヤモヤしながら俺はその昼食に手を伸ばした。

十七話（後書き）

「……こんなものかな？」

カタンと羽ペンを机に置き、手を真上へと伸ばし筋力を解す。

「……そう言えば静かだな」

アルが魔法を教えて教えて煩いから初めからなら、と魔法生物のテキストを作っていたのだが……

（初めの頃は周りをグルグル回って側に居たんだが……）

何処へ行ったんだ？

「教えて、教えて言っていたのにな」

いざテキストが出来たら本人は行方が分からない。

（ま、そんなに広くは無いから良いけど）

ガダンと椅子から立ち上がりアルを探しに行く。

「……………あ」

十分もせずにアルを見つけた。

「寝てたのか……」

毛布もかけずにアルは寝ている。

「たくっ……」

ヒョイと手を振り毛布を取り寄せる。

「寝るなら毛布くらいかけろ」

ま、俺はかけて寝ないけど。

ソツとアルに毛布をかけ、俺は机へと向かった。

十八話（前書き）

この中に有名な童話を取り上げました。

と、言っても冒頭や終わりしか出てませんし、そこは自分で考えたものです。

そのまま使った単語もありますが丸々使用したのは題名くらいですね。

それでも色々引っ掛からないか不安ですが……

だ、大丈夫かなあ……

十八話

季節はドンドン真冬へと入り、此処最近ずっと雪が降り続けている。俺は別にこのくらいの雪には慣れてるし、寒いのも平気なのだがスーザーは寒いのが苦手らしく部屋に籠ってばかりいる。

スーザーやその両親以外の知り合いがいない俺は必然的に家に居るしか無くなった。

（暇だなー…）

なるべく家事などを手伝って暇を潰しているのだがそれでも時間が空いてしまう。

「うー……………」

ペタリと机に手と顔をくっつけ、俺は呟く。

「本でも読む？」

ダラーと行儀が悪い俺を見て母親が声をかけてきた。

「……………本？」

本、という知らぬ単語を聞き俺は顔をあげる。

「ええ。本は政治、農業、天文学、ルーン文字学とか色々な勉強や物語とかが書かれてあるの」

魔法についての本も何処かにあるってあの人に聞いたわ、と母親は洗濯物を整理しながら言う。

「此処には絵本とか……後はスーザーが読んでいるような難しい本しか無いけれど」

「……………絵本？」

「読んでみる？」

母親の問いに俺はコクリと頷く。

「分かったわ。ちょっと取って来るわね」

そう言って母親はパタパタとリビングを出て行った。

母親はすぐに水色と緑色が入っている本を持って来た。

「あった、あった」

そう言いながらガタンと椅子を引き俺の隣に座る。

「懐かしいわね」

ドスン、と本を机の上に置く。

本の表紙には黄色で“Jack and the beanstalk”と書かれてあった。

(……………?)

キョトンと首を傾げる。

「ジャックと豆の木、って読むのよ」

ゆっくりと文字を指でなぞりながら母親はそう言う。

「文字を追いながら読んでいこうか」

こう言って母親はゆっくりと本を開きジャックと豆の木を読み始めた。

「ジャックはお母さんと幸せに暮らしました」
パターンと母親は本を閉じる。

「……………」

「…………どう、だった？面白かった？」

そう尋ね、母親はじつと俺の方を見つめる。

「……………」

ジャックと豆の木……だったっけ？

面白い、という事が良く分からないけれど集中して話しは聞けた気がする。

俺は口を開きゆっくりと話していく。

「……面白い、が分からないけど」

「集中して聞いた」

「……………良かった」

安心したのかホッと息を漏らしながら母親は言った。

「読み聞かせなんて初めてだったから、少し不安だったけれど」

夢中になれたのなら嬉しわ、と母親は嬉しそうに頬を上げ笑う。

「でも他に絵本とか無いのよね……」

あの人が話しかか上手かったから買ってなくて、と母親は言う。

「スーザーも絵本と言うよりかは児童書をすぐに読むようになったし……」

何冊か絵本を買おうかしら、と母親はため息をつきながら呟いていく。

俺は隣でぶつぶつと呟いている母親の服を恐る恐る掴み、引っ張る。

「問題はお金よね。スーザーが良く……どうしたの？」

母親は呟く事を止め視線を合わせる。

「………もう、一度」

「ん？」

「……もう一度、読んで？」

そうやって俺は絵本……ジャックと豆の木を指差す。

「……ええ、分かったわ」

母親はニコリと笑いながら言い、絵本を俺が見えるように開いた。

「イングリッドに住んでいるジャックは――」

先程と同じ様に、文を指で追いながらゆっくりと読んでいく声が響いた。

十八話（後書き）

「まずは――ピクシーからやろうか」

俺はそうアルに告げて話し出す。

「ピクシーとは小妖精も言う。ピクシーは悪戯好きで魔法使いだろうがマグルだろうが襲うためマグルでも知っている奴が多いな。最も――素早いからマグルが捕まえた事はないが。……ああ、素早さに困っているのはマグルだけではない。低脳な魔法使いならば魔法をかける前に杖を取られ魔法を使われたりする。そろそろ奴らは自身が思っているほどピクシーは賢い事を学ぶべきだな。そんな色々な事を起こしているピクシーだが先程も言ったように素早くて賢い。だが、それだけではなくて奴らは力もある。二匹で人一人なら余裕で持ち上げられるな。そのままシャンデリアやフックなどに引っ掛けたりする。後はこれはマグルでの事例だが――」あのさ、ゴド」……何？」

怖ず怖ずとアルが言う。

「長くて覚えきれない」

「……………そっか」

カツカツと俺はアルに近づく。

「アル、知っていた？頭に刺激を送ると記憶力が上がりやすいんだよ」

だから頭に少しずつ刺激を与えて記憶したりするな、と俺は続ける。

「最も脳細胞はどんどん死ぬがな」

そこまで言って俺はニヤリと笑う。

「ゴド……?」

「大丈夫。叩き過ぎたくらいでは死なないから」

そう笑顔で告げてアルの頭を叩く。

「だっ……」

何っ……とアルが言うのを俺は笑顔で遮る。

「一からやろうか?」

「……………はい」

何だかガクガク聞こえるけど……気のせいだな。

俺は深く息を吸い込んだ。

十九話

厳しい真冬を追加されて増えた絵本をひたすら読んでもらい、文字を読めるように時間をかけた。

おかげで綴りの長い奴はまだ自信がないけどリngo、とかなら自信を持って読めるようにはなった。……書けないけれど。

絵本に夢中になっている間に気づいたら真冬ではなくなっていて、それに気づいた俺はスーザーを連れて外へと出たのだ。

「うわぁ!!」

何処へ行くのか悩んでるいるとスーザーが手を引っ張り俺を川へと連れて来た。

「此処、本当に川？」

段差があるにはあるが目の前には一面の銀世界で、とても川があるとは思えなかった。

「あるよ。多分、この雪を掘り返したら凍った川が出てくるよ」
クスクスと笑いながらもスーザーは段差を下りていく。

「あ、待ってよ！」

俺は滑るように段差を下りスーザーの後を追う。

「じゃ……頑張ろうか」

ズザザ……と足から転びそうになりながらも俺がスーザーの元へと駆け付けた時にスーザーはヒクリと引き攣ったような笑いで農業とかで使うと聞いた……ス、スコップだっけ？それを二つ持ちながら言った。

「……頑張る？」

俺はキョトンと首を傾げる。

「うん。凍った川を見つける為にはこの雪を退かさないとね」

そう言ってスーザーはスコップを一つ俺に向けてポイと放り投げた。俺はドンツと腕に当たりながらもなんとか受け取る。

「さー、重労働だ」

スーザーはザクリと地面にスコップを差し入れ雪を掻き出していく。
(じゅう……ろうどう?)

キョトンと首を傾げながらも俺はスーザーの真似をする。

「!?……お、もっ」

ズシリと雪の重みがましたスコップを震える手で持ち上げ雪を放り出す。

「頑張って雪を掻き出すぞー」

棒読みなスーザーの言葉が虚しく響いた。

「お、終わった……」

ペタリと最後の雪を今までで放り出していた場所へ持って行き放り出した後に座りこむ。

「やっと、終わったな」

スーザーも息を切らしながら俺の隣に座る。

「長かった……」

俺とスーザーは朝早く家を出た。他の人が周りにいないくらい早く。けれど日はとくに真上を過ぎて、斜めの位置へと傾いていた。よって今は夕方近くになる。

「あー…大分かかったね。これはあまり長くは滑れないや」
でも、せっかくだし滑って帰ろうね、とスーザーは言う。

「……滑る?」

意味が分からない俺はスーザーに再度問う。

「凍った川に足を踏み入れたら分かるよ」

そう言ってスーザーは立ち上がる。

俺も慌てて立ち上がり駆け足でスーザーよりも先に凍った川へと近づく。

「……………」

そっと右足を川へと一步踏み入れ、もう片方である左足を踏み入れる。

「……スーザー？」

何も変わらないけど、とスーザーに向けて言う為振り返るとそこにはニヤリと笑うスーザーがいた。

「これが滑るだよ」

そう言ってスーザーはドンツと俺の背中を押した。

「うっ……わっ」

普通ならば押されたら前へ転ぶ。けれど何故かスーザーに押されたのに前へ転ばずにスウーと前へ進んだ。

「????」

「これが滑るだよ」

川が凍ってツルツルな水になっているから出来るんだよ、と言いながらもスウーと滑りながらスーザーは隣へやって来た。

「最も氷が薄いと割れて冷たい水の中へと落ちるから気をつけてね」
ま、俺が居るから落ちても凍死とかはないから、と言ってスーザーは勝手に滑り出した。

スウーと慣れたように綺麗に滑って行くスーザー。

（す……ごい）

この冬、ずっと引きこもっていたのにあんなに綺麗に滑るなんて。

（俺、も……）

俺は自分の足元を見て、次にスーザーを見る。

（スーザーみたいに出来るかな？）

俺はスーザーがやった様に足を交互に踏み出していく。
初めてはグラグラとしながら進んでいたのだが、スーザーを見ながら滑る間に一歩ずつ前に出すのではなくて少し外側から斜め内側に行くように滑れば良い事に気づき、実践してからはスーザー程綺麗ではないがスムーズに滑れるようになった。

「お、滑れるようになったね？早い早い」

そう言いながらスーザーは俺に止まるよう仕種をした。

それを見た俺は止まる……いや、止まりたかったが、止まれずにスーザーにぶつかった。

「まだ止まらないか……まあいいや」

どうせもう帰るし、とスーザーが言う声が聞こえた。

「もう帰るから最後に勝負だ！」

スーザーはスコップを置いた場所を指差す。

「あそこまでなら氷が薄くないし、安全だからどちらが先にあそこに着くか競争だ！」

行くぞ、とスーザーは俺の返事を聞かずに進めていく。……多分、俺が断らない事を知っているからだろうけど。

「一——二——三！」

俺はスーザーのカウントが終わると共に右足を右斜め前へ向かうように踏み出した。

十九話（後書き）

「スキー……良いなあ」

アルが休憩、休憩と煩いので少し休憩を取っている時だった。

「スキー？」

なんでまた、と思いながらも俺は聞く。

「いや、だってゴドスーザーと一緒に滑ってるから」

俺した事無いし、とアルは言う。

（スキーなんてしたか？）

俺がスーザーとしたのはスケートに近いものだった気が……

「アル、それスケートじゃないか？」

「スケート？……さっき俺何言っただけ？」

「スキー」

「……………」

「……………」

「あ、そうそう、スキーだよ！！」

「スケートだから」

あ、とアルは呟き、黙り込む。

（……記憶力大丈夫なのか？）

退行したりは……してないよな？

アハハハ、俺馬鹿だからと言うアルの笑いが虚しく響いた。

……馬鹿なのは同じなのか、と思ったのはこれから先でもアルに言う事はないだろう。

二十話（前書き）

現在、願書書きにワタワタ焦って混乱しています。主に志望動機とかを裏に書かなければいけない事です。

ぶっちゃけて言いますと小説を書いている暇、ありません。

……いや、作ればあるかもしれませんが頭がもう願書の事でいっぱい、先程無理矢理一話書きあげましたが上手く作れていません。

よって願書が書き終えるまで更新出来ません。
最大で今月いっぱい。

ただ、願書が早く書き終えれたらすぐさま更新再開します。
私も早く終わるように努力はするので……

楽しみにしている方には申し訳ございません。

本気で早く終わるように無い脳みそで頑張りますので。

願書と言う敵をやっつけてから、また会いましょう（笑）

二十話

「お買い物に行かない？」

冬が終わりに向かっているのか、雪は溶け寒さが少し和らいできたこの時期にヒラヒラと俺の前に手を出し振っている母親はこう言った。

「買い物？」

俺は絵本から母親へと顔を向ける。

「ええ。一緒に行かない？」

食材とか服とか色々買いたいし、と母親は言う。

「……………行く」

パタンと絵本を閉じて机の上に置き、椅子から飛び降りる。

「じゃあ、行こうか」

母親はニツコリと笑いながら手を差し出した。

俺は怖ず怖ずと差し出された手を掴み、言う。

「うん」

キュツと手を握られながら俺は母親と一緒に家を出た。

食品や服や色んな出店がありザワザワと沢山の人がいる中で、俺は母親と手を繋いだまま食品が集中しているお店に居た。

「……………うん、このくらいね」

行くと違いドッサリと膨らんだ袋を抱えながら母親は言う。

それを見た俺はクイクイと袖を引っ張り、告げる。

「荷物持つよ？」

母親は嬉しそうにフワリと笑いながら言う。

「大丈夫よ。いつもの事だから」

ガサリと荷物を持ち直しながら母親は続ける。

「それよりも、他を見て見ましよう？」

此処は広いから色々あるわよ？と母親は告げる。

「色々？」

「ええ。文具や家具……確か絵本も置いてあったわね」

絵本と聞いて俺は素早く母親へ顔を向ける。

それを見た母親はクスクス笑いながらまずは絵本ね、と言って俺の手を少し強く握りしめ食材店から離れる。

ガヤガヤと騒がしい人々の間をぶつかりながらも絵本が置いてある店へと向かっている途中だった。

「泥棒だあああ」

遙か後方から聞こえた声。けれどその声はハッキリと響いていた。

（泥棒……？）

俺は泥棒、という意味を聞こうと母親に向けて口を開いた瞬間だった。

ドンツと後ろからやって来た何者かに押されたのだ。

「うわっ！」

俺は堪えきれずにベチャツと倒れたのだが、押した人物は何も言わずに人混みに紛れてしまい誰だか分からなくなっていた。

後ろからだったから余計に顔や髪型などは分からない。

「大丈夫？」

全く、ぶつかっただら謝りなさいよね、と怒った様な声色で母親は俺の心配をしつつもぼやく。

「捕まえたっ！！」

俺は立ち上がろうと腕に力を入れようとしたら腕を誰かに捕まれこと言われた。

「「……………え？」」

俺と母親は同時に聞き返すが掴んだ人物は物凄い力を込めて俺を逃がさないようにする。

「~~~~っう」

あまりの痛さに手先が痺れ始め涙目になり始めた頃、それを見たのか母親が眉を吊り上げ俺の腕を掴んでいる人物を睨む。

「痛がつてるでしょ！！それに私の子供が何をしたって言うのよ！！」

「……私の子供？」

俺の手を掴んでいる人物はジロリと俺を見る。

「そうよ。早く離しなさい」

母親は毅然とした態度で言い放つ。

するとスルリと腕は離され痛みも無くなった。

「すみませんでした！！」

すぐさまに頭を下げ謝り始める。

俺は少しだけ耳に入れながらも捕まっていた腕を見て摩っていた。

「先程の泥棒をした子供と似ていたのでつい……すみませんでした」

「子供？」

「はい……両親が無くなって孤児となった子供なんです。良く店の物を盗むんですよ」

被害額も半端ないので……と申し訳なさそうに言う。

そこからは右から左へ流したから何を話したのかは分からない。

俺はただ、青紫色々になって鬱血している手を見るので精一杯だったから。

（青い！？）

今まで旅をしていてもこんな事になった事がなかったから顔から血が引きながらも必死に息を吹き掛けていた。

（青なんて飛んじゃえ！！）

ずっとフウフウ息を吹き掛けても一向に青い色は消えず困った俺は顔を上げた瞬間だった。

心配そうに眉を潜めた母親の顔がすぐ側にあったのだ。

「！？」

ビクリと肩を揺らし、俺は目の前にあった顔に驚いた。

「……早く冷やした方が良いわね」

そう言って母親はスッと立ち上がり俺の手を握る。

「早く、帰ろう」

ごめんね、絵本はまた今度ね、と言って母親は来た道に戻っていく。

「痛かったよね……やっぱり、」

悲痛そうに言った言葉。けれどこれより先は周りの音に掻き消されてしまっただけの出来事だった。

二十話（後書き）

「んー…？」

現在、少し前に弾丸のように授業を行ったピクシーについてテストをしている。

……勿論アルが俺の前で。

「うあゝ…」

「分からないなら諦めて出したら？」

「んー……そうする」

ペラリと羊皮紙を差し出す。

俺はそれを受け取り、解答を見ていく。

（聞いてない、とかテスト中に唸っていたにしては……）

良く出来ている。

無解答の所と何問か間違えているくらいで後は全て合っている。

（大体八割……って事か）

ニヤリと唇を上げる。

「八割くらい合ってるよ」

「え、本当に？」

パツと笑顔になり問い掛けてくるアル。

「ん」

俺は短く同意し、間違い部分を訂正していく。

「はい」

訂正をし終わった羊皮紙をアルに返す。

「うわ、本当に八割取れてる！」

キヤイキヤイと嬉しい声を上げるアル。

（……女子？）

その様子はまるで試験結果を発表した時の女子と同じだ。

「俺、こんな点数を取ったの初めてだ！」

目をキラキラと解答を見ながら言う。

俺はそれを見てため息をつきながらも微笑む。

「ゴド、また魔法の勉強教えてよ！！」

期待したような目で見上げてくるアル。

「また、な」

俺はくしゃくしゃとアルの頭を撫でた。

二十一話（前書き）

願書の下書きを提出し、担任からそれが返って来てから少し放置しているカイラです。

まあ、余裕があつての行動だったのですが……

その余裕が無くなりました。

テストが願書提出日と近かったんです。

再来週には面接ないのに面接練習……

現在涙目です。

これ、絶対にイジメですよ。

確実に受験生の首を取りに来てますよ！！

先生方が問題を優しくしてくれないかなあ……

……話しがズレましたね。

テストを知る前まではまあ、長くても今月だけ更新出来ないだけだし……と思っていたのですがテストが入るとそれが十月半ばまで出来なくなります。

そんな期間放置するのもなあ、と思い小説をあげました。

時間を見つけては執筆し、載せていこうと思っています。

ですが前程、定期的にはならないと思います。

少し、更新落ちます。

楽しみにしている方には申し訳ございません。

二十一話

主婦の一日は早い。

大分寒くなくなり、時々暑さを感じてしまう朝を早く起床して、最初に朝食を作らなければいけない。

「おはよう……」

まず、一番に寝ぼけながらも商人である夫が下りてくる。

「おはよう」

夫は寝ぼけたままガタンと席に座りカクリカクリと頭を揺らしながら睡魔と戦う。それが日常……と言うか、ただ朝に弱いだけなんだけれど。

（絶対ラクが朝弱かったのってこの人からよね……）

それを見て苦笑しながら朝食を作るのが私の日常。

ある程度朝食を作り終えたらそれを机に持って行く。

その頃には睡魔に勝ち、ハッキリと起きている夫が手伝ってくれるから結構助かってる。

「いただきます」

机に料理を並べ終え、二人一緒に食べる。

時々会話をしながらも朝食を食べ終え夫は仕事に、私は食器を洗いに厨房へと入る。

カチャガチャと二人分の食器を洗い終わると同時にタイミング良く下りて来るのは息子のスーザー。

「母さん、朝食なに？」

こう言いながらパタパタとリビングに入る音が聞こえる。

「今、出すわ」

スーザーに返事を返し、残っているスーザーの分をリビングの机へと持って行く。

「いただきます」

スーザーは何処かの二人みたいに寝起きは悪い方ではない。むしろ

良い方だと……思う。

ただ、寝相だけは悪いみたいで今日も髪があちらこちらピヨンピヨン跳ねていた。

（まあ、すぐに直せるから良いのだろうけど……）

寝癖がすぐに直せるなんて、羨ましい限りだわ。

「ごちそうさま」

俺、今日は約束があるからあの子頼むね、と言いながらスーザーはすぐさま家を出て行った。

私は慌ただしく出て行ったスーザーを見送り、食器を下げる。

一人分しかない食器はさほど時間がかからずに終わる。

我が家の朝食（食器洗い済み）が終わった私は次に洗濯へと向かう。四人分の洗濯は以外と重労働だけれども、やんちゃな双子が居たからかそんなに苦では無い。

あの子達が居た頃は大変だった。

洋服を汚す事は無いけれど、最早トラブル製造機と言えるくらいにトラブルを起こす兄に巻き込まれる弟。

私家事をしていようが兄は良くトラブルを起こしては弟が巻き込まれていた。

おかげで家事なんてスムーズに進まないし、時には家事をしている側で食器を割ったり畳んで積んでいた洋服を崩したり……わざとでは無いけれど、そのたんびに家事の量も時間も何倍にも膨れ上がった。

（……あれがわざとならキツク怒れるんだけど）

何度ため息をついただろうか。

（……………それでも）

双子の笑顔や寝顔を見れば癒されたし、双子が減多にない他人から褒められれば嬉しい。……楽しい時間があったのだ。

私はフルフルと頭を振る。

思い返す事は悪い事ではないかもしれない。けれど、ずっとつらつら思い返せば自分が辛いだけだ。

（今は今！！）

昔には戻れないし、今はしょんぼり落ち込む日ではない。

そんな日は……一日だけあればいい。

……実際には二日くらいあるけれど。

（今日は……今の洗濯を終わらせて、掃除をして……）

それから昼食を作り朝に起ききれなかったあの子と一緒に食べる。

後は……また絵本を読むなり一緒に遊んだりをするだけ。

……それが一番疲れるのだけれど、仕方がない。

読んで欲しいとあの子が言うのだ。

あの子の申し訳なさそうに言う姿を見れば……

（どうしても聞いちゃうのよねー）

手を離してしまったから、もあるのかもしれないけれど。

「おは……よ……う」

ゴシゴシと眠そうに目を擦りながら息子が下りて来て、洗い場に顔を出した。

「……起きたのね。昼食（朝食）は洗濯が終わるまで我慢しなきゃいけない、け……ど」

息子はペタリと座ったかと思うと私に寄り掛かりスウスウ寝てしまった。

（寝ぼけていただけ……？）

ようやく出来るようになった先程の挨拶を含めて、どうやら寝ぼけていただけみたい。

私はため息をつきながらなるべく息子が起きない様にユックリと洗う。

チラリ、と横顔を覗くとまだまだあどけない息子の寝顔。

（かわいい……）

クシヤリと頭を撫でたいところだけれど、残念ながら今私の手は泡だらけ。

（仕方ないわね）

今はこの寝顔を眺めるだけか。

「早く終わらせましょうか」

そして息子を起こして昼食を食べさせないと。

私は、パシヤリと泡だった洋服を持ちながら手を水の中に入れた。

二十一話（後書き）

（あー……）

スヤスヤと寝ているアル。

時刻はとくに深夜を過ぎもう少ししたら朝日が昇る時間だ。

アルはいつも通りに俺より先に寝ていたはずだった。

（なのに、何で）

俺が寝る場所でアルは寝ている？

（俺が寝れないじゃないか）

……何処で寝よう？

ハア、と俺はため息をつく。

（わざわざ起こすのもな……）

熟睡しているみたいだし、出来るなら起こしたくはない。

「……………ラク」

ポツリと呟かれた名に俺はピクリと肩を揺らす。

だが、呟いた本人……アルはスヤスヤと気持ち良さそうに寝ている。

（心臓に悪いな、これは）

俺は思わず苦笑する。

（今夜はもう、徹夜だな）

こんな心臓に悪い寝言を聞きながら寝れる程、精神図太くない。

「……良い夢を」

俺はパタリと扉を閉めて出て行った。

二十二話

「――恐る恐る、後ろを振り返るとそこには――」

「晩御飯出来たよー!!」

「うぎやあああああああああ」

夏にも入って来たし、夜せつかく皆が居るから怖い話しでもしてやってたんだが……

（邪魔されたな）

晩御飯を告げる妻の声に遮られてしまった。

（スーザーには十分きいたみたいだけど……）

俺は苦笑しながら叫び声を上げ、プルプル震えているスーザーを見る。

その近くには話を始めた時と表情が変わらない息子……ラクが座っている。

（……誰に似たんだろうな？）

普通、怖い話しと言ったら子供は叫んだり泣いたりするんだが……スーザーとは違い全く物怖じをしないラクはスツと立ち上がりリビングへと向かった。

俺も晩御飯を食べる為に立ち上がりリビングへと向かう。

「あ……ちょっと待っ……て」

フラフラと立ち上がり覚束ない……いや、ものすごく震えながらスーザーは歩いてくる。

（……スーザーは物怖じしすぎるよな）

そこまで怖くなる程の話しでは無かったのだが。

俺はため息をつきながらもフラフラとやって来るスーザーと共にリビングへ向かった。

「遅かったわね」

はい、と妻は言いながらもそれぞれの前に料理を置いていく。

「怖い話をしていてね」

スーザーには効果があったけれど、あの子にはそうでも無かった、と俺は告げる。

そうしたら妻はクスクスと笑い始める。

「でしょうね。あの子は怖い絵本でも物怖じしないから」

スーザーとは違って、と妻は言う。

「スーザーは前に一度、幽霊の話をしただけで泣き喚いて……」
宥めるのが大変だった、と妻は言う。

「……だって、怖い」

ポツリとスーザーは言う。

「幽霊なんていないわよ」

クスクス笑いながら妻は言う。

「なら、試すか？」

「……は？」

俺が言い出した言葉に二人は驚いたように言った。

「ちようど夏始めだし、涼しくするにはちようどいいだろう？」

「い……嫌だ嫌だ」

ブンブンと首を横に振るスーザー。

「な、夏始めだからそんなに暑くないし……別にしなくて良いわよ？」

口が引き攣りながら言う妻。

俺はそんな二人を見ながらニヤリと笑い、一人平然と食事をしている子に聞く。

「皆で外に出掛けないか？」

始めは声をかけられた事が分からないのかひたすら食べていたが食事を止めフツと顔を上げて俺を見つめてきた。

俺はもう一度、聞く。

「皆で外に出掛けないか？」

するとあの子はパッと笑顔になる。

「……………うん！」

「「狡い!!」」

すぐさま二人からこう言われるが……………そんなものやったもの勝ちだ。

「じゃあ食べ終わったら行こうな」

フツと笑いながら俺はそう告げた。

「「はーい……………」」

シヨンボリと言う二人の声がりびングに響いた。

「……………此処で良いかな？」

夕食を終え、皆で外に出てきた。

この村の近くには森だとか墓場だとか……………そういう肝試しにピッタシな場所がない。

だから俺は村の入り口に来ていた。

「二人一組で、村を一周な？」

「ふ……………二人？」

皆で行くんじゃないの？とスーザーは言う。

「皆で行ったらつまらないだろう？」

仕掛けも何もしていないからだ、暗い夜道を歩くだけになる。

「つ……………つまらない」

どうしても行きたくないのか、スーザーはそう言う。

「なら……………楽しくなるように怖い話をしようか」

俺はスウと息をすい、話し出す。

「ちようどこんな暗い夜の日だった。友人宅から帰る途中で、酒を

飲んでいたからほろ酔い気分でスキップしながらの帰宅だった。そんな彼が帰宅路の七割も過ぎた頃に急に後ろから人間の足音ではない、ヒタヒタと歩く足音が耳に入ってきた。その足音はだんだんと大きくなっていき彼はほろ酔い気分から焦り始める。一体自分に近づいて来ている者は何なのか？河童？水魔？それとも……幽霊？彼は四六時中、気になった。そして無意識に早歩きで家へと向かう。そのおかげか、自宅まで後少しというところでヒタヒタと言う足音も消えた。彼がホッと胸を下ろし一歩足を踏み出した時だった。『

ねえ……私の「トイレ」知らない』って……トイレ？」

これからだって時にあの子がクイクイ袖を引きながら言っていた。

（あー…我慢出来ないのか）

家に戻っている時間は顔を見る限り無理だろう。

（仕方がない……）

「んじゃ、そこら辺でするか」

俺はポンポンと頭を撫でながら近くで俺が人が来ないか立ってるからと告げる。

するとガシッと反対側の腕を捕まれる。

「い……行かないで」

スーザーが涙目になりながら縋りついてきた。

「大丈夫、母さんもいるー…」

そこで妻を見るがフイツと顔を逸らされ、僅かに震えていた。

（……………ダメか）

何だかんだ言いながらも妻もこういうのはダメだ。

「……………トイレ」

再びクイクイ引かれて催促される。

（……………むやみやたらに虐めるんじゃないかった）

後悔しつつも、体が二つに別れないかなあと俺は本気で願う。

（……………仕方がない）

妻は大人だし、スーザーだってもうそろそろ一人立ちしなければならぬ時期に入る。

（残しても大丈夫だろう）

恐怖に襲われている二人には悪いがこの子を一人でトイレには行かせられない。

「……トイレに行ってくるな」

ええと叫ぶスーザーの声を背後で聞きながら俺はあの子の手を握り二人からこちらが見えない場所へと向かった。

二十二話（後書き）

チュンチュン、と雀が鳴いたりコケコッコと煩く朝を告げる鶏の
声が鳴く声で俺は机から頭を上げた。

（あー…そうか）

徹夜しようと机に座ったのは良いけれど流石に睡魔には勝てず、そ
のまま仮眠したんだっけ？

ヒョイと体を伸ばすとバキバキバキと音が鳴る。

（……年、かなあ）

昔は何日間か寝なくても平気だったんだけど。

（今はそれが出来るかどうか怪しいな）

ギリリと音を立てながら俺は椅子から立ち上がる。

「さて、アルを起こさないと……いや、その前に朝食を作るか」

朝食はー…軽めのスコッチで良いか。

アルはそんなに食べる方ではないし。

アルがいる部屋ー…正しくは俺の部屋へと向かおうとした足を俺は
厨房へ向けた。

二十三話

ギラギラと暑い太陽の光りが射している部屋で一人の男性が黙々と書類を見ていた。

金髪の長髪だが揉み上げ辺りからは何故か黒い髪が伸びている個性的な彼は魔法大臣と言う職についている。

魔法界で実質上、魔法大臣はトップである。それは魔法使いや魔法生物を生かしたり殺したり出来てしまう地位。

そんな地位にいる彼が行ってきた事——役に立たないから障害者は即、死刑と言う法律やスクイプでも役立てるようにと奴隷と言う地位を作り上げた。

最近では魔法大臣専属奴隷が欲しい為に暗殺戦闘奴隷と言う、奴隷の中でも一番下の階級を作った。

“奴隷の中で一番下”それは魔法界にて一番下だと言う事を示していた。

だがその彼専属の奴隷は苦戦していた。暗殺は勿論、戦闘、料理、毒味、労働、そして——彼が望むなら時には夜の相手もしなければいけない、と何にでも想定して育て上げなければ彼の機嫌を損ね奴隷商工の首が空を飛んでしまう。

それにそんな完璧に近いような人間はそうそういない。いや——出来ないだろう。

だが、出来ないと言進言すればその瞬間に首が空を飛ぶ。

奴隷商工は日々、頭を悩ませていた。

そんな横暴な彼が何故魔法大臣の職につけているか。

それは彼が凄く人を操るのが上手いから。

役人を見事に操り障害者が死ぬような法律を通せば一方国民や役人にとって有利な法律も通す。

飴と鞭——しかも、人間というものは自分に害がなければどうでもいい、と言う性質が少なからずある。

自分は障害者でもなければスクイプでも無い――：よって自分は死刑や奴隷にはならないから別に法律が出来ても問題ない。むしろ、これを通せば労働の最低金額量を決めると言うならば通した方が利益がある、と。

こうやって彼は現在も魔法大臣の席に座り続けている。

コンコンと彼がいる部屋の扉をノックし、部下だろう人間が書類を持ちながら失礼します、と言って入って来た。

「出来上がりました」

そう言って部下は彼に持っていた書類を渡す。

彼はそれを見て僅かに唇を上げる。

「やっと出来たか」

あいつのせいで豊作年を探すのに時間がかかってしまった、と彼は言う。

「しかも予言しただけで自殺しやがるし」

でも俺は豊作年を見つけるまでは諦めないがな、と言って彼はペラペラと書類をめくっていく。

彼が言っていた豊作年とはその年に素晴らしい才能を持った子供が八割または九割生まれる事を指す。

昔から代々予言者が豊作年を予言をし、その予言をされた世代の間は色んな職業で活躍したと言われている。

ただ、それは上に立つ人間によって変わる。才能ある人間を受け入れられる魔法大臣もいればそれを私利私欲の為に人間を使う魔法大臣もいたのだ。

だが今回は、彼が豊作年の子を見つけて何をするのかは誰も知らない。彼自身が何も言わないのだ。言わないからと言って問いただしでも自らの首が飛んでしまう。

だから皆何も言わずに彼に従うしかないのだ。

「――：おい」

読み終えた書類を置き彼はニヤリと笑いながら告げた。

「この赤髪スクイプの家族はマグルに情報を渡して奴らに殺しても

らえ。残ったこのスクイプは暗殺戦闘奴隷行きだ。ああ、勿論ちゃんと“見せろ”よ」

「それから我々は地下へ潜る。正し、後で渡すリストに乗っているやつだけだな。リストに乗っていない豊作年はすぐに親から引き離し地上に置け」

「地下へは時期を見て潜る。準備をするように伝えろ」

それだけだ、と彼は言っただけで机の引き出しを開ける。

部下は分かりましたと言い部屋を出ていく。

残った彼は怪しく笑いながら引き出しから大臣用の日記と羽ペンを取り出す。

「精々俺を楽しませて踊られてろよ？」

お前らは俺の玩具なんだからな、と言いながら羽ペンにインクをつけ、彼は日記を書きはじめた。

二十三話（後書き）

「……ずっと思ってたんだけどさ」

アルが朝食を食べながら言う。

「ゴドってイギリス料理ばかりだよね」

「イギリス料理ばかり？」

「他にも――ほら、エスカルゴ使ったり、パスタ使ったり……色々あるよね？」

モグモグと食べながらアルは話す。

「美味しいけどイギリス料理ばかりとメニュー少ないから同じ料理ばかりになるし……」

「……………アル」

んー？と言いながらアルは俺を見る。

「エスカルゴって何？」

「えゝ……」

アルは目を見開き、信じられないような顔をする。

「フランス料理にある食べ物だよ。エスカルゴを食べる――…」

そこまで言ってアルは言葉を切る。

「……フランス料理、知ってる？」

「いや、知らない」

俺が生きてた頃は外国との交流は少なかった。

それはもう、外国人が居たら警戒するくらい。

「んー…あ、じゃあ」

カタリとフォークを置くアル。

「昼食は俺がフランス料理を作るよ」

少ししか作れないけど……頑張るね、とアルは言う。

「……楽しみにしてる」

俺はニヤリと微笑む。

（……ん？待てよ？）

エスカルゴって蝸牛じゃなかったっけ？

（……まさか、な）

あんな殻がある奴を……食べたりはしないよな。

食べれるかどうかも怪しいし。

まだ見ぬフランス料理に不安を抱きながら俺はアルに作り笑いを向けた。

二十四話

夏終わりに入る前に海に行こう、とスーザーからの発言で俺達は今、海に向かって歩いていった。

「つ……疲れたー」

フラフラと歩きながらスーザーが言う。

「後少しだから」

それに苦笑しながら言う父親。

「あの子を見習ったら？」

ため息をつきながら母親が俺を見る。

「スーザーみたいにフラフラしてなくてキチンと歩いているわよ」

「あいつは慣れてるだろー？」

チラリとスーザーは俺を見る。

「……………」

はぁ、とため息をつくスーザー。

「今からそれじゃ、海までもたないわね」

まぁ、静かになるから良いけど、と母親は付け加えながら言う。

「しばらく休んだら体力回復するから平気」

母さんと違ってまだ若いから、とスーザーが言った瞬間スーザーは

母親から頭を殴られた。

ゴツンツと痛そうな音が辺りに響く。

（うわー…痛そう）

俺が顔を引き攣らせながらスーザーを見ていると突然、俺の前にいた父親が振り返り告げる。

「海に着いたぞ？」

「「えっ？」」

母親とスーザーが同時に声を上げる中、俺は少し左へ移動する。

「う……わぁ！」

俺の前には、空よりも少し青い色をし所々白い線がある大きな水。

そして青い空にはボツンポツンと浮いている白い鳥に僅かにある雲が広がっていた。

（これが、海）

スーザーが海の水を飲んだらしょっぱいって言っていたのは本当かな？

「あ、本当ね」

ヒヨイと俺の右隣りに立ちながら母親が言う。

「早いもん勝ちだあああああ」

スーザーは海を確認した瞬間にこう叫び一人爆走する。

（……勝ち？）

何が勝ちなのだろうか？

俺はクイクイと母親の袖を引っ張り聞く。

「何が勝ちなの？」

「……私にも分からないわ」

何が勝ちなのかしら？と言ってコテンと母親は首を傾げる。

「……あんな時期もあるんだよ」

俺達も行こうか、と父親は苦笑しながら言う。

「そうね」

そう言って母親はキュツと俺の手を握り歩き出した。

「うわぁ！」

砂浜に着くと、あそこで見た景色とはまた少し違い、正面から波が来る海を見た俺は思わず海へと駆け出す。

しかし俺はヒヨイと襟首を捕まれ、止められる。

「水着と体操が終わってから……ね？」

「……………分かった」

上から聞こえた母親の低い声に俺は素直に応じる。

「じゃ、頼むわね」

「ああ、分かってる」

そう二人でやり取りした後に俺は父親へと渡された。

ヒョイと父親は渡された俺を抱き抱える。

「スーザーは……勝手に着替えてるか」

そう言って父親は草が茂っている場所へと向かった。

「此処なら……見えないか」

まあ、別に見られても困る事は無いけど、と言いながら父親は俺を地面へ下ろす。

「じゃあ着替えるか」

そう言って父親は服を脱ぎ始める。

それを見た俺は慌てて服を脱ぎ始めた。

水着に着替え、体操と言う奇妙な踊り……変な動きをした後に海に入ってもいい、と言われたので俺はすぐさま海へと駆け出す。

「浅瀬だけだからねー！」

そう言う母親の声が聞こえたけれど、俺は半分以上聞き流して海へと近づく。

海へ入ろうとした瞬間にザバアと高い波が押し寄せてきて俺は使っても無いのに全身濡れて浜へ打ち上げられる。

打ち上げられた状態からムクリと起き上がるとザラザラと体に砂がついてしまったが、早く海に入りたかった俺は口の周りだけを拭い海へと入った。

チャポンと足を入れ、高い波が来る前に前へ歩く。

足が届かなくなる所には行かない、と事前に父親からも言われてい

た俺は届かなくなる一步手前で足を止まる。

ザザーと音を立てながら緩やかな波が浜に向かって押し寄せてくる。それに合わせて俺の体も上下にユラユラと動いた。

(凄い!!)

初めての体験にバタバタと手を動かし海面に叩きつける。

(あ、そうだ)

スーザーがしょっぱいって言ったのは正しいのかな？

俺はチョンと指先を海に入れて、出す。

そしてその指をパクリと口に入れた。

「うゝゝゝ」

その味は、母親が塩を入れすぎて少し失敗した料理よりもしょっぱかった。

(これ、沢山飲んだらどうなるんだろう?)

きつと、あまりのしょっぱさに舌が痛くなって動かなくなるんだ。

(……それは嫌だ)

ブルリと体が震えながら俺はザブリザブリと歩き浜へと向かった。

すぐさま浜へと上がって来た俺を見て一緒にいた二人は驚いていた。

「どうしたの？」

楽しみにしてたよね？と母親はしゃがみ込み俺と同じ目線になってから言う。

「海の水を飲んだら……」

「ああ……しょっぱかったよね？」

それで驚いたんだ？と母親は言う。

しかし俺はブンブンと首を横に振って言う。

「舌が動かなくなっちゃう！」

「……………え？」

も、もう一回言ってくれる？と母親は言う。

「舌が動かなくなっちゃう……」

シユンと顔を俯せ、涙目になりながら告げる。

「……………どうしてそうなったのかしら？」

「……………どうしてだろうな？」

子供は大人と違って純粹だから、と父親は続ける。

「考えとか全然読めないんだよな」

そう言っポポンツと俯いている俺の頭に手が乗る。

「また海に入るか？」

それとも、もう入らない？と父親は聞いてくる。

俺は小さく入らない、と告げる。

「なら、一緒に浜で遊ぶか」

行こう？と言っポ父親は頭に乗せていた手を離し俺の手を優しく握る。

コクン、と俺は頷いて手を握り返す。

「よし、スーザーも誘うか」

そう言っポ父親はユックリと俺の手を引きながら歩き始めた。

スーザーも誘い、浜で色んな遊びをした。

誰が綺麗な貝殻を見つけるか、とか砂を深く掘ったりとか海の水近くの砂で泥団子を作りスーザーに当てたりとか。

それから遅めの昼食を取っポ、帰る前にもう一遊びしようとなっポ現在砂の山に穴を掘っポいた。

スーザーが言うにはこの穴を四方から山が崩れないように掘り進めれば中央で繋がるらしい。

手が当たるから繋がったかどうかはすぐ分かるよ、と言っポスーザーが一番に掘り出したのだ。

ガリガリと砂の山が崩れないように掘り進んで行く。

「感覚的にもう少しなんだけどな」

腕を突っ込みながらスーザーがそう言っポ瞬間に今までの砂ではな

くてポコリと穴が空き僅かに手が触れ合う。

「「「「あ」」」」

「繋がったみたいね」

結構時間がかかったなー、と言いながら母親は手を抜き始める。

「それは母さん達が遅いからでしょ」

スーザーが手を抜きながら言い返す。

「早く掘っていた貴方が何故同時に穴が空いたの？」

普通、先にそこは通じているでしょ？と母親は言い返す。

「それは俺が遅かったからじゃない」

どうみても向こうだ、とスーザーは言い返す。

「あの子が遅いのは当然よ。腕も短いし」

その分貴方がフォローするのが当たり前でしょ？と母親が言い返す。それにたいしてスーザーがまた言い返して……と言い争いになっていった。

「……楽しかったか？」

ポンツと頭に手を乗せながら、けれど顔は母親とスーザーを見ながら言う。

「……うん！」

俺は父親と顔を合わせてなくても、ニツコリと笑顔でそう告げた。

二十四話（後書き）

「あゝっだあああ」

ガッシャーンと物がひっくり返る様な音とアルの声が響く。

「……………てめえ」

何があったのかは分からないが相当痛かったのだろう。

普段のアルの性格は消え、静かに攻撃的になっていた。

「アル、落ち着こう？」

そう声をかけながら俺は料理を作っているアルの元へと向かう。

……内心やっぱり双子だな、と思ったのは秘密だ。

「……………ゴド」

ヒョイとアルを見れば手にはふくろうを締めていた。

「…………こいつ、殺っても良い？」

「…………動物愛護団体に捕まるから」

俺はパッとアルからふくろうを取り上げ、巻き付けられている羊皮紙を外す。

(……さて、誰からなんだ?)

滅多に來ない羊皮紙の差出人は――

(ダンプルドア……?)

先程アルが言ったばかりだけれど……

こいつ殺ってもいい?

二十五話

残暑で昼はまだ暑いけれど朝と夜はわりと涼しくなってきたこの頃。おかげで最近俺はベットから出る時間が遅れていた。

……まあ、今日は珍しく寝坊したからなんだけど。

（朝食まだ食べてると良いな……）

モゾモゾとベットから下り部屋を出る。

トントンと廊下に出て階段を下りていく。

（……………静かだな）

誰かいるならばそんなに広い家ではないから話し声とかが聞こえる。

（父親もスーザーも家を出たのかな？）

なら、家にいるのは母親だけ。

これなら朝遅くても咎められない。

……最も煩いのはスーザーだけだけど。

トントンと階段を下り終えリビングへと入る。

「……………え？」

リビングには誰一人として居なかった。

（……………洗い場かな？）

ペタペタと足音を出しながら洗い場へと向かう。

「……………居ない」

朝から昼まで母親は大抵リビングか洗い場にいる。

買い物に行くとしても今までずっと俺が起きてから一緒に行ってたんだけど……

（……………何か、あったのかな？）

キョロキョロと家の中を見回している時だった。

リーンと来訪者が来たことを知らせる鈴が鳴った。

（……………どうしよう）

今まで来訪者には母親かスーザーが対応していた。

俺はまだ来たばかりで知り合いが居ないから、と。

（でも、今俺しか居ないみたいだし……）

俺が出るしかない……よな。

俺がユツクリと玄関に向かい、扉を開けるまで嫌がらせの様に鈴は鳴った。

この行為にプチリと頭にきながらもガチャリと扉を開くと漆黒の髪の女性がニヤリと笑いながら告げた。

「やっぱり、居た」

まるで聞じゃないかと思う程に深い黒の目をした珍しい女性はそう言ってガシリと俺の腕を掴む。

「来い」

そう言ってグイグイ俺を引っ張って行く。

「誰なんだよ、お前！」

先程の行為と言いまの行為と言いま、プチリと何かが切れた俺は声を荒げながら言う。

「……ああ、邪魔だな」

そう言って女性は杖を出し振る。

俺は何が邪魔？とか何したんだ？とか何が目的？とか言いたい事はあったけれどまるで口を縫ったかの様にピッタリと口を閉じ、開く事が出来ない。

「これから“お前”の終わりを見に行くんだ」

女性は意味が分からない言葉を言いつて口を開かなくなった。

ただ、グイグイ引っ張って行くだけ。

（何がしたいんだ？）

無理矢理人を連れ出して――俺の終わりを見に行く？

頭がおかしいんじゃないか、と俺が思いながらも女性は広場に入っ
た。

当然、俺も連れられて広場に入る。そこで目に入った光景で俺は今までの思考が止まった。

（……な、んで？）

そこに居たのは、俺が探していた人物――母親にスーザー、そして

父親も居た。

三人は逃げられない様になのか縄で手足を縛られている。

「今からあるのはマグル達による公開死刑だ」

(……しょ……けい?)

処刑、とは何か痛い事をされるのだろうか？

カツカツと、一人の肥えた男と大きな鎌を持った筋肉質な男性が三人の近くへと立つ。

「皆の衆、“荒れ果てた荒野”のあの日からついに魔法使いを捕まえる事が出来た！」

ザワザワと周りが騒ぎ出す。

「あの日、我々の同胞は奴らに無残に殺された！それ以来我々が奴ら必死に探しても既にものぬけの殻だったり目の前で姿を消すばかり」

「だが、とある情報よりこいつが魔法使いである事を知った」

そう言うて太く、ブヨブヨに下がっている肉を揺らしながら男性は父親を指差す。

「よってこいつと……魔法使いを匿っていたとしてこの二人を公開死刑にする」

そう告げると周りはおおおお、と歓喜に似た声を上げる。

チャッキンと鎌を持ち替え音が嫌に耳に響く。

「皆の衆、臆する事はない。確かに我々は彼等の言う……魔法が使えない。だからと言って我々が奴らを殺せないわけではないのだ！」

「！」
今からそれを証明しよう……そう男性が告げると周りは一瞬にて静まり返る。

「……では、やれ」

そう告げて男性は四人から離れる。

その場に残った鎌を持った男性はユックリと鎌を構えながら三人の後ろに回る。

「……サラバ」

そう言つて一人に狙いをつけ鎌を振り下ろした。

ザンツと鎌が振り下ろされた音と共に赤い血が空に舞い、その中心には先程まで繋がっていた父親の顔。

(……………つ)

死刑が何なのか分かった瞬間、俺は三人がいる場所へと駆け出す。けれど後ろからガシリと捕まれ、行かないように持ち上げられる。

「そんな事はさせないよ」

それは俺を此処へ連れてきたあの女性の声だった。

(……………そ、いえば)

一緒に…………いや、無理矢理連れて来られた事を俺は思い出す。

『は・な・せ』

俺は口パクでそう告げようとして、口が開かない事を思い出し言葉の代わりにキツと女性を睨む。

「…………睨む暇があるのか？」

そう告げられた瞬間、ザンツと二度目の音が響く。

パツと急いで目を向けると母親の首は離れており、奴はスーザーへ向かつて鎌を振り下ろそうとしていたところだった。

「……………!!」

一生懸命に口を開こうとするが1?たりとも開かずに声は出ない。手足をバタつかせても女性には当たらないし、地面から離れている為空を切るだけで意味もない。

ザンツと三度目の音が響き、周りの歓声と共に赤い血が舞いスーザーの首が飛ぶ。

「…………これでお前の日常は、家族はもう無い」

そして、と女性は続けるが俺は何も聞いていなかった。

「——“お前”は此処で終わるんだ」

俺が覚えているのは女性の言葉よりただ、ただ、周りの歓声だった。

二十五話（後書き）

（……お茶会い？）

眉をこれでもか、と潜めながら俺はダンブルドアからの手紙に目を通していく。

（……行きたくない）

「……ゴド？」

ジイーと読み終えた手紙の下から顔を覗かせながら呼ぶアル。

「……どんな手紙？」

嫌な事だった？と心配そうにアルは言う。

「……糞狸からお茶会の誘い」

アル、行きたい？と俺は不機嫌をさらけ出しながら問う。

「……うん、悪いけど行きたい」

不機嫌な俺の態度で嫌っているのが分かったんだろう。

アルは謝りながらもそう言った。

「ゴドの知り合いなんだよね？」

会ってみたい、とアルは言う。

「俺の知らないゴドを聞けるかもしれないし」

俺はため息をつきながらもリビングへと足を向ける。

「行くなって返事しておくよ」

ヒラヒラと羊皮紙を揺らしながら俺は厨房を去った。

（……ダンブルドアかあ）

……アルに変な事を言ったら瞬殺しよう。

パツと杖を取り出し、魔法で手紙の内容を上手く返事になるように書き換えながら俺はダンブルドアの瞬殺方法について思案を始めた。

二十六話（前書き）

願書もテストも終わりました！！

……少々小説の書きたい気力も落ちちゃいましたが。

それでもあまり日が開かないように頑張ります！！

二十六話

俺が事態を受け入れ、現実世界へと意識を向けたところには全然知らない場所へと居た。

そんな俺の目の前には全体的に白く、周りのどんな家よりも大きい家。

今だに俺を逃げないように抱えている女性はその家へとカツカツ歩いていく。

その入り口へと着くとアンドール孤児院の文字。

(……アンドール?)

孤児院が読めない俺は、アンドールと言う人物が住んでいる家なのだろう、と思っていた。

女性はベルを鳴らさずにカツカツと家の中へと入っていく。

「私は此処までだ」

そう言って女性はある扉の前で俺を下ろす。

「お前はここの中へ入るんだ」

そう告げてカツカツと女性は去って行く。

「……」

声を出そうとして、口が開かない事を思い出した。

(……治らないのかな?)

口を開けようと動かすが、ピタリと動かない。

(……行くしか、ないかな?)

チラリとあの女性が去った同じ方向で俺から数メートル先に逃げないように、なのか大人が一人俺を睨んでいた。

俺はゴクリ、と唾を飲み込み扉へと視線を戻す。

(……多分、逃げたら殺されるかもしれない)

そう考えるとゾワリと鳥肌が立つ。

(手を……縛られ)

スーザー達みたいに――首を飛ばされ、血を流し曝されるなんて……

俺はガタガタと震え出す。

(い……や、だ)

——俺は、まだ死にたくない。

奮える手で、そっと扉に手をかける。

ガチャリと音を立てながら俺は扉を開いた。

「やっと来たか」

扉を開くと真ん丸な頭で目が潰れているんじゃないかと思う程にデップリと太っている男性に黒いフードを被りジュウジュウ音を立てる変な物を持っている性別な人間に青い髪に切れ長の青い目をした男性が立っていた。

「やっと来たんだ。さっさと始めろ」

イライラした口調でデップリが言う。

「あー、はいはい」

それに面倒くさそうに青髪の男性が言い、俺の方へと向かって来た。思わず、一步後ろへ下がろうとして足が動かない事に気づく。

(なんでっ!)

「抵抗されちゃ困るからな」

魔法をかけさせて貰った、と青い髪の男性は言う。

「まあ、これが終われば“此処に来るまで”にかけた魔法は解かれる」

そう言って男性は俺の両腕を後ろへと動かし、抑える。

それを確認してからカッーン、カッーンと嫌な音を立てながら俺の前にフードの人間が立つ。

「さあさあ……いい声で鳴いてくれよ?」

そう言っただけでクルンと器用にジュウジュウ音を立てる何かを回し、ジュウジュウ言い変な模様がある形を俺へと向ける。

バツと、それを持っていない左手を俺の額へと持って行き前髪を上げ上げた。

次の瞬間、ジュウーと額が焼かれる音と共に俺が叫ぶ。

「うゝあゝああああああああああ」

「良い、良いぞ！もつと鳴け、叫べ！」

そう言ってグリグリとそれを額へと押してくる。

俺はあまりの痛さに涙を流しながら叫ぶしかなかった。

「うゝあゝあ……」

ジュウジュウ熱かった原因の物がそつとのかされる。

ドサリ、と手を離され俺は床へと倒れる。

「……貴様は今日から暗殺戦闘奴隷だ」

精々、我々の役に立つようにな、と意識が薄れていくなか俺の頭に響いた。

二十六話（後書き）

「……………ここ？」

パチンと現れた先には一つの家。

「……………多分」

ダンブルドアからの返信に記されていた場所は此処だった。

「……………行こう」

アルの腕を掴み俺は手始めに入り口の扉を蹴り飛ばした。

「……………ゴド？」

サッと顔を青くしたアルが恐る恐る言う。

「これ……………弁償だね？」

「あの爺がするだろう」

俺は扉を気にせず中をズンズン進んでいく。

「ダンブルドアー」

死んでるー？と声をかけながら俺はリビングだろう扉を蹴り飛ばした。

二十七話

パチリと目を覚ますと周りは真っ暗闇だった。

(……………夜?)

どうやら気絶している間に夜になっていたらしい。

(明かりがないなあ…………)

俺は目が暗闇に慣れるまでぼんやりとしていた。

(…………あ、見えてきた)

目が暗闇に慣れてきて少しずつ周りが見えてくる。

(……………何処?)

少なくとも、先程の部屋ではない。

今俺が居る所から左右と後ろは壁になって囲まれており前方は鉄格子。

窓やベットなんて物はなくガランとしている部屋。

ブルリと俺は震える。

「寒い…………」

まだ冬は来ていないというのにこの部屋は妙に冷えていた。

(……………足音?)

カッーン、カッーンと暗闇から足音が響く。

その足音はどんどんと近づいてきて大きな影が俺の前にある鉄格子の前で止まる。

ガチャガチャと音が響いた後にギィィと音を立て、中へと入って来た。

(……………何?)

部屋での出来事といい、今の状況といい、全く何が起こっているのか分からない俺は戸惑いながらズルズルと後ろへ下がる。

「…………起きたのか」

初日から随分優秀な事だ、と低い声が響く。

「だからと言ってお前だけしないわけにはいかないけどな」

そう低い声が告げた後にドンツと俺は腹辺りを蹴られ吹っ飛んでいく。

(つう……)

バンツと音を立て後ろの壁にぶつかる。

「これで終わりじゃないからな？」

声はそう告げ、俺の髪を掴む。

そのままバキィと顔を殴られる。

その後も、腹や腕、足や顔……何処だろうと殴られ続けた。

……どれくらいの時間が経ったのかは分からないが、さほど長くはなかったはずだ。

俺をボコボコにしていた人物は腹を一蹴りした後にギィィと鉄格子を開ける音と共に去って行った。

ズルリと冷たい床に座り込んだ俺だったがすぐさまギィィと鉄格子は開かれ俺は係だろう人間に無理矢理連れ出された。

連れていかれた場所は今いる部屋——ガヤガヤと賑わう沢山の子供達の近くにその場所には似つかわぬ沢山の武器がある部屋だった。

「武器を拾ってガキ共を殺れ」

ボタンと連れて来られた時に使った背後の扉が閉じる音と共に告げられる。

「項目は“適切検査”らしいが……ようは扱い方も知らないお前が人を多く殺せる武器探しだな」

そこら辺にあるのを拾って殺せ、と説明の後に再度告げられる。

(……こ、ろす?)

「おら、さっさと武器を取れっ」

そう言われドンツと背後を押され武器がある場所へと飛んだ。

ガッシャーンと音を立てながら俺は武器に埋もれ視界が暗くなる。

(……………殺す?)

——誰が?

(俺が…………?)

——同い年の子を?

(……………何で?)

——何で殺さなきゃいけない?

《なら、俺を呼べ》

……………誰?

《お前だ》

……………俺?

《ああ。俺はお前。お前の“闇”の部分。お前が俺を呼べば俺は消え、お前となる》

……………消え、る?

《消えるとは言っても、元々……………いや、今もお前だ。少し離されて
いるだけで》

お、れ…………

《ああ、呼べ。俺は…………》

——お前が強く呼び、望めば元に戻る。

ドクン、と心臓が波を打ち俺の耳に響いた。

「へえ……………お前、あの一族なんだな。しかも運よく黒か」

俺が武器の山から立ち上がると微かにそんな声が耳に入る。

俺は特に気にかけず、近場にあった剣と短剣の半ばくらいな長さである双剣を手取る。

(これは……)

思わずニヤリと笑い、子供達の元へと駆け出した。

右手で剣を振るい血に染めながらも、左手に握っている剣についてある鋼糸を引っ張りだし、握る。

そのまま剣を投げ、上手く鋼糸を操り飛び道具の様にビュンビュン飛ばす。

あちらこちらで悲鳴が上がるが少し遠方は左手の剣で、近場は右手の剣で斬って血に染めていく。

暫くすると最初に俺の背後に居たあいつ以外の生きている皆は逃げだせたのか床に転がっている死体に赤黒い血、そして血に塗れた俺が立っていた。

「……双剣か。だがそれでは目立つな」

そう言ってドカドカ歩いていく。

チラリとそいつを見ると金髪に黒い目をし、少し頬が痩せこけてはいたが背の高い男だった。

「これを使え」

ポイッと渡されたのはやけに細い鋼糸。

「これから暗殺出来るし、何より……」

“黒”である今、沢山殺せる方が良いだろう？と気持ち悪い笑顔で男は言う。

それにたいして俺はただ、ニヤリと笑っただけだった。

二十七話（後書き）

「……扉は押して開くものであって決して蹴り飛ばすものではないのお」

優雅に紅茶を飲みながら告げるダンブルドア。

（この魔力……）

……いや、正しくは彼ではないだろう。

「別に良いよ。直すのダンブルドアだから」

「……そしてわしに後始末させる、と。相変わらずじゃの」

俺はアルをグイグイ引っ張りながらテーブルへと近づく。

テーブルへと着くと手を離し勝手に椅子に腰掛ける。

「し、失礼します」

恐る恐るアルはこう言いながら座る。

「うむ、お座り。紅茶やお菓子には遠慮をせずに食べてくれて構わんよ」

「別に畏まらなくてもただの爺だから」

「……君でも彼くらいに対応は出来ぬのかの？」

「出来るよ、それくらい。でもそれを爺にする必要はない」

「年長者は敬うものじゃろう」

「歳の順だと俺やアルがダンブルドアより上だし、例えダンブルドアが俺より上でも俺は年長者を敬ったりはしない」

俺にだって膝を屈する相手はちゃんと決める、と言いながら俺はお菓子へと手を伸ばす。

手を伸ばし、お菓子を取ろうとして止めた。

「……………流石じゃの」

「どうしたの？」

お菓子を取らなかった俺に対しダンブルドアはそう言い、アルはキョトンとしながら言った。

「アル、何にも手をつけるな。……さて、茶番はこのくらいで良いだろう？」

俺はスッと手を引きダンブルドアを見る。

「……何の用だ？ わざわざ手紙にしろ性格にしろ手を込んだ事をしてまで俺を呼んで」

アルは今だに訳が分からないのかキョトンとしている。

こいつはダンブルドアではない。俺の主だった―：

「なあ、魔法大臣殿？」

あの時代の魔法大臣だ。

二十八話

あの日はあの後も視力検査から検査と思えない検査で一日が終わった。

検査の後は地下のあの独房と言える部屋にぶち込まれ、夜には別の女性が回って来てあいつと同じ事をする。

……どうやら時間はバラバラだけれど、これは毎日あるらしい。

そして翌日である今、検査的にも何が大丈夫なのかは分からないが大丈夫だったらしく俺は厨房へと連れて来られた。

「……こいつか？」

目の前には白髪が混じっている老齢に近いだろう男性。

彼は老齢に近いだろうに筋肉はついているし、目はギラリと光っていて正直すぐさま射殺されそうなくらいの眼力だ。

「……こいつに仕込めば良いんだな？」

「はい、よろしくお願いします」

そう言って引率者はパタリと厨房から出て行った。

「さて……」

ギロリ、と俺は鋭い目で見下ろされる。

「上もよくやるな」

ポツリと呟かれた言葉。しかし次の瞬間には先程とは打って変わった。

「お前に料理を教えるように言われた。名前は……チーフだとも呼べ」

お前に名前を教える価値無いからな、と地を這うような低い声で言われる。

「手始めにまずは……ポリッジでも作ってもらうか」

そう告げて俺に鍋を渡して逃げないようになのか扉の前へと立つ。

（……ポリッジ？）

ポリッジって何？

俺は振り返りチーフへと助けを求めるが、チーフは助けるつもりが無いのかただ俺を鋭い目で見るだけ。

俺は手にある鍋へと視線を落とし、それから用意されてある材料へと目を向ける。

スツと手を伸ばし、俺は手についた材料を持ちながら包丁へと手を伸ばした。

適当に切った大きさが疎らな野菜をこれまた適当に煮込んだだけの料理をチーフへと持って行く。

「……これが料理か？」

チーフは一口もつけずにパツと手を離し、料理を落とす。

「作り直しだな」

ガッシャーンと皿が割れる音が響く。

「そうだな……チャレンジは三回だ」

それ以上は、とチーフは続けていく。

「“お仕置き”があるからな」

容赦なんてしない、と告げた後にチーフは俺に向かって手で戻れと仕種をした。

俺はそれに従い、厨房へと戻る。

それから作っては捨てられる、の繰り返しでとうとうチーフが言った三回目。

チーフは何も言わずに厨房へと戻って行った。

（合格なのかな？）

密かに淡い気持ちを抱きながら俺はチーフが戻って来るのを待つ。やがてノソリと厨房から出てきたチーフはジュウジュウ音を立てている鍋を持って出て来た。

(ま、さか……)

それを見た俺は、昨日の事が頭に過ぎる。

同じ様にジュウジュウ音を立てた物を押し付けられた昨日。

熱くて、熱くて頭が割れる様な痛みがあった昨日。

俺の顔は血の気が引いていく。

(昨日と同じ事を……?)

するのだろうか、チーフは。

俺は昨日と同じ事をされたくない思いから手をクロスして頭へと持
って行きガードをする。

けれどチーフのした行動は俺の予想とは違っていた。

ブンツと空気を切る音とともに、お腹へ熱い物を押し付けられる感
覚と鍋の分の重さが直撃する。

チーフは、熱い鍋を俺のお腹目掛けて投げたのだ。

予想外なところに攻撃された俺はペタリと手を床につけて崩れる。

その際に頭から床へとつけた手が鍋を掠っていた。

「う、あ、ああああああああああああああああああああ」

俺は叫びながらも手が焼けるのも構わずに鍋を掴みお腹から床へと
放り投げる。

それからお腹を抱えて丸くなる。

そんな俺に構わずにチーフは歩き鍋を掴む。

それから丸くなった俺の背中向けて熱い鍋を振り下ろす。

何度も熱い鍋を振り下ろされた背中はまだで火の中にいるかのよう
に熱かった。

俺はそれにただ、泣き叫ぶしか出来なかった。

数十分に及んだその行為は次の訓練の為に迎えに来た案内人が来る

まで続いた。

それから俺は引きずられる様に連れて行かれて、来させられた場所には机と本が置いてあった。

ドサリと俺は自分の席だろう場所に放り出される。

「……今からは勉強の時間だ」

案内人が去り、ガタンと教壇に立った女性はそう告げた。

彼女は金髪に緑の目、整った顔で平均的な身長がある女性。

そこら辺の男性からモテていただろう。――胸があれば。

「奴隷の癖にイギリス一、頭が良い私から教えて貰えるのよ？馬鹿だなんて許さない」

ダァンと女性は教卓を叩く。

彼女は性格も悪かった。

「貴方は実験中の暗殺戦闘奴隷らしいわね？先に生物を教える様に指示が来ているわ」

女性はペラリと本をめくる。

「そうね。私の事は――フィルで良いわ」

ああ、先生と敬語は必ずだから、とフィル先生は言う。

「今日は人体について学びましょうか？」

パタンと本を閉じる音が響く。

「――：実体験でね」

そう言っただけでフィル先生は消えた。

俺が消えたフィル先生に気づいたのは自分の首が絞められた時だった。

「分からなかったでしょう？」

ニヤリとフィル先生は笑う。

「人間には死角があるの。それを庇う様に左右の目が働いているのだけれどそれでも限界がある」

そこから近づけば誰でも近づける、とギリイと力を入れながら言うフィル先生。

俺は苦しくなってきた、先生の腕を掻きむしる。

「苦しい？これも人を殺す一つの方法ね。まあ……跡が残るからオススメはしないけれど」

スツとフィル先生は手の力を抜く。

俺はその隙にフィル先生の手を払い、俺の首から離す。

「さて……授業の続きをしましょうか？」

そう言いながらフィル先生は教壇へと戻って行く。

「底辺にいる貴方でも分かりやすく教えてあげるわ」

ニヤリと怪しく笑いながら告げるフィル先生。

俺の地獄へのカウントダウンはすでに始まっていた。

二十八話（後書き）

「……良く分かったな？」

バサリと音を立て、目の前にいたのは苛立つ老人ではなく俺の主だった人物――魔法大臣だった。

「今日は無理矢理にでも俺の元で働いて貰おうかと呼んだんだが……」

魔法大臣はチラリとアルを見る。

俺の過去を少し知っているアルは老人があゝ魔法大臣だと分かり戸惑ってはいるが、手には俺が渡した緊急時用の防災グッズを握っていた。

「どうやら無理矢理だとそれを使われそうだな」

ギュッとアルは手をグッズと共に握る。

「……ゴドが危ないなら、遠慮なく使う」

アルが握っているグッズは使用すると大声で叫び回り、叫び終わった後は大量の煙りとなって俺達の身を守る、と言う代物。

俺が作った物だから何処までそうなるかは分からないが、少なくとも魔法大臣はこの効果を知らない。

チラチラとアルの握っている物を警戒する魔法大臣。

俺はニヤリと笑う。

「アル、使え」

アルは疑いもせず^に頷き、それを床に叩きつけた。

二十九話（前書き）

……今気づきましたが前話の後書きに出てた魔法大臣。

彼、この話しから出てましたね。

下書き感覚で書いていたのでウツカリしていました。

少々ネタばれにはなってしまう申し訳ございません。

二十九話

俺が此処に来てから随分多くの年月を過ごした。

殴られ、蹴られ、斬られたり、毒を盛られたり――これら以外にも多くの暗殺と戦闘、奴隷に関する訓練をした。

それは人体に関する事だったり、毒草の種類、料理に掃除――色々な事を実践で学んだ。

そんな事をしていたのだから此処に来る前の自分と比べると俺は確実に成長していた。力もついたし、一人で生きていける知識も頭に入っている。

けれど、得る物があれば失う物もあって、俺は人間に必要な“心”が欠落していった。

「おい、01出ろ」

ギィィと鉄格子が開き案内人が現れる。

俺は黙って立ち上がり、案内人に続いて此処を出る。

先程呼ばれた01とは此処に来て数年後から呼ばれる様になった俺の名だ。

此処へ来た当初は実験中の暗殺戦闘奴隷へ振り分けられたのは俺一人だけだった。

それから数ヶ月経つとポツリポツリと暗殺戦闘奴隷へ子供が振り分けられるようになり、人数がそこそこ増えて来たので此処に振り分けられた順番に番号を与え管理しやすい様にされたのが始まり。

――最も、訓練が厳しすぎて現在生き残っているのは俺一人だけ。

「今日から01、お前は主付き“奴隷”となる」

カツカツと歩きながら移動中に初めて口を開いた案内人。

「よって、お前にも渡さなければならぬ物がある」

そう言ってこちらを見ずにポイツと珍しく鞘付きの短刀が渡される。

（……これは？）

俺は渡された短刀を見ながら首を傾げる。

（俺の暗器は鋼糸って決まっているんだけど……）

それに鞘なんてついていたらいくら短刀でも抜く時間もあるし、暗殺には向かないはずだ。

ただでさえ、一番得意な剣や双剣も武器には大きく暗殺にならないから、と鋼糸へと暗器を変えさせられたのに。

（なら、何故？）

「そいつは暗殺用ではない」

その言葉に俺は短刀から案内人へと顔を向ける。

「そいつは小鬼に作らせてある、切れ味抜群の短刀だ。そしてそいつを使う時は奴隷が自殺する時のみ」

何時からか分からないが主付きになったらそいつを渡す事になっている、と案内人は告げる。

それを最後に案内人は話さなくなり、やがて主がいるだろう部屋の前までやってきた。

「……精々我々の役に立つ様に」

そう言って案内人は去って行く。

俺は今だ持っていた短刀をそっと隠し目の前にある扉へと手をかける。

ギィイと音を立て扉が開いた先には一人の男性。

彼は長い金髪なのに揉み上げは黒い髪という個性的な髪型に碧色の目をしていた。

「やつと来たか」

スツと碧色な目を細めながら彼は言う。

「今日から01、お前は俺の奴隷だ」

ニヤリと頬を上げながら彼は言う。

「底辺にいるお前が魔法大臣である俺の奴隷になれるんだ。失敗は許さない」

（……魔法、大臣？）

魔法大臣って確か偉い人、だったよな？

（そんな人の、奴隷？）

俺はそこら辺に住んでいる人間の奴隷になるのだと、ずっと思っていた。

「早速だが、お前にやってもらおう事がある」
カツンと魔法大臣は机を軽く叩いた。

「今日の真夜中、首都ロンドン近くに住むグリースター家を“消して”こい」

そう告げる彼……いや、主の顔は真剣だった。

「分かり……ました」

俺は膝をおり、了承の意を表した。

「……………行け」

それは出て行け、と言う意味なんだろう。

そう受けとった俺はスツと立ち上がる。

「失礼しました」

俺は頭を下げこう告げてからパタンと扉を閉める。

（真夜中、か）

多分暗殺が終わった後に報告をしに行かなければならないだろう。

それまでにはロンドンに向かいまた外で仮眠出来るような場所を探しておかなければならない。

（此処からロンドンか）

主みたいな魔法使いならばすぐさまロンドンに行けるのだろうか、魔法使いではない俺は歩かなければいけない。

（此処から半日少しはかかるから……）

今すぐこの地を立たないと間に合わないだろう。

俺は数年いた馴染みあるこの孤児院の地下ではなく、孤児院の外へと足を向けた。

二十九話（後書き）

ボフンとアルが叩きつけて床に接した瞬間大量の煙りと同時に大声の叫び声が響く。

（今だ！！）

俺はアルを引っ張りすぐさま“姿くらまし”を行いこの場を離れる。
その際にグエと苦しそうな声は聞かなかった事にしよう。

「……此処は？」

パチンと現れた先は鬱蒼とした森。

「禁じられた森」

キヨロキヨロと辺りを見回しているアルに俺はそう答える。

「禁じられた森？そこって……ホグワーツ敷地内の森だね？」

何でこんな所に！？とアルはオーバーリアクションをしながら聞いてくる。

「……咄嗟に思いついたのが此処だったから」

「……………」

ジーと白い目でアルは俺を見てくる。

「……アル、戻るよ」

その地味な攻撃に堪えられず俺はアルを引き寄せていつもいるあの場所へと“姿くらまし”をした。

三十話

パチパチと上がる炎の前で俺は空を仰ぐ。

夜空は三日月がボンヤリと真っ暗闇の中に浮かんでいた。

（曇りか……）

いつもは見える星が見えない。

カンカンカンと異常を知らせる警報が暗い辺りに鳴り響く。

（……これで、いい）

俺はそっと、闇に紛れた。

「……以上です」

膝を付き礼をしながらも俺は先程始末してきた報告を主へと告げる。

「……………そうか」

そう主は言い、ペラリと机に置いてある紙を一枚取り出す。

「お前に、護衛任務だ」

その言葉に俺はキョトンとする。

（護衛……任務？）

意味が、分らない。俺には主がついた。それは即ち主の命令以外は聞けない事になる。

（そんな任務は施設に行くはずなんだけど……）

表向きは孤児院だが、奴隷育成をしている施設。

俺が入っていた所以外にもそれは沢山あって、時々奴隷育成の為に護衛とか物探しとかの依頼を育成中の奴隷にさせる。

俺もしたことがあるし、奴隷である子供は一度でもしているはずだ。「今回は季節折にあるパーティーだ。いつもなら施設の奴隷に行か

せるが……これはそうもいかない」

そう言って主は俺を見下ろす。

「このパーティーにはハッフルパフにレイブンクロー、スリザリン……あの三家が来る。表面上、我々より地位のある彼らをパーティーがある最中に何かあつてはいけない」

だから俺はこれを施設に送らなかつた、と主は言う。

「これをお前に任せる。……パーティーを失敗させるなよ。そうなればドラゴンの巢やら南極やらに“吊す”からな」

そう告げて主は出て行け、と仕種をして俺を追い払う。

俺は表面上何ともないように取り繕い、部屋から出て行こうとした。

「ああ、パーティーは三日後。この魔法省の広間で行う」

思い出したように主は告げる。

「……分かりました」

俺はそう告げ、頭を下げてから部屋を退出する。

人の気が一つもない廊下をズンズン歩いて俺は魔法省を出る。

外に出た瞬間、俺はペタリと地面に座り込む。

「護衛……任務か」

まさか、暗殺の次に護衛が来るとは思わなかった。

だが……護衛とは言っても堂々と人前に立ったりする奴ではないだろう。

本職が暗殺の俺を護衛に回す……それは人前に見つからない様に護衛をし、かつ敵を殺せて事かな？

（……そこまで分かっているなら襲われる前に暗殺すれば良いのに）

多分、主は敵が誰だかまで知っているに違いない。

魔法大臣なんだし。

（とりあえず、三日）

その間何も命令が無ければ暇になる。

（暗器調整にでも狩るかなー…）

久々に獣でも狩って捌いて……焼く。

（後は、会場の下見かな）

退路や秘密通路を確認しておかないと。

「ーい、おい！」

ビクリとその大声で俺は意識を戻す。

「大丈夫か？」

心配そうに俺を覗く少し癖のある黒髪で黒目の男性。

「あ……大丈夫、です」

「本当か？」

そう言いながら男性は俺の額を触ろうと手を伸ばして来た。

ー…奴隷の烙印を見られれば、きっと殴られる。

俺はパシリと男性の手を払う。

今、此処で殴られれば任務に支障が出るかもしれない。

それだけは避けたかった。

「……………」

男性は驚いたように俺を見たが、触ろうとはしなかった。

「わりい、なんか嫌だったみたいだな」

そう告げてニツカリと何か隠しているように笑う。

「少し尋ねたいんだがー…」

言いにくそうに男性はキョロキョロ暗闇に目線を動かしながら問う。

「此処は何処だ？」

……此処、ロンドンと言ったら誰でも知っている。

知らぬままに来るのは孤児の子供くらいで大人が問うなんてー…余所の国の者としか考えられない。

「……ロンドン」

俺は男性に警戒しながらも答える。

「ロンドンか……そこまで来たのか」

男性はそう言って東の空を見上げる。

ジー…と警戒しながら見つめている俺に気づいたのか男性は慌てて告げる。

「いや、俺は余所の国じゃないんだ。少し追いかけてっことをしていてね」

それでも、俺の警戒は揺らがない。

そんな事を言いながらも情報を盗みに来た奴らを今まで見たことがあるから。

「晴れないみたいだね。――俺の名前はイグノタス。イグノタス・ペベレルだ」

ペベレル家を調べると良い、昔からイギリスにいるから、と男性――イグノタスは言う。

「兄貴達は少し連絡が取れないけれど――記録があるはずだ」
そう言ってイグノタスは立ち上がる。

「しばらくは此処、ロンドンにいる。その後は分からないが――また、会えたら良いな」

そう言ってイグノタスはマントを被る。

するとイグノタスは消えた。――否、見えなくなったのだ。

彼の魔力は依然、彼が居た場所から感じる。

だが、しばらくすると音も立てずに彼はこの場から去って行った。

(……見えなかった)

魔力を感知出来たからこそ、分かったが視界では最後までマントを被った彼を見ることは出来なかった。

(心配も、音も消している)

――一体、彼は何者だろうか？

(調べてみるか)

最も、それが出来るのは護衛任務が終わってからだろうけど。

冷たい風が吹き始める中、俺はイグノタスが去って言った方向を見ながら立ち上がる。

「ペベレル家、か」

俺はポツリと呟き、イグノタスとは逆の方向へと足を踏み出した。

三十話（後書き）

パチン、と音を出しながら俺は“姿現し”をする。

「き、気持ち悪い……」

禁じられた森では普通だったから激しい揺れとかには平気な体質か
と思っただけ……

どうやら違ったらしい。

「アル、ソファで横に寝ておいて」

何か作ってくるから、と俺はアルに告げる。

「んー……うえ」

アルは短く返事をし、フラフラとソファへと向かって行く。

（姿現しに酔ったなら寝かせておくのが一番だしな）

飲み物は……ホットミルクくらいで良いかな？

グテェと倒れるアルを見届けてから俺は厨房へと入る。

（ミルクは確か……あ、あった）

カタンとミルクを取り出し鍋に注ぐ。

ミルクを注いだ鍋は魔法を使って出した火の上へと置く。

プツプツとミルクが沸騰するのにあまり時間はかからず俺は杖無し
の無言術と言う荒業で火を消した。

「コップに注いだら……持っていくだけか」

ホコホコ湯気を立てながらまだまだ熱いだろうホットミルクを持っ
てアルのいるソファーへと向かう。

「アルー、出来た……あー、寝ちゃったか」

ひょっこりとソファーを覗くと顔が青いアルが眠っていた。

俺は魔法にてパツと引き寄せた毛布をアルにかける。

（無茶、させたかな？）

アルから魔力がしない訳ではない。

ただ、無意識に押さえているのか魔法使いとは感じ方が違う。これ
は魔法を使った事のない魔法使いと同じ感じ方だ。

……つまり彼は一度も魔法を使った事がない。

多分、彼は今もずっとマグルだと思っているはずだ。

「なのいきなり姿現しや姿くらましだもんな」

やっぱ、無茶だったかな、と俺は苦笑しながら言う。

「でも……いつまでもマグルではいられない」

自分でコントロール出来ないと“酷い事”になってしまう。

「そろそろ……本格的に教えないとダメかな？」

でも、その前にアルに魔法使いだと告げないとね。

アルに渡すはずだったホットミルクを飲みながら俺は今後の予定（勉強）を頭の中で作っていった。

三十一話

ガヤガヤと煩い会場。

あら、お元気？ええ、そちらこそお元気かしら？オホホホみたいな会話からどうしてあんなに騒げるのだろう？

（……それなりの人数がいるからか）

今日はかなりの人数――ざっと二、三百人は来ている。

この中から、見たこともない三家を護らなければならない。

（敵が何処から来るか、だよな）

それによって避難させる通路も変えなければいけない。

（……慣れている魔法省だけれど念には念を入れて隠し通路とかは確認した）

後は……やっぱり三家を見つけないといけないか。

チヨロチヨロと、人目に着かない様に薄暗い場所で会場の近くを三家を探すためにうろついていた時だった。

「……なんだ、この餓鬼」

ヒョイと襟首を取られ、持ち上げられる。

「っ……………」

（う…………そ……）

会場に近いけれど薄暗いから気配は出していた。敵に分かるように。（でも、足音は消していたのに……）

確実に出していたのは気配だけで、俺の存在感は出しても場所が分からないように足音を消した。

「……何で餓鬼が此処にいる？」

ギロリ、と紅い目が俺に向けられる。

（う…………わっ…………）

黒い……魔力を纏いながらも女？と間違えるくらいに見事に顔が整い体が細い、男。

流石に筋肉の作りが違うのが唯一の見分け方だった。

「ス、スリザリン様！」

ガヤガヤと煩い中、俺の主が声を張りながらこちらへ駆けて来る。

(この人がスリザリン……)

「そいつは奴隷です。スリザリン様のお手が汚れますゆえ、お離し下さい」

チラリと汚い物を見るかのように横目で俺を見る主。

「奴隷、か……」

今だ俺を睨みつけながら呟く、スリザリン。

「はい」

早く離せ、と言わんばかりの笑顔で主は答える。

「なら、俺が一時期貰ってもいいな」

「……………はい？」

ピシリと張り付けた主の笑顔が凍るがスリザリンは気にせず俺を掴んだまま、立ち去った。

スリザリン……様はどんどん会場から離れて行き、暗闇へと歩いていく。

「あ、スリザリン殿」

こっち、空いていますよ、とヘラヘラ笑いながら薄い水色に藍色の瞳をした男性が現れた。

「……いや、彼が現れたと言うよりスリザリンが彼等の場所へと来たと云うのが正しいのかもしれない。

——不釣り合いな俺を掴んだまま。

「?……………その子供は？」

キョトン、と彼は首を傾げる。

「……………奴隷だそうだ」

スリザリン様がそう告げると彼はジッと俺を見つめる。

「へ……え……奴隷、ねえ」

あいつらも落ちちゃたかな？と言いながらも彼はポンツと俺の頭へ手を乗せる。

「僕はラステル。ラステル・ハッフルパフだよ」

その名前に俺は固まる。

（ハッフルパフ！？）

こう、ヘラヘラしていて軟弱そうな彼がハッフルパフ……

（でも、ハッフルパフならば俺は護衛をしなければならない……よな？）

運が良い事に彼等が一緒にいる。

バラバラで居られるよりかは護りやすい。

「ハッフルパフ家はお前か。……レイブンクロー家は誰が来た？」

ヘラヘラと俺へ笑いかけているハッフルパフ様へとスリザリン様は問う。

「この面子なら分かるでしょ？」

僕に君なんだならレイブンクローもあいつでしょ、とハッフルパフ様は俺から目を離しスリザリン様へと目を向ける。

「……あいつか」

「……たまには華が欲しいよねー」

「なら、お前達のどちらかが変われば良かっただろう？」

スツと暗闇からボサボサの金髪に薄い緑色の目の男性が現れる。

男性はハアとため息をつきながら言う。

「どうせ押し付けられたんだろう？」

「「……………」」

なら、諦めろ、と沈黙を肯定と受け取った男性は言う。

「さて……スリザリンはこの子供をどうしたかったんだ？」

離してやれ、と言いながらもチラリとレイブンクロー様の薄い緑色の目が俺を見る。

（レイブンクロー、か……）

レイブンクローの言葉を聞いたスリザリン桜は離されても地面に激突しない距離でいきなりパツとスリザリン様は俺を離す。

「……特にない」

「「……………え？」」

俺が着地し、立ち上がると同時に二人の間抜けな声が重なる。

「……………あいつと一緒にいるよりかはマシだろう？」

ボソリと告げたスリザリン様。

俺にはあいつが誰だか分からなかったが二人には分かったのだろう。あー、とか声を上げながら二人は首を縦に振る。

「確かに……………あいつというよりかはマシだねー」

「となれば、少々時間をかけた方が良いだろうな」

ブンブン首を縦に振振りながら言うハッフルパフ様に続きレイブンクロー様がニヤリと嬉しそうに……………いや、怪しげに笑いながら言った。

「……………そうだな」

怪しげに笑うレイブンクロー様を見て、同意はしているものの口元は激しく引き攣っているスリザリン様。

「じゃあ、僕からね！！」

身を乗り出しながら元気良く言うハッフルパフ様。

「最近さ、ヘルガが特に可愛いの！！いや、勿論ヘルガ以外の子も可愛いんだけどさ。あ、ヘルガは調度君と同じ歳くらいの娘ね。そのヘルガがな、最近よく二階へと上がる様になったんだ。それで二階へ上がるには階段があるだろう？いつもは上手く上り下りするんだけど昨日は下りの時に一段踏み外したみたいでゴロゴロ転がって落ちたんだ。それで僕は心配してすぐさま駆け付けたんだけど、その時に涙目になりながら見上げたあのヘルガの顔！！すっごつつつく可愛いんだよ！！他にもさー」

……………レイブンクロー様や時々スリザリン様も交えたハッフルパフ様の三人の親馬鹿自慢話しは日付が変わっても終わらずに、俺が解放されたのは日が昇り辺りが明るくなってからだった。

三十一話（後書き）

「アル、良く聞いて？」

帰ってきた翌日の昼。

何故昼かと言うとアルが大爆睡で先程やっと起きたからだ。

「ん？何？」

モグモグと昼食兼朝食を食べながらアルは答える。

「アル、君は魔法使いだ」

「……………冗談にはおもふうよくないほ？」

「……………昼食をまず飲み込もうか」

ムギyumギユ、ゴクンと飲み込んだアルは再度言う。

「……………冗談にしては面白くないよ？」

「冗談ではない。アルには魔力がある。ただ、無意識に押さえているのか使われた事が無いだけだ」

「……………本当に？」

アルは信じられないように言う。

「うん」

俺はそれに即答し、話し始める。

「だから魔法を教える、と言いたいけれど魔力がないから教えられないのは知識だけ。……それでも、する？」

「……うん。いや、はい！やります！」

その言葉に俺はニヤリと笑う。

「じゃ、今日から一時間から三時間くらい。毎日ね」

「うん!!」

アルはこれでもかと嬉しそうな顔で頷いた。

三十二話

散々三人……特にハツフルパフ様の自慢話を聞いた後に解放された俺はフラフラと主が居るだろう魔法大臣室へと入る。

「失礼、します……」

コンコンとノックをし、こう告げてから俺は扉を開く。

ガチャリと扉を開いた瞬間にダンツとその場に相応しくない音が響く。

（……………え？）

ズキリと鈍い痛みと共に、右頬からヌルリと何が流れ伝う感覚がする。

グイと右手で痛む右頬を拭い、見てみると右手には血。

（……………まさか）

俺は首を少し後ろへ捻り壁を見てみると壁には突き刺さっている短剣。

先程の音は多分、短剣が壁に突き刺さる音だったのだ。

俺はユックリと顔を戻し、短剣を投げた本人だろう主を見る。

「……随分と遅い帰還だな？ さぞやあの三家と仲良くなったのだろうか？」

ピキリと顔に青筋が入りながら低い声で告げる主。

「見つかりやがって。何の為に前にお前にさせたと思っている？」

その言葉に俺は俯く。

敵襲は無かったものの、隠密にと考えていた主の意思を実行出来なかった。

暗殺には致命的になる“人に見つかる”という事をして。

「それなりの処罰は考えてある」

カツン、カツンと足音が部屋に響く。

足音が止まったと共にガシツと頭を捕まれた。

主に捕まれたまま、パチンと言う音と共に部屋の景色が遠ざかった。

パチンと次に見えた景色は火山だった。

「……………え？」

（先程まで部屋に居たよね……………？）

ポカンと口を開けながら周りを見渡す。

辺りは岩だらけで凄く熱い。

「此処は巨大で凶暴な火トカゲがいる所で有名な通称ファイヤー・デッドだ」

主はそう言っただけで俺を離す。

「レビコーパス」

主は俺に木の棒を向け、そう言った。

次の瞬間、俺は見えないものに足を取られ逆さまになりながら宙へぶら下がる。

「……………このくらいか」

主は杖を振りスゥと少し高度を下げた。

「今日から三日、宙吊りだ」

逆さまになった主が口を開き話す。

「迎えは三日後だ」

ザクツと音を立て主はグルグルと回り、消えた。

ジワジワと蒸し暑い中逆さまの宙吊り。

（……………あ、っ）

ダラダラと出てくる汗は逆さまなので自然と顔まで垂れ、額からポタポタと地面へ流れ落ちる。

もう、何時間経ったのだろうか？

吊された当時は血が逆流しているのか頭が痛く、そして気持ち悪かった。

今では頭が痛いや気持ち悪いを通り越し何も考えられない。

そんなボンヤリとした頭で逆さまになった景色に見慣れない生き物がノソリと現れてきた。

その生き物は全長1メートルはとうに越えているだろう大きさだったが姿形はどことなくトカゲとソックリだった。

ただ、トカゲとは違い背中には鋭い刺があったし、尻尾にもそれはついていた。

足には太く鋭い爪に口には鋭く尖った牙。オマケにボウと小さくだが火を吐いている。

そいつはノシリ、ノシリとユックリ歩いていたのだが俺の近くで足を止め見上げて来た。

黄色の目がギロリと俺を捉える。

……そいつが何を思ったのかは分からない。ただ、食料を見つけたとも思ったのか俺を見上げ離れなかった。

(……………ああ)

このまま、焼かれるのかもしれない。

あいつは先程見た時以外、火を吐いていないのに漠然と俺はそう思った。

(もし、そうなった……ら……)

動けない俺は焼かれるしかないだろうな、と俺はボンヤリとしながらそう思った。

しかし俺が思っていた様にはならず暫くは膠着状態が続いた。

膠着状態が破れたのは日が傾き、もうそろそろ沈むんじゃないかと思う程のギリギリな夕方。

俺が食われた訳ではない。焼かれた訳でもない。あいつが動いた訳

でもない。

なら、何故膠着状態が破れたのか。

それは……増えたのだ。

あいつと同じ生物だろう奴らが今ではウヨウヨ沢山集まり、揃いも揃ってギロリと全員俺を見上げている。

奴らは俺を襲う気配も、焼く気配も見えない。

ただ何故か見上げている。

そして……また膠着状態へと入っていった。

それから奴らは微動だにせず見上げ続け、俺はそれに汗を垂らしながらも三日間吊される事となった。

三十二話（後書き）

「ゴドー！」

俺が羊皮紙に羽根ペンにインクに教材にと用意をしている最中にアルが話し掛けてきた。

「んー？」

俺は準備をしながら返事をする。

「この、出てきた生き物は何？」

アルはペラリと紙を見せて指を置く。

「あー……そいつは火トカゲだ。火トカゲは――」

ふっと思ひ浮かんだ考え。

（……どうせならこいつを授業にするか？）

アルが興味あるみたいだし、どうせアルだから興味がある物から始めても良いだろう。

「ゴド？」

急に口を紡いだ俺にアルは声をかける。

「授業で教えるよ。後少しで準備が終わるから待っててくれる？」

「はい」

アルは返事をした後に本へと視線を落とした。

俺はそれを見た後に教材へと手を伸ばした。

三十三話

三日間、吊された俺はフラフラで下ろされた。

その日は意識がボンヤリとしていて記憶があまり無い。

だから何をしたのか分からない。

……下手な事をしていないといいけど。

「……大丈夫でしょうか？」

甲高い声でひょっこりとクリクリした大きなブルー色の目が目の前に現れる。

「……はい、お気遣い構いなく」

彼はルルーシク様。

この魔法省へと雇われている屋敷しもべ妖精と言われる種族の者だ。その雇われている屋敷しもべ妖精の中でも彼は総大将みたいな偉い地位にいるお偉い様。

……最も俺ら奴隷にとっては、だけれども。

「そう、でしたか」

ルルーシク様は少し顔を歪ませたが何も言わずに隣に戻りトントン材料を切っていく。

（だから……あまり好きじゃない）

今日は夕食を手伝うように、と言われ彼らと一緒に厨房に居るが俺はあまり彼らを好きじゃない。

……彼らは俺らを自分達より下である奴隷として見ない。

そして、自分より下が居ないかの様に俺達奴隷にも“人間”として扱う。

（敬語なんて、慣れないし……）

何より奴隷を認めていないと言うのは奴隷である俺達を認めていないと感じてしまう。

……奴隷である俺達なんてこの世に居ないんだと、錯覚してしまうのだ。

「……気楽に、作って下さい」
失敗しても我々がいますから！とルルーシク様は明るく言う。
それに対して俺は頭を下げ、分かりましたと告げる。
顔を上げ、調理に戻る際チラリとルルーシク様が悲しそうに顔を歪めていたのが見えたが俺は見なかった事にした。

量が多いからか数時間かかってしまったが後少して料理が完成する、
という段階に来ていた。

いきなりドゴンツと爆発するような、また何か殴られて壁に叩きつけられた様な感じの音が響く。

「……何があったんですか!？」

いち早く隣にいたルルーシク様がこう叫びながら現場へと走って行く。

俺はまず先に料理を落ちない、そして何か投げられて来ても大丈夫に作られた棚に入れ現場へと向かう。

「お、落ち着いて下さいっ!」

大声で焦った様なルルーシク様の声が響く。

(……ああ、あの人か)

現場へと着いた俺の目の前に広がる光景。

それはワタワタ焦るルルーシク様に数人の屋敷しもべ妖精が沈没した中に立っている女性。

「ふんっ、お前か」

この人は確か呪文に関する部署……新しい呪文を作ったり取り込んだり広めたりだったっけ? そのお偉い様だ。

「相変わらず、穢わらしい」

フンツと鼻を鳴らしながらも見下した目で彼女は言う。

……彼女は俺達奴隷は元より屋敷しもべ妖精をかなり嫌っている。きっと今回もストレス解消を伴った暴挙に出たのだろう。

ドンツと音が聞こえそうなくらいに彼女は屋敷しもべ妖精の腹を力いっぱい蹴る。

「あ、の……悪いのですがどうか……落ち着いてください!!」

ピョコピョコとジャンプをしながらルルーシク様は彼女を止めようと必死に言葉を紡ぐ。

「……貴様にも見飽きたな」

スウと細められた目は妙な雰囲気さをさらけ出していた。

(……………このままじゃ)

ルルーシク様が殺られるだろう。

そう思う程、彼女の雰囲気は危ない。

ルルーシク様が殺られる前に俺はスツと彼女の元へと進み出る。

……身分が強い現代、俺からしたらお偉い様を殺される訳にはいかない

「失礼します」

すつと膝を床につけ頭を下げる。

「ルルーシク様は俺より上のお方……」

「楽しむならお前、か？ 薄汚い奴隷」

「……………」

ギスギスと刺さるような視線に俺は手を握る。

「私なら何をして構いません!! ですから私を……」

ルルーシク様がピョンと跳ねながら話していたがそれは最後まで続かなかった。

何故なら彼女がルルーシク様を蹴り飛ばし壁へとぶつけたから。

「貴様よりは楽しめるだろう」

ニヤリと笑いながら彼女は言う。

「なあ？ 血まみれの奴隷？」

ついて来い、と言い彼女は去っていく。

(……………とりあえず急所は庇おう)

彼女が何をするかは分からないが主みたいに吊しではなくで今までも殴るだけの暴力だったから多分、殴られたり蹴られたりするだけだろう。

「……い、けませ……ん」

小さく聞こえたルルーシク様の声。

俺は振り返りルルーシク様を見るが彼はグダりと倒れている。……起き上がる気力がないのだろう。

「……………後は、頼みました」

俺はルルーシク様に向けて言った後に背中を向ける。

そして振り返らずに彼女を追うために駆け出した。

三十三話（後書き）

「さて……授業を始めようか」

「はい！」

早く、と言わんばかりにアルは体を揺らす。

（……そんなに揺らさなくても）

授業は逃げないよ？

「……今日は前回アルが気になっていた火とかげについてだ」

「火とかげは大概火の中にいる。例えば……暖炉の中とかだね。現在の火とかげは先程言ったように暖炉の中に居るくらい小さい物しかない。だが、前回読んでいたから知っているだろうけど俺の生きていた時代は普通に大きい火とかげはいた。それこそ横たわった大木と同じくらいはあったんじゃないかな？」

「あ、そうだ。勘違いしないように告げるけど火とかげは炎を吐かないから。俺が子供の頃に吐かれた炎はただ単に火から出てきた火とかげの口に残っていた残り火だよ。だからあの火とかげは一度しか火を吐かなかった」

知識が無かったあの頃は本当に恐怖だったけれどね、と俺は話す。

「ゴド！」

ビシッと手を真っ直ぐに天井へと挙げる。

……うん、生徒に見習わせたいな。

「火とかげって何にも使われないの？」

ドラゴンとか色々使われているんだよね？とアルは言う。

……何処で知ったんだろう？

（俺の書物かな？）

そう思いながらも俺は口を開く。

「現在は魔法薬に使われるか暖炉に入れるかしかないな。昔は大きかったから皮を剥いで手袋や鞆や色々作れたし、魔法薬にも使われてた」

肉だって食べられてたな、と俺は告げる。

「……食べてたの？」

アルは恐る恐る聞く。

「普通に食べてたよ？」

食べ物だって今みたいに豊富では無かったしな。

「飼育は……まあとりあえず火の中に入れとけば死なない」

時折何かを放れば生き延びるよ、と俺は言う。

「……随分、適当なんだね」

「そんなものだよ」

目も向けてない、と言うのもあるけど生物なんて未知なるもんだから、と俺は言う。

「それに全てを知ったらつまらないだろう？」

ニヤリと笑いながら俺はアルに言う。

「……そうだね！」

アルもニヤリと笑いながら告げ、羽根ペンを持ち羊皮紙へと走らせた。

三十四話

「ぐっう……」

ギリギリと食い込む手を俺は引っ掻く。

「奴隷のくせに、よくも俺にぶつかったな！」

俺の首を絞めている本人は鬼の形相で俺を睨みつける。

こうなったのはただ単に俺の不注意。

ルルーシク様から頼まれた材料を何度となく頭の中で繰り返し、前方への注意が切れていて男性とぶつかった。

男性も初めはすぐに謝った俺に気にしていないよ、と言っていたのだが俺が奴隷と分かると態度は一辺、180度変わった。

穏やかそうに笑っていた顔から眉をこれでもかと吊り上げ顔を真っ赤にし怒鳴り始めた。

最終的には先程の状態……窒息死しそうなくらいキツク首を絞め始めたのだ。

始めこそは抵抗して良いのかな？とか考えていたけれど現在はただ、空気を求めて男性の手を引っ掻き続けている。

「そろそろ死ぬか？」

呻きながらも男性の手を引っ掻く力が弱まっていった俺に対し男性はニヤリと笑いながら言った。

（も、う………）

頭はボンヤリとしはじめ俺は内心死ぬのか、と思った瞬間だった。

ザシュと音が響いたかと思うとボトリと俺の首を絞めていた手が落ちた。

「ゲホッ……」

涙目になりつつもスウと空気を沢山すいながら俺は男性を見る。

男性は肘あたりをもう片方の手で覆い隠しながら叫んでいた。

スツと地面を見れば肘辺りから先程首を絞めていた指先までが落ちている。

（ああ……成る程）

誰かは分からないが俺の首を絞めていた腕の肘から下を切ったのだ。

「子供を叱るにしてはやり過ぎでは？」

バサツと放ったマントから男性……ペベレルが現れた。
どうやらまた姿を消し、気配を殺していたようだ。

「っ……そいつは、奴隷だ。しかも……暗殺戦闘、だ」

男性は苦しそうに、しかし勝ち誇ったように告げる。

――まるで自分のしている行動が正しいかのように。

「だから？」

周りは男性の言葉に当たり前だ、と言わんばかりの視線を寄越したにも関わらずペベレルだけは違った。

「奴隷だからどうした？ 奴隷とはただ親がいない子供を我々がそう位置付けただけだ」

貴様はその子供を殺そうとしたんだが？ とペベレルは汚物を見るかのような目で男性を見る。

「そいつはっ……子供ではなく奴隷だ」

「奴隷ではなく子供だろう」

意見が違ふ二人は睨み合う。

「……貴様と話す時間はどうやら勿体ないみたいだな」

暫く睨み合っていたペベレルはこう言った。

「行こう」

そう言っただけ俺の手を掴みその場から離れていく。

手を繋がれた俺はされるがままにペベレルについて行くしかなかった。

「このあたりなら大丈夫かな」

そう告げてペベレルは手を離す。

「また会ったね」

俺と向かい合いながらペベレルは言う。

「……まだ居たのか」

俺はてっきりもう去っていると思っていたんだけど。

そう思いつつも言うどペベレルは笑った。

「今日去ろうと思っていたんだよ。でも外に向かって歩いてると君が居てね」

あのままじゃ死にそうだったから助けてあげた、とペベレルは言う。

「この前のお礼にね」

ほら、此処が何処だか教えてくれたでしょ？とペベレルは言う。

「別にいらない」

奴隷にとっては人助けは当たり前だし。

フィと俺はペベレルから視線を外す。

「……早く行った方が良い」

奴隷を助けたとなると外聞が悪くなる。

例えば宿泊出来なくなったり、商品を販売されなくなったり、場合によってはその土地のお偉い様から呼び出され殺されたり。

だから広まる前に此処を去った方がペベレルにとっては良い。

「……そうだね」

そう言いながら寂しそうにペベレルは笑う。

「また……また会えたら今度は何か頼み事をして良いかな？」
縋るような目で俺にそう問う。

「……その時によるな」

どうしてそんな目をしているかは分からない。

ただ、こいつが子供……それも奴隷に縋る程追い詰められている事だけは何となく分かった。

「生きてなければ願いも何もない」

そう、俺は告げた。

奴隷に縋る男性に。

「……それは君も同じだよ。必ず願うから生きててよ」

スツと、目に意志が灯った目でペベレルは俺に言う。

それを俺は何も表情を変えずに見る。

「……じゃあね」

バサツとマントを被り気配を消したペベレルを俺は見送る。

（……変な奴）

俺を子供と見、縋る男性。

おかげで普段の対応をせずに少し、数年振りの素が出てしまった。

（でも……初めもあんなだったからね）

別に良いだろう。

ペベレルの魔力がロンドンを出ると共に俺は市場へと向かった。

三十四話（後書き）

「今日は――…何にしようか」

昨日は火トカゲをしたからな……

「あ、じゃあドラゴンが良い――！」

ドラゴン、かあ……

「ドラゴンって狂暴だけれどカッコイイよね――！」

目をキラキラしながらアルは言う。

「ハンガリー・ホーンテールやノルウェー・リッチバックとか狂暴だけれどカッコイイし、火の玉とかもカッコイイ」

後はねーとアルは次々ドラゴンの品種を話していく。

（……ドラゴンにするかな）

憧れも良いけれど……ドラゴンの対処方法とか教えてくおかないと何だか今の勢いで本物にも突っ込んで行きそうだ。

（腕がないのにそれは自殺行為だしな）

あいつらは火は吐くし、鋭い牙に爪。

尻尾だって危険だし皮膚は硬い。

そしてあいつらは飛ぶ。

ドラゴン相手には普通、数人の魔法使いがつくのが定石。

（そこら辺も言い聞かせないと……）

俺はため息をつきながら手を叩く。

「分かった。授業はドラゴンにしよう」

だから静かに、と言うとアルは一瞬にて静かになる。

……人間、好きな物に対する態度ってのは打って変わるよな。

そう思いながらも俺は口を開いた。

三十五話

ペペレルがロンドンを去ってから幾つかの年が過ぎた。

その間も俺は変わらずに主に仕え、暗殺をしたり料理や掃除や材料調達など色々な仕事（命令）をこなしていた。

最近は特に暗殺の命令が多く、昨日も処理をしたくらいだ。

「……これまた溜まりましたね」

ちなみに今日の命令はトイレ掃除。

しかしただのトイレ掃除ではなく今日掃除する所は外の共通トイレ。この外の共通トイレと言うのは文字通りに外に掘られているだけの共通トイレである。

その上外にある共通トイレは主に身分が低い者と……人間ではない生物が使用する。

人間ですら出る物は臭いと言うのにそれが生物となると臭さは倍増してしまう。

……まあ、一人じゃなかったから運が良い。

「……本当、運が悪かった」

今日は戦闘奴隷の人と二人で掃除だ。

残念ながら振り分けられた番号を教えて貰えなかったから呼びようがないけど……まあ、必要ないだろう。

「……掃除を始めましょうか」

「……………ああ」

スツと配分された布で鼻を覆い、掃除道具を手にする。

「……逝くぞ！！」

俺と隣の戦闘奴隷は汚い物で溢れているトイレへと足を踏み入れた。

(お……わった)

日が暮れて来た頃に掃除は終わった。
緑やら青やら少しカラフルな物もあったが結局は同じ物。
それを掃除するのは凄く勇気が必要だった。

(……………臭い)

クンクンと匂いを嗅ぐとあの中に居たせいか自分の匂いが果てしなく臭い。

(報告より先に体を洗おう)

洗わなければきつと店や魔法省なんて入れないだろう。

(……………うん?)

気配が薄いから……賞金稼ぎだろう人間が三人、俺達の近くにいます。

「…………俺は先に行ってるな」

そう告げ、スツと立ち上がり去っていく戦闘奴隷。

(…………つまり俺一人で相手をしろって事か)

まあ、彼の仕事は人を必ず殺すという事ではない。所詮お偉い様の暇潰し程度の見世物殺り合いだ。

殺す事もあるれば怪我だけの時もある。

(さて……殺りますか)

スウー……と意思を沈め感情を消す。

クルリと敵と向かい合う様に体の向きを変え、主要暗器である糸に手をかける。

暗器の綱糸を手に絡め、俺はゆっくりと走り出す。

だが、走り出した先は敵ではない。一見ジョギングをしているかのように俺の周りから少しずつ距離を伸ばし敵の近くまで走り、元の場所に戻る。

初めこそはいきなり動いた俺に警戒したような気配だったが徐々にその警戒が緩み元の場所に居る現在は警戒などなかった。
あるのは殺気のみ。

ザワリザワリと動かない俺に対し徐々に殺気が鋭くなってくる。

既に辺りには殺気が充満し、緊張感が最高峰になったのを見計らい敵は飛び出してきた。

その数、三人。

俺はスツと綱糸を絡めてある右手を差し出し、ニヤリと笑う。

差し出した右手をギュッ力を入れ綱糸を持ったまま音もなく握りしめる。

ブシャアアアアと水が勢いよう流れ出すかの様に三人分の赤い血が流れ、三人の肉体は張り巡らされた綱糸によって粉々になってボトボト地面に落ちた。

ポタポタと三人の体がないにも関わらず綱糸に残っていた血が地面に落ちるが地面は既に肉塊の集まりで血に染まっていた。

「トイレには……ああ、ないな」

一応、肉塊がトイレに落ちない様に気をつけてはいたが再度遠目で確認をする。

もし、あったなら一人でまた掃除をしなければならなかっただろう。ホッと安心した俺は肉塊をそのままにしてこのトイレ手前にあった川へと向かう為背を向けた。

三十五話（後書き）

「さて、先程様々な名前のドラゴンが出ていたが、ドラゴンは様々なことに使われている。現在なら革手袋や魔法薬の材料、狂暴さを買って金庫の番をさせたりな。俺達の頃は血を飲んだら不老不死になれると伝えられていてな、それを知ったマグルがドラゴンを倒そうとして食われた事件が沢山あった。……先程も言ったが、ドラゴンは狂暴だ。尻尾には棘がある。爪や牙は肉を切り裂くのに最適なほど鋭いし、火は吐く。オマケに呪文を跳ね返すほど皮膚が固くて厚いから魔法使いですら数人係で一匹の対応をするのがやっと。それをマグルが倒すなんて無理だ」

ジツとアルを見つめ、言う。

「……だから、現在では飼育禁止になっているし、野生のドラゴンですら常に見張っている」

好きなのは良いけれど、危険性も知ることだ、と俺は告げる。

「……一人では無理？絶対？」

ジツと俺を見ながらアルは問う。

「……そんな芸当が出来るのは数人くらいだ。だが、その数人に……自らが入るとは思わない方が良い」

「……なら、その数人に入る」

アルは何かを決めた、そんな目をしている。

「一度……見てみたい。触ってみたい。そうするにはドラゴンを少なくとも気絶させないとダメでしょ？なら、そうなればいい。俺が、数人に入れば―」

「ダメだ!!」

俺は声を荒げ言葉を遮る。

「それならば、俺は教えない」

アルの言っている事は分かる。

見たい、触りたい。――それは当たり前の欲求。

だが、その対象のドラゴンを一人で倒す――それはとても難しい事だし、力もいる。

だから一人で倒せばアルは新聞に乗るだろうし、本人の意思とは違っても有名になるだろう。

そうなれば一見、華やかしく見える。

けれど現実……ドラゴンを倒した力を恐れられ一人になるだけだ。

又はその力目的に利用される。

(……それだけはさせない)

アルがドラゴンを倒す気なら俺はこれ以上魔法を教えない。

「なら、自分で学ぶ」

アルは今だ真っすぐな目のまま告げる。

「……そうか」

俺は一目アルを見、部屋から出て行った。

三十六話（前書き）

初めてハリポタを読む方に分かるように用語解説っぽい物を後書きに書き始めて大体、三十五話。

いつの間にか用語解説風から脱線し、プチ物語り風に成りはじめました。

……うん、頑張って解説風にしていたんですけどね。

ネタが無い↓その場を何とか乗り切る↓何故か物語り風に……

自分の首を苦しめ始めました（苦笑）

今や本編よりも考えるの大変です。

読まれて無くて、最後までやると決めていたので止めはしませんけど。

物語り風だと最後まで行かずに終わりを作ってしまいそうなんですよね……

用語解説って難しい……………

あ、読んでいて分かるでしょうが一応後書きの設定は死んだ世界です。

死後の世界とも言いますかね？

だから頑張れば色んなキャラが出せる……あ、その手があったな。

因みにゴドリツクの目が見えているのは単に後書きまで見えてなかったら書きずら……ゴホン、不便だなと思ったからです。

三十六話

バササ……と鳥の羽ばたく音で俺は目を覚ます。

(……………ん?)

スウと暗闇の中、目を開く。

ホウホウと鳴き声が近くから聞こえる為入ってきた鳥はふくろうな
んだろう。

ボンヤリと目が暗闇に慣れてきたのか周りが見えてきた頃にはふく
ろうはバタバタ羽を動かし怒っているようだった。

「……………主からか」

ふくろうの足には羊皮紙と呼ばれる紙が括りつけてある。

俺はふくろうへと手を伸ばすとふくろうは不機嫌そうに足を差し出
す。

ガサガサと音を立て羊皮紙をふくろうから外すとふくろうは一目散
に飛び去った。

俺はシワシワな羊皮紙を広げる。

——今すぐ来い——

(……………今すぐ?)

書かれていた内容は一言。

(……………急な命令でも出来たかな?)

そう思いながらも羊皮紙を丸め捨てる。

俺はスツと立ち上がり暗器と短刀を持ちこの場所を離れた。

外は空が明るみ始めたくらいでまだ日は昇っておらず若干薄暗かつ
た。

(……随分早いね)

ヒュウヒュウ冷たい風に体が冷えながらも俺は魔法省へと向かう。
数十分くらい歩いただろうか？

目の前に見慣れた建物が見えてきた。

「……もう、少し」

冷たい風に当たり体はガチガチに冷えていたが目的の魔法省は後少し。

俺は震える足を無理矢理一本前へと動かした。

魔法省へついてホッとしたのもつかの間、俺は急いで魔法大臣室へと向かう。

「失礼します」

ノックをし、こう告げてから中へと入る。

「……………来たか」

見ていた書類を机に置き、カタンと主は席を立つ。

カツカツと主の足音が部屋に響く。

「……………行くぞ」

ガシッと頭を捕まれたかと思うとグルッと回り視界から部屋が消えた。

パチンと現れた場所は見慣れぬ土地。

薄暗く、周りに木々があるから森……だとは思うけどどの地方かす

ら分からない。

「さて……今日こんなに早くお前を呼んだのには理由がある」

スツと主は俺の頭から手を話し俺を睨みつける。

「俺は昨日知ったんだがな、最近ロンドンでとある噂が流れている」

「何でも……金色と見間違いうくらいの髪色の子供が最近魔法省をよく思っていない人達を暗殺している、と」

スツと主は目を細める。

「現在、奴隷の中で暗殺をしているのはお前しかない。……お前以外の子供の可能性も考えたが、確認を取ると此処最近、全員家族の元に居たそうだ」

つまり、と主は話しを続ける。

「特徴とか合ってはいないが、お前は確実に誰かに見られていた、と言う事だ」

その言葉に俺はサツと血の気が引いていく。

(見られて……た?)

でも……暗殺の時に他の人の気配なんて感じなかった。

「この噂が広まったおかげでただ今魔法省への印象は思わしくない」
暗殺時に魔力だって感じなかった。

「つまり、お前のせいで俺達は噂を揉み消すのに労力を割いている。

……たかが奴隷であるお前のせいで、だ」

だから誰も居なかったはずなのに。

「……処分の一つとして今日からお前を俺専属から外す。意味……
分かるな？」

スウと主は息を吸う。

「お前は俺が呼び出すまで二度と俺の前には現れるな」
その言葉は解雇に近かった。

……だが、解雇ではなかったと言うのは運が良かった。
解雇は……奴隷の自殺を命じられたのと同じだから。

「後……もう一つ」

スツと主は左手を俺に近づける。

「お前の片目、貰って行くぞ」

そう言って主はグッと俺の右目に手を食い込ませる。

「っ……!？」

右目にズキリと電流を浴びたように痛みが走る。

真っ暗になった右目からズチュと言う音が聞こえたと共に主はニヤリと笑った。

次の瞬間、ブチブチブチと言うひきちぎられる音が響いたと同時に先程とは比べものにならないくらいの激痛が俺を襲う。

「うゝあゝあああああああああああああああああゝ」

俺はギュッと右目をつぶり両手で覆いながら森中に響いているだろうくらいの音量で叫び落ちる。

右目を覆い隠した両手にはヌルリと慣れている血が手につきそこからポタリポタリと地面に滴り落ちる。

「……これが今回の処罰だ」

ブシュと握り潰したような音を聞きながら主の声が響く。

「うゝあゝあゝ……」

ズキズキする痛みにドロリと溢れる血で頭が真っ白な俺はボンヤリとそれを聞いていた。

フンツと鼻で笑う様な音の後にパチリと音が響いた。

(去った……の……か、な……)

ジワリと赤黒く染み込んだ地面の上にまだ明るい赤いがポタリと落ちる。

スウと血の匂いがしながらも吸い込んだ森の空気が、やけに冷たい気がした。

三十六話（後書き）

アルの個人授業を辞めてから一週間。

アルは一人で学んでいた。

俺はと言うとアルの様子を見つつ、少し後悔していた。

確かに、俺の考えた事は間違っていない。

力を持てば人は一人になる。

だが、だからと言って授業を辞めるべきではなかった。

一人で学ぶ……それは悪く無いが一人だからこそ間違えたら間違えたまま。

俺は独学だったけれども一人ではない。

俺より頭が良いロウエナやサラザール、ヘルガが居てくれた。

だから間違えたらその場で討論なり指摘を貰えた。

（やっぱり謝るしか無いかなあ）

あの日以外アルは俺を避けている。

コッソリと羊皮紙を見たり出来ないからアルが何を勉強しているか分からない。

（間違えたままじゃ、アルが危険だしな）

安全が前提なマグル用品ではないのだ。

魔法は何があるか分からない。

学校を建てた理由の一つだったんだけど……

（それを忘れて感情的になるなんて……まだまだ未熟者だな）

ハアとため息をつく。

（とりあえず、アルと接触をして謝るのが先か）

スツとアルのいるリビングへと足を踏み出した瞬間にゴツンと頭に激痛が走った。

三十七話（前書き）

気づいたらお気に入りが増えていて浮かっているカイラです。

前回に続き前書きを書いています、今回はお知らせです。

まだ一週間前ではありませんがもうそろそろ期末テストが始まります。

私の高校、体育祭などが二学期に無いため範囲が広いです（泣）

ポチポチ勉強を――

あ、いやいやそんな事ではなくて、小説ですが一応登下校や昼休みなどの空き時間で執筆はしますが、更新が今よりかなり遅れる又は止まります。

楽しみにしている方には申し訳ありませんが頑張って登下校などに執筆し出来上がり次第載せていきますね。

これ入れて後二回のテスト、頑張って乗り切るぞー！

三十七話

ダラダラと血が垂れている右目を覆い隠しながら地面と仲良くしているといつの間にか俺は気を失っていた。

目が覚めた頃には仲良しにしていた地面ですら見えない程に暗くなっていて、覆い隠していた手から血の乾いた感触はするけど血の独特な感触は無くなっていた。

（止まった……かな？）

ペタリと右目に手を当ててみると目玉は無く少し押すだけで指がグニュと空いた空間に食い込んだ。

（……………）

その感触に眉を潜めながらも俺は手を離す。

そしてユックリと右目を開く。

初めて両目で周りの景色を見ようとしたけれど一面真っ暗で違いが分からない。

「……夜、かあ」

……とりあえずこのパリパリした血をどうにかしたい。
落としたい。

「川……あるかな？」

目が暗闇に慣れるまでは動くべきではないだろうけど僅かなら気配で分かるし……後は、勘で行けるだろう。

スツと立ち上がり俺は足を一步踏み出す。

すると地面はサクリと軽い音を出した。

（……とりあえず人が通る道って事か）

人が通っていない道は踏み固められていないからこんな音は立てない。

そして人が通ると言うことは……その道に川がある確率は低い。

（森に入るとして事は当然水も持っている）

結果、川に寄る必要がなくなる。

（獣道を探さない）

獣の足跡があれば後を追うだけで川に着く確率が高いんだけど……

「そう上手くはいかないよな」

少しづつ周りが見えるようになってきた左目で地面を見ていくが獣の足跡どころか俺の近くは踏み鳴らされた地面ばかりだった。

「……小さい森でありませんように」

俺は祈る様子をぶり暫く時間を置いた後に駆け出した。

……あちこちの木々にぶつかったりしたれど運良く獣道を見つけた事が出来た。

川の音も僅かだけれど聞こえる。

ただ……木々にはぶつかったただけではなく、擦ったり刺さったりしたから川に着く前に少々流血したけれど。

「まだ音が小さいね……」

でも辿っては行けるだろう。

サラサラと小さく聞こえる耳を頼りに木を避けながら森の中を歩く。川に近づいて来たのか、段々と音がサラサラからザアアと迫力ある音へと変わって来た時だった。

（もうそろそろ……）

近づいて来ている川へと意識を集中して足元なんか気をつけていなかった。

ミグユと何やら地面とは違う、けれど人間みたいなある程度固い生き物を踏んだ感触とは違う物を踏んだ。

「ん？……あー……」

違和感に俺は視線を足元へと向けるとそこには俺に踏まれている結構大きい鳥。

「……足を退かした方が良いかな？」

俺は怖ず怖ずと足を退かすが体力がないのか鳴く気配も、また踏まれたからと突くような気配も無かった。

「……………」

別に、このままにしても良かった。

否、そうしていたべきだろう。

でも俺は考えるよりも先に大きい鳥を抱え川へと走っていた。

「着いたっ」

日頃……と言うか奴隷の訓練でかなりの重量を背負う又は抱えて走り込み、と言うのをしていたからかさほど息も切れずに川へ着く事が出来た。

俺はすぐさま川近くに大きな鳥を下ろし、川へと向かう。

チャプリと手を川の中へと入れるとヒンヤリと冷たくて俺は思わず手を抜きそうになった。

それを何とか留めて水の中で両手を隙間無くピッタリとくっつけ水を救い上げる。

大抵はポタポタと落ちていったのだけれどピッタリ合わせた両手の奥に少しだけ残っていた。

それを零さないように鳥の元へと戻って行く。

「ほら、飲め」

俺は鳥の嘴近くへと持って行くけれど鳥はグツタリとしていた。

「……………」

俺は一先ず先程踏んでしまったらう箇所へと水をかける。

……ずっと履いている靴だから少なからず汚くはなっているだろうし。

パシヤリと冷たい水がかかったにも関わらず鳥は目が覚めない。

(……まず、血を落としてから薬草を探そう)

このまま居ても多分まだ鳥は目を覚まさない。

ならその時間を有効に使うべく俺は立ち上がった。

スツと鳥の元を離れ先程の川へと向かう。

さほど距離が無い川へ着いた俺はすぐさま顔を洗い手を洗い、ついでに体を洗った。

……凄く寒かったけれど。

そんな寒い思いをしながら洗い終えた俺はバジャアと川から上がり濡れたまま体を震わせ出来るだけ水分を飛ばしてから洋服を着た。

それから薬草を取りに行く為に予防運動としてグツグツと筋肉を少しほぐしてから俺は森へと駆けて行った。

あの、大きな鳥を救う為に。

三十七話（後書き）

後ろへ振り返り、ぶつかった相手を見るとそれはふくろうでござ立腹
そうにピイイと鳴いている。

（……俺が悪いのか？）

一見、避けなかった俺が悪いように見えるがふくろうは普通人にぶ
つからない様に避ける。

だから悪い……と言うか避けられなかったこのふくろうが鈍臭いだけ
で、俺が悪いわけでは……ないはず。

「ご苦労様？」

キョトンとしながらそう告げると早く取れと言わんばかりに羊皮紙
を近づけ俺の体を足に食い込ませる。

「い、でえ……取れば良いんだろ？」

手を差し出せばポイッとふくろうは羊皮紙を置きバササと飛び去っ
て行った。

（あのふくろうを寄越した奴は誰……？）

元生徒とかじゃないよね、と思いながら羊皮紙を開く。

（名前は……）

セブルス？

——月光草が無くなった。持っていないか？——

(……月光草、か)

……無くなっていた気がする。

(……無いで良いや)

今はセブルスよりアルの方が先だ。

そう思い俺は杖を抜こうとした。

「……あ、れ？」

……何処に行っちゃたな。

(何処に置いたっけ？)

……まあ、気づいたらいつものように戻って来ているだろう。

(……久々だな。『アクション』)

羊皮紙に、羽根ペンを浮かべ無言術で呼び寄せるとヒュッと手に羽根ペンと羊皮紙が収まった。

カリカリとセブルスへの返事を書き、羊皮紙を折る。

「こうすればっ、と」

セブルスへ届く様に羊皮紙に魔法をかけ飛ばす。

（さて、これでセブルスのは終わった）

次はアルとの話し合いだ。

立ち上がり、俺は部屋へと足を踏み入れる。

「アル、話しがある」

勉強をしているアルへと、声をかけた。

三十八話

あちらこちら歩き回って薬草を見つけた。

薬草を見つけるだけでもかなりの時間が経ったはずんだけど……問題はその後だった。

「……川、何処だっけ？」

あちらこちら歩き回ったから何処に川があったのか分からなくなっ
てしまったのだ。

「……………何とかなるか」

最悪でも森の端から端……隅々まで行けば見つかるだろう、と考え
ついた俺は歩き出した。

それが……どれくらい前だろう？

気がついたら空は明るみ始めていた。

「……………今日中に辿り着けるかな？」

依然、俺は森の中を歩き回っている。

一応、薬草を見つけるまでに踏み固められている道は通らなかった
からそこから先には行っていないけど……

「見つからないな……」

血は流して無かったけれどあの鳥は意識が無かった。

あんまり長く放っては置けないんだけど……

気持ちばかり先に行き次第に俺は焦燥感に駆られる。

「……………落ち着こう」

初めてあの川にたどり着いた時も、あまり道を逸らしては無かった。
多分曲がったのは五回以内、だ。

だから多分あの川はあまり複雑な位置にはない。

……ただ今、俺がいる位置は分からないけど。

踏み固められている道に出てもあの場所が分からなければ川には行
けない。

「……………あ、そうだ」

パツと頭を過ぎる昨夜の出来事。

主は……昨夜、俺の右目をえぐり取った。

俺はその痛みに叫び両手は血に濡れていた。

……地面に血が滴る程に。

（だからあの血を探せば……）

血があつた場所は昨夜のあの場所、という事だ。

（先に踏み固められている道に行こう）

あの場所から川を探した方が早いだろうしね。

ズボツと柔らかい地面を踏みながら俺は踏み固められている道へと向かった。

（あつた！）

踏み固められている道へと出てからずっと地面を睨みつけながら歩き、やっと一部血濡れた地面を見つける事が出来た。

「此処から……何とか川に行かなきゃいけないんだよな」

既に日は真上近く。

このままだと日が暮れてしまいそうなスピードだ。

「少し急がないと……」

俺は目の前の獣道へと駆け足で突っ込んで行った。

「見つけた！！」

昨夜と同じようにサラサラと聞こえ始め、次第にザアアアと言う音

に変わりすぐさまスピードを上げた俺の目の前に川が見えたのだ。

「この辺なはずなんだけど……」

キョロキョロと辺りを見回す。

（……大きいから見つけやすいはず）

「……………あ」

川から少し離れた場所に、赤い鳥がギロギロ威嚇しながら俺を見ていた。

「大きさからしてこれだよな……………」

目も覚めたみたいだし、良かった。

ただ……俺を敵として認識しているとは思わなかったけど。

「でも……まあ、手当てするだけだから良いか」

あの時、何も考えずに抱え連れて来たけれど元々この子は野生。
あんまり色々するべきでは無いだろう。

「終わったら……放さないとな、な」

うん、そうしないとな。

スウと息を吸い、足を一步踏み出す。

赤い鳥はギロギロギロ警戒音を増していく。

俺はそれに怯む事もせずに近づいて行く。

直ぐに手が触れられる、そんな近くにまで近づいてから俺はピタリと足を止める。

「……………」

俺は葉草を持っていない方の手を、そつと差し出す。

赤い鳥はギュワアと今までに一番大きい警戒音で威嚇をし、ブスリと嘴を突っ込んで来た。

「つ……………」

ズキリと走った痛みに耐え、俺は引っ込みそうな手を抑える。

此処で引っ込んだら多分、この子は治療をさせてくれない。

ギロギロ威嚇しながら赤い鳥はグリグリ嘴を動かし俺の手をえぐる。

「ぐっ……………」

今のうちに、怪我用の葉草を怪我してそうな箇所塗りに塗り込めれば良

いのだがそれは無理そうだ。

(……どう、しよう)

痛みで何も思いつかない。

いや、痛みが無くても思いついていないだろう。

(………うゝ)

眉を潜め俺は考える。

……どうしたら、この鳥は安心してくれる？

「……………分かんない」

ダラダラと流れていく血なんか気にせずに俺は一生懸命考える。

「うゝゝゝ……………」

呻き声しか出てないけれどちゃんと考えた。

一生懸命、考えた結果は何とかなる！

『ギユウウ……………』

そう考えついたら後は実行、そう思って怪我をしていない手を何とか伸ばそうとした時だった。

急に威嚇が止み、血に塗れた嘴がソツと俺の手から離れたのだ。

『……………キユウ』

鳥は諦めた様に鳴きソツポを向いた。

「……………?」

俺には急に攻撃をしなくなった理由が分からなかったけれど治療するなら今のうちが良いだろうと思い、鳥の体を診ていく。

鳥は矢で打ち抜かれた傷や野生生物に喰われたのか、かさぶたになった傷痕が沢山あった。

「ん……………」

矢で打たれた傷はまだ葉草を塗り込めるけれどかさぶたにはどうしようもない。

「……………出来るだけで良いか」

俺は葉草を取りギユツと傷の上で絞る。

ボタボタと僅かな汁が傷へと当たり、鳥は痛いのかギユル…………と鳴き始める。

「……………」

俺はポンポンと鳥を優しく叩き、絞り切ったシワシワの薬草を傷へと当てた。

上手くいけば汁がカラカラの薬草をくっつけてくれるはずだ。

……上手くいけば。

「よし、終わった」

後はどうしようもない。かさぶたは放って置いた方が良さし、もし薬草が取れても……まあ自然に回復していくだろう。

所詮、薬草は傷を治す際の補助でしかないんだから。

（さて……俺も行かないと）

何時までも此処には居られない。

俺は残った薬草を持ちスツと立ち上がる。

『キュウ!!』

バサリと赤い鳥が羽を広げ空に浮かぶ。

「……………」

俺はキョトンと首を傾げると赤い鳥は俺の怪我をした手に頭を垂れ、泣いた。

ポタリポタリと数滴俺の傷へと当たる。

「……うわっ!」

涙が当たると同時に凄い勢いで傷が塞がり今では傷があったことですら分からなかった。

「凄い……………」

俺はヒラヒラと手を動かし再度確認する。

「傷が無い……………」

『キュウ!!』

赤い鳥はまるで俺の言葉に相槌を打つように鳴き、そしてバサリと羽ばたいた。

次の瞬間、ズシリと頭が重くなる。

『キュー…………』

流石に頭上まで見えないからよく分からないけれど、声からしてあ

の鳥が俺の頭に乗った、と思う。

「……帰らないの？」

頭上からゴソゴソと聞こえ、すっかり落ち着いているだろう鳥に俺は聞く。

するとゴツンと鳥から突かれた。

……地味に痛い。

（帰らないのかな？）

それとも、まだ帰れる程の体力が無いのかもしれない。

「帰りたくなったら帰って良いから」

俺がそう告げると、もう一度ゴツンと突かれた。

その痛さに眉を潜めながらも俺は此処から出る為に足を一歩踏み出した。

三十八話（後書き）

「……………何？」

勉強を遮ったからなのか不機嫌そうに言うアル。

「……………う、あの、な」

……………やっぱり、謝ると言う行為は何回しても慣れない。

「……………あんな事、言って悪かった」

俺は視線があちらこちら泳ぎながらも言葉を紡ぐ。

「ドラゴンを倒すと言う事は力を……………強い力を得ると言う事だ。強い力を得れば人々は恐れ、離れていく」

……………時には、殺そうとも、する。

「そうなるなら俺は教えなくなかった。だが……………」

俺の時だって、一人ではなかったように。

「一人で学ぶには限界がある。独学が悪い訳でもないが間違えても指摘が無くそのままだ」

一人になるかもしれないが、逆にアルが一人になるとは限らない。

「そうならないように、子供が間違えないように」

力や見かけ、育ちや……噂なんてもので計り嫌うんじゃない。

「だから俺は学校を建てた。それを……忘れていて、」

中身を知り、友となり何があっても見捨てないような親友と出会えるように。

「……………悪い」

俺達みたいな子供を出さないように。

(……………本当、馬鹿だよな)

忘れちゃいけない事をフツと忘れて、な。

(あいつらに殴られそうだな)

願わくは会わない事を――いや、知られない事を祈ろう。

ハアとため息が聞こえる。

「別に……あまり怒ってはない。ゴドが一人でした事だし」

「……………ぐっ」

「……………それに俺は一人にならないよ。ゴドが居るでしょ？」

アルはフワリと微笑む。

その笑みは、俺の友を思い浮かばせた。

「……………ああ」

そういえば……………どうしているんだろうな？

この事を知られたくは無いし会ったらちょっと騒動になる話もあるから会わない方が良いんだろうけど……………

（元気に……………してるのかな？）

もう、随分会っていない親友達は。

三十九話（前書き）

さて、やっとテストが終わりました。

久々に小説を書いてプロットを見てみると……

あら、ビックリ！少しズレてる！

それ程支障が無いため、多少前後が入れ代わるハメになりました。

うん、今度から定期的にプロットに目を通そう。

三章は長いからなあ……

あ、三章と言えばこの話しで二章終わりです。

二話の外伝の後、三章に入ります。

なんだかこの二章だけで随分長くなりましたが三章ではやっとタグの人達が出て来ますのでお楽しみに！！

三十九話

『……キュウ』

ジロジロと容赦なく見られる視線に鳥は小さく鳴き、顔を俺の頭へなすりつけてくる。

……見られているのは俺だけれど。

(やっと町を見つけない……)

あの森から出てもすぐには町には着かなかった。
踏み固められた道が続くだけ。

やっと見つけ入った町もこの状況。

皆、片目が無い俺を物珍しいのかジロジロと見てくるのだ。

……俺を避けながら。

(……これじゃ、何も聞けない)

避けられるんじゃないかこの町の名前も、位置も聞けない。

「……………どうしようか？」

位置が分からない限り、次の町にいつ着くか分からない。

此処に滞在するという選択も出来るけど……

『キュー……』

……でも、この鳥はあまり此処に居たくないみたいだし。

(……仕方ない)

少しでも情報が欲しいが諦めて早く出よう。

俺も、この状況はあまり好きじゃないし。

ザワザワ周りが騒ぐ中、俺は町外れへとザクザク歩いて行く。

『キュウ……？』

何か面白い物でも見つけたのか鳥は不思議そうに鳴いた。

「いっ……………」

ザクザク進んで行く俺を止めたかったのか鳥はグイと俺の髪を嘴で引っ張る。

「……………何？」

初めは無視をしていたけれど、あまりにも見たいのかグイグイ俺の髪の毛を引っ張るから俺は立ち止まり問う。

『キュウ!!』

鳥は俺の頭の上でバサバサ羽を広げ暴れる。

……地味に首が痛いから止めてくれないかな？

『キュウ!!』

俺の心の声が聞こえたのかはたまた早く見たいのか鳥はドスドス突き始める。

「いてっ……何処が見たいの？」

この言葉を待ってました!と言わんばかりに鳥は元気良く鳴きバササと飛んでいく。

俺は鳥を見失わない様に後を追った。

「……………」

バサバサ飛んで行った後を追うと鳥はごちゃごちゃ並んで……いや、色んな物が豊富に置いてある出店に居た。

(布……?)

鳥は赤い布見たいな前に立ってパタパタ羽を動かしている。

「……これ？」

俺はちよっこんと鳥の後ろに座る。

『キュウ』

鳥は楽しそうに、嬉しそうに鳴く。

(……何が良いんだろう?)

布って……見て楽しめたっけ？

しかも単色の加工されていない布。

『キュー』

鳥を見ると凄く目がキラキラしている。

「……………行こう？」

凄く目がキラキラしている鳥だけれど、生憎……………お金はない。

しかも俺が店の前に居るからか周りは俺を避け、店には客が入らない状態。

……………おかげで店主又は店員が凄く睨んでる。

早く去ってくれ、という雰囲気は凄くする。

「行こう？」

俺はスツと立ち上がり鳥を掴む。

『キュウウウ！』

俺が掴むと鳥はバサバサ羽を動かし全力で抵抗する。

「い・く・よ！」

俺は土の中に生えている野菜を抜く様に鳥をその場から動かそうとする。

『キュウ！！！！！』

抵抗の為にバサバサと動かしている羽が俺の顔に当たる。

「……………てめえ」

一体、そこまで何にこだわる？

たかが、赤い布に。

『キュウ！』

鳥は俺の腕を目掛けて嘴を向けた瞬間だった。

バサアと言う音と共に視界が真っ暗になる。

「……………！！」

俺は頭に乗っかっている何かをグイグイ押し上げる。

パツと光りが見え、最初に見えた景色は店主又は店員だろう人物だった。

「やるから早く立ち去ってくださいます？」

その言葉を告げると店へと戻って行く。

（やる……………？）

何をだろう、と思いながらも俺は手に掴んでいる先程の何を見る。

(……布じゃ無かったんだ)

俺が掴んでいた物は先程、鳥が見つめていた赤い布……いや、赤いマントだった。

『キュ……』

バサリと羽音がしながらもヒョイと鳥が顔を出す。

「くれるってさ。だから早く行こう」

俺は鳥を見ながら告げる。

鳥はキョロキョロと赤いマント、そして俺を見回し一声鳴くとバサリと羽ばたき俺の頭へと乗る。

『キュウ!!』

俺は地面に置かれたマントを手に取り歩き出す。

『キュウ!!!!』

鳥は一際鳴き、グイグイとまた髪を引っ張る。

「……………何？」

『キュウ』

鳥はバサリと持っているマントに足をつけ、次に俺の肩へと触れた。

『キュウ!』

バサリと一声鳴き鳥はまた俺の頭へと戻る。

(マント、肩……………もしかして)

マントを着ろって言っているのかな？

「着るの？」

『キュウ』

俺が問うと鳥はガツガツ嘴が俺の頭に当たりながらも頷いた。

「……………」

俺はバサリとマントを翻し、つける。

「……………これで、良い？」

『キュウ!』

鳥は嬉しそうに鳴きながらバサバサ羽ばたく。

「じゃ、行くよ」

『キュウ!』

元気良く鳥が鳴き、納得したところで俺は町を出るために歩き出した。

三十九話（後書き）

目の前に広がる赤い髪。

彼はゴドリック・グリフィンドールと言う超有名人。

そんな彼に会えたのは……まあ、とあるコーナーの募集で会えたのだけだ。

彼は、俺の双子の弟に似ている。……気がするんだ。

朧げな記憶だけだね。

そんな彼は器用にこの間一人で喧嘩していた。

おかげで俺の脳内タグに不思議と言うタグが加わった。

因みに他には超有名人、ホグワーツ創設者、格好良い、モテるだろう、人当たりが良さそう、頭が良い、料理上手、炊事洗濯出来る……等等など傍目完璧そうなタグばかりだ。

「七割合格」

ニヤリと女性が騒ぐだろう爽やかそうな笑顔でそう告げる。

「七割？」

俺はゴドから羊皮紙を受け取る。

（うわぁ……）

羊皮紙には綺麗な字でツラツラと修正が入っていた。

（脳内タグに追加）

字が上手い、と。

「さて……紅茶でも飲もうか？」

そう、尋ねるように言いながらもゴドはカタンと席を立つ。

あ、そうそう。ゴドは紅茶も上手いんだよな。

母さん程では無いけど母さんを除けば一番上手い。

（……ほんっと完璧だよなー）

容姿が良い奴は大概何でも出来るよなー

（あ、と見直し見直し）

俺はスッと視線を羊皮紙に向けるもののすぐに顔を上げた。

（今度で良いか）

今日はゴドの観察でもして脳内タグを増やそう。

紅茶を入れてきたゴドを何か見つからないかと思いながら俺はゴドを見つめた。

外伝・火おこし（前書き）

今回と次回（多分）の後書きはいつもと違う雰囲気です。
と、言いますかいつもと違う、と言いますか……

まあ場繋ぎみたいなものなので四十話からは戻ります。多分……

頭の内容を忘れなければ（笑）

現在スランプ気味に陥ったのか執筆がかなり遅れています。

楽しみにしている方には申し訳ないのですが少しでも書いていきますので気長く待ってくださいると嬉しいですよ。

外伝・火おこし

「んゝ……」

雲一つ無く夜空にキラキラ星が輝く夜。

「寒い……かな」

時期は冬になろうとしていて、俺は小さく身震いをする。

『キュゝ……』

鳥も寒いのか小さく鳴き、俺に擦り寄って来る。

「寒いな……」

俺は擦り寄った鳥に向かって手を伸ばす。

フンワリと鳥に触り膝に抱える。

その直後にズシリと重みが来たけれど、膝辺りがジンワリと暖かいから気にしない。

『キュー……』

俺を見ながら不満そうに鳴く鳥。

……まだ寒いのかな？

（暖める……暖める……）

俺とくつついても、限界があるし……

（……あ！）

火を起こしたら、暖かくなるんじゃないかな？

（……火を起こすのは少し大変だけれど）

火を起こせば暖かくなるし。

「よし！」

俺は鳥を地面に置き、立ち上がる。

「枝を拾ってくるね」

『キュウ？』

キョトンと鳥は首を傾げる。

「動くなよ？」

俺は首を傾げる鳥を見下ろしながらも告げる。

『キュウ!』

キョロキョロと俺を見たかと思えばバサバサバサと鳥はいきなり羽ばたき俺の頭へと乗る。

「……………」

寒いから不満そうに鳴いたんだよ……………ね?

(なんで俺の上にいるの?)

……………まあ、これで此処に戻る必要は無くなるんだけど。

「うっわ……………」

一歩足を踏み出した瞬間強い突風が突き抜け、バタバタバタとマントが風に揺れ靡く。

「……………行こう」

俺はポツリと自分に向かって言い、歩き出した。

「…………中々無いな」

あちらこちら歩き回ったけれど枝は落ちていない。

(もうこの辺りは取られたのかな?)

近くに町があったから住人が冬に向けて付近の枝を取ったのかもしれない。

「枝を取るなら……………少し距離をとるか」

『キュウ…………』

疲れたように鳥が頭上から鳴くけど……………ずっと頭に乗っていただけだから無視をしても大丈夫だろう。

大体、歩いて疲れているのは俺なんだよね。

「……………ん?」

鍛え抜かれた視力が……………遠く離れた人を見つける。

(…………迂回しよう)

人に会って良い事はない。

奴隷だと分かればすぐに殴られ、蹴られ、斬られ……町ならば追出される。

奴隷生活で慣れているとは言え、好き好んで殴られに行かれる奴隷なんていない。

だから大抵、奴隷は人を見かけると避ける。

例外は人が多勢にやられている時のみ。

その時だけはやられている一人を助けに行かなければならない。

身分が高いから、と言うのが建前。

屋敷しもべ妖精によると“人”なのに俺達みたいに暴力を振るわれているから、だそうだ。

暴力を振るわれるのは俺達、奴隷のみで良いと……聞かされた。

(……俺はただ身分が高いからなんだけど)

確かに、暴力を振るわれるのは俺達だけで良い。

でも、それが助ける理由かと言われたら俺の中では何かが違うと叫ぶ。

(一体あれはなんだろう?)

……あ、それよりも避けないと。

歩いていたら先程よりも近づいていたらしく小さくしか見えなかったのが大分見えて……

「……変更だ」

見えた景色は数人に囲まれている人間。

これを見て、避ける訳にはいかない。

俺はあの集まりの中へと駆け出した。

「だから、お前の分を寄越せよ！」

「お前の所、母ちゃんとお前しか居ないんだからそんなにいらないだろう？」

「それに貧乏なんだからお前なんて火を起こさなくても良いだろう？」

段々と聞こえてくる会話。

いや……会話と言うより一方的に恐喝していると言うのかな？

(……………な、んだろう？モヤモヤとする)

俺は、モヤモヤとした感情を抱きながらも辿り着いた瞬間にバキィと囲んでいた奴らの一人を殴り飛ばす。

……思っていた以上に殴った相手が吹っ飛んだけれど気にはしない。

「なんだ、てめえ！」

仲間がやられたからなのか囲んでいた奴らは一斉に割り込んできた俺に注目する。

おかげで良く見える顔は全員幼い。

(……大人かと思った)

道理で良く飛んだはずだ。

「そいつのっ……仲間なのか！」

囲んでいる子供の中で、体格の良いリーダーみたいな子がそう叫ぶ。

「違うよ」

俺は短くそう答え、地を蹴る。

……多分、彼等には一瞬にしか見えなかったのだろう。

キョトンとした顔が停止したまま俺は囲んでいた奴ら全員に蹴りを一発ずつ入れる。

「ぐっう……」

俺が駆け出した場所に戻ったと同時に唸るような声と共にパタリパタリと倒れる音が背後から聞こえた。

「速い……………」

目の前にはポツリと驚いたように呟き、深くフードを被った枝を沢山持つ子供。

顔が見えないけれど、多分恐喝されていた子供だろう。

(うん、大丈夫……)

見た目で外傷も無いし、声も落ちついている。
特に俺が必要、と言うような事はない。

俺はクルリと子供に背を向ける。

「じゃあ、枝を探しに行かないとね」

俺は足を踏み出しながらも落ちる事もなく、上手い具合にずっと座っている鳥を優しく撫で声をかけた。

「あ、あの……」

ポツリと声をかけられる。

「家、今でも何とか暮らせるからあげる!!」

緊張したのか子供は凄く甲高い声の大音量で叫んだ。

『キュ!?!』

いきなりの事で、鳥が驚きバタバタ羽を動かすが、俺が振り返った時には地面に置かれた枝とバタバタ去っていく子供の姿だった。

「……貰っても良いのかな?」

『キュウ』

貰え、と言わんばかりに鳥は頷き、その度に俺の頭に嘴が刺さる。

「……じゃあ、貰おうか」

枝は落ちているからここで遠慮して取らなかつたら別の人に拾われてしまう。

俺はしゃがみ込み一本、一本拾っていく。

全て拾った頃には腕は枝でいっぱいだった。

「これで火を起こせるね?」

最も、此処では起こせないから少し移動しないといけないけれど。

『キュウ!』

嬉しいのか、鳥はいつもより甲高い声で鳴く。

「……………あ」

……そういえば火を燃やす材料はあるけど、火を起こす器具が無い。
「……………」

嬉しそうな鳥のフンフン鼻を鳴らす音を聞きながらも俺は、どう火

を起こすか考えていた。

外伝・火おこし（後書き）

俺を採用したこのコーナーのヌシが『今回のネタが浮かばない！』とか『執筆が進まない！』とか俺やゴドには無縁な愚痴をゴドに言い、縋り付いているから今回は俺が執筆し、そして今回も俺の話しをしようと思う。

……つまらない話しだけだね。

前回はゴドの観測をした話だったから今日は……俺の平々凡々な過去でも。

俺がいつ“此処”に居たのかは分からないけど……俺は此処に来てからつい最近までずっと眠っていたらしい。

俺を見つけた両親が眠っている俺を自宅のベットへ寝かせてくれたから寒空の下という事は無かった。

父さん、母さんありがとう！！

目を覚ました俺はこの世界の事を知り、目の前の人が両親と知り……何かが抜けているような気を感じながらも普通に暮らした。

そんなある日、このコーナーの募集を見かけて……それからは気づいたらって感じかな。

気づいたら応募していて受かっていた。

それが俺の過去。

……うん。面白くなかったよね？

ゴドみたいに不幸まっしぐらな人生はそうそう無いけど、波瀾万丈みたいな人生でもないし。

でも、俺の人生これからだから！

……うーん、大分書いたけどまだスペースが空いてるね……

なんだかヌシが愚痴るのも少しだけ分かる気がしてきた。

中々埋まらな――

「アル！それはこいつが書くから俺を助けて！」

ゴドのその声でゴドを見るとビヨンと餅やガムみたいにくっついてるヌシをゴドが一生懸命離しているところだった。

「んー…でも一応ヌシには音があるから……」

ゴドには悪いけど、正直相手をしなくなかったからそう言ったんだけどゴドには分かったのか睨まれた。

「……分かった」

諦めてゴドからヌシを離すために今回は此処まで。

執筆なんて初めてだったけど少し、楽しかった！

また機会があつたら――

「アル、早く！」

ゴドがぐえええと首を締められてるから急ぐね。

また、書く機会があつたらその時はまた付き合つてね！！

外伝・掃除（前書き）

今回の後書きは会話文です。

初めて書いたのですが楽しんで貰えると幸いです。

……こう言えたら良かったんですけどね。

初めて下書きをし、上手く纏まったから後は載せるだけ！だったのが……

文字数を越えていました。

後ろがチョッキンと切れてしまいましたので勿体なかったですが少々無理矢理に終わらせました。

なので違和感を感じるかと……

今度からは文字数にも気をつけますね。

外伝・掃除

「……………臭っ」

俺が居る場所は食べ物腐らせた匂いが充満し、蠅がブンブン飛び交っている。

「……………此处、お風呂だね？」

奴隷だと見つけた俺が告げられた掃除場所はお風呂場だった。案内人が間違えてなければ此处はお風呂なはずだけど……

（蠅が飛んでいる風呂場……）

トイレなら掃除を普段しないから俺達、奴隷が掃除するころにはこんな異臭に蠅が飛ぶなんて当たり前なんだけど……

（流石に風呂場は初めて……）

奴隷や孤児、そこら辺にいる家が無い者以外は基本、最低でも一週間に一回はお風呂に入る。

一週間に一回お風呂に入ってヌメヌメ滑りやすいお風呂になるから、それが蠅が飛び交うお風呂になるには……

（……………考えたくない）

一体、何ヶ月……………いや何年使っていないんだろう？

（……………これは大変だな）

俺はギュッとタワシを持つ。

そのおかげでジワリジワリと鈍い痛みが襲うがそんなものは気にしない。

（……………せめて蠅が飛び交わないお風呂場に！）

俺はそう決意し、浴槽へと蠅が飛び交う中、足を踏み出した。

(……………うん、どうしよう)

綺麗にはした。そこらじゅう見かけた小さい蠅とか頑張って潰したり、浴槽や壁をタワシで擦ったり異臭だって空気を入れ換えたから大分匂わなくなっている。

でも……浴槽の一部が変形してしまった。

(……やっぱり動き回ったのが行けないのか?)

ガコンて凹んだもんなあ……

(これが知られたらお仕置き……)

吊されたり火あぶりされたり爪を剥がされたり……するんだろうなあ。

『キュー!』

何されるか分からないから、と俺から引き離されたはずの鳥が鳴きながらバサバサと素早く俺の元へと飛んで来る。

「……どうした?」

『キュー! キュー、キューキューウ、キュー!!!』

「……………」

一生懸命鳴き、動いて伝えようとしているけれど全く分からないな。

『キューウウ』

「……………え?」

全く反応しなかった俺が悪いのか、はたまた別の理由なのか鳥は怒った様に鳴き俺のマントに洋服を足で掴んだ。

「……………ん!?」

バサバサと鳥はいつもの様に羽ばたいた。

此処まではいつもと変わらない。

ただ、俺の洋服を掴んでいるから羽ばたくだけで終わる、と思っていた。

「う……うそおお」

鳥は俺をものともせず飛んだ。

俺の足は地面から離れ不安定な空へと浮いているし、マントは風に煽られバタバタバタとなびいている。

高度はそんなに無いものの下を見ればそこそこ高い。

「……鳥？」

一体、いつ降りるの？と俺は理解しているか分からない鳥に問う。

『キュウ……』

申し訳ないような、弱々しい声で鳥は鳴く。

しかしそんな声とは違いバサバサと羽を動かし今だに降りる気配は無い。

（……何か、あったのかな？）

俺と離れている間に、何か。

（あの人はあまり動物になれてなかったみたいだし）

これは鳥の気分が落ち着くまでは空の旅になりそうだ。

俺達よりも上の高い高度にある雲が怪しくゴロゴロゴロと音を鳴り出しながらも鳥は気にせず飛びつづけた。

外伝・掃除（後書き）

「えっと……今回は『書いたのに結局出せなかったキャラ紹介』をします」

「キャラ紹介？誰？」

「アルは知らない人。『英雄後談』にて最後に出て来たルーシタット先生。ヌシが涅威様から『創設者と絡むキャラ紹介小説』を出す事を含めてお借りしたのに結局はその小説を出せなかったから此処で紹介するんだって」

「それ……俺、関係無いよね？それに此処に居るのゴドだけだし……」

「涅威様はこれでも良いから出して欲しいと……ヌシも調度短い話し浮かばなかったみたいで了承しちゃたからな。カンペは貰った。やるしかない」

「えー……」

「じゃ、いくぞ。『英雄後談』にて出演して貰ったルーシユタット先生。正式名は……ラスティーユ・ハイドバルト・ルーシユタット。因みに魔法薬学担当」

「俺達には省かれてるミドルネームがある……」

「……そうだな。ヌシとは頭が違うから」

「……………ああ」

「えーと、家族は両親に兄二人の五人家族で誕生日は六月九日。ロンドン生まれのロンドン育ち……」

「……誕生日かぁ。俺、何時だろう？」

「俺の分もヌシに聞いてくれる？……どうせ逃げられるだろうけど」

「面倒臭がりだもんね。次は？」

「短所と長所について書いてある……………長所は元気なところで短所は気に入らなかった人は直ぐ様虐めること」

「……………闇へと落ちそうな短所だね」

「そのうち誘われるかもな。最後、趣味について。読書と研究。最近は創設者や闇の魔術、防衛術に手を出してる、か」

「うわー…本当に闇に落ちそうな子だね。よくホグワーツで教員をしてたね」

「……まあ、採用されたから信頼があったんじゃないかな？」

「それか何かあっても対応出来る自信でもあったのかもね。創設者、かぁ。ゴド、人気者だね」

「アルだって初めて会った時はキラキラ目を輝かせてただろ……」

「だって伝説に会ったらそうなるでしょ？」

「……伝説って何!？」

「ホグワーツを建てたりとか、負け無しだとか、かなりの酒豪で店を潰しても酔わないとか」

「……………そんなのが回ってるのか」

「え? 事実じゃないの?」

「ホグワーツを除きそんな恐ろしい事実を作った覚えはない。……
……多分」

「……………」

「……………程よく会話も終わった事だしこれも終わるか」

「そうだね。俺は証拠を集めないと」

「……………証拠?」

「またね」

「あ、おい、アル! 待て!」

四十話

月日は流れ、やがて季節は幾度めかの冬に入ったある日。

俺はいつもの通りに頭に鳥を乗せ、ザクツと雪を踏む音を立てながらも町から町へと渡り歩いていった。

いくらマントがあるとはいえ、俺が主から解雇に近い宣言をされたのは夏。

当然服装は夏服で洋服なんて買うお金がない俺はあれから今日までの数年間ずっとこの服。

ハアーと息を吐き出せば息が白くなるくらいに寒いのに夏服は少々辛い。

（運動すれば違うんだけどな……）

すぐに体温が高くなって寒さなんてものは感じないんだけれど……

「雪があるから森じゃないかぎりには火も焚けないしな？」

森なら木から枝を折れば良いけど此処ではそうはできない。

理由はこの辺りには木が中々ないから。

町と町の間が遠くもないが近くもないという曖昧な距離な為、人の通行はそこそこある。

特に……商人が多いとか。

（商人は荷物があるからな）

遠方から来た商人程荷物は多く、幅をとる。

（だからここら辺は木を刈り取った）

全てではないけれど、残したのはほんの数本くらい。

（町に居た婦人達の噂話しかから聞いた話しだけどね）
だから本気にはしてなかったけれど……

「本当に木が無い……」

あながちあの噂話し本当なんじゃないかな？

「晴れてたら見通し良いだろうね」

残念ながら今日は曇り空のうえ、雪が降っているけれど。

『……キュウ?』

「……まあ、その分 敵には見つかりやすいか」

『キュウ!』

不思議そうに鳴いた鳥も、俺がそう告げると同意するように鳴きバタバタ羽を動かした。

(………声?)

不意に聞こえてきた僅かな声。

それは俺が歩むと同時に近づいているのかドンドンと大きくなっていった。

「やっと、追いついた。お嬢ちゃん?」

よくも、俺達をわずわらせてくれたな、と言う声が響いて聞こえる頃には俺の目は複数の大人が囲んでいる光景が見えた。

「……行くよ」

『キュウ!』

バササと鳥は俺の頭から飛び立ち囲んでいる連中へと向かう。

俺は頭が軽くなると同時に走り出す。

「良家のお嬢ちゃんが良くも此処まで逃げたものだ。けれど此処で追いかけてこも終わり。所詮、捨てられたお嬢ちゃんだから何をしても咎められないし、怖いお家さんもない……俺達に捕まったのが運のつきってな」

ニヤニヤ怪しく笑いながらゴキゴキと手首を鳴らし音を立てる男性。

「そうそう。ボクはそうでもないけど……ボク達の中には幼女シユミもいるからね。君を回して売るという方法もあるし」

「俺達のストレス解消道具……そうだな、非公式な奴隷でも良い——ブベラァ」

ゴキゴキ音を立てていた男性を駆け付けた俺は殴り飛ばす。

「………子供?」

初めは目を見開いていた人ばかりだったけれど次第にニヤつき始める。

……所詮、子供と思ったのだろう。

俺はそんな連中を一目見、すぐに駆け出しては殴り飛ばしていく。

『キュウ!』

鳥も空からもうスピードで相手の頭へと突っ込み嘴を食い込ませては真っ赤に染め、次々に殺していた。

俺が殴り飛ばした敵も鳥が殺してくれるだろう。

鳥が殺さなくても後で俺が殺せば良い。

目の端で映った景色にそう思いながらも一人、また一人と殴り、蹴り飛ばしていく。

(さ、いご!)

残り一人を殴り飛ばしたと同時に鳥がとどめを刺す。

『キュウ!』

(後で川を探さないと)

俺が殴り飛ばした奴らまでいつの間にか刺していた鳥はかなり血に濡れていた。

「あ……の……」

バサバサと鳥が俺の頭へ乗ると同時に怖ず怖ずとした感じで声をかけられた。

「助けてくれてありがとう」

俺が振り返ると声の主……太陽みたいなキラキラの金色でフワフワした髪に緑よりも澄んでいる碧色のクリッとした大きい目を持つ子供が微笑んでいた。

「私、今までは逃げ切れていたんだけど……今回はちょっと相手かしつこくて」

だから、助けてくれてありがとう、と子供……いや、話し方からして女の子か。その子がそう告げる。

「私はヘルガ。ヘルガ………ハッフルパフ。貴方は？」

(ハッフルパフ……)

確か以前護衛をしたことのあるお偉い様。

女の子の言う名前が正しいならば俺が話せるような人ではない。

「……いえ、お……私の事はお気にせず」

失礼します、そう俺は告げ背を向けた。

そのまま歩こうとして、グイとマントを引っ張られる。

「な・ま・え！」

振り返ると先程の微笑みとは違い何かを含めた――今からでも背後に黒い何かが見えるくらいな笑顔で女の子は言う。

「っ……き、気にしないで下さい」

その笑顔を見た瞬間、ゾワリと背中になんかが走ったけれど俺は態度に出さずにスッと向かい合ってから何とかそう告げる。

「……じゃあ名前を教えないなら、ついて行くね」

「……………はい？」

「名前を覚えてくれないなら君について行く」

その言葉に俺はため息をつく。

「……………ありません」

「……………え？」

「お――私に名前は無いんです。この目を見れば分かると思います
が私は奴隷です」

俺は自らの右目を指差しながら言う。

女の子は俺の顔を見て、俯く。

「……なら、私がつけてあげる！」

そして大声でこう叫んだ。

「名前が無いならつけてあげる！だから……だから……」

勢いよく叫んでいた声はドンドンと小さくなり、マントを掴んでいる手は小さく震えていた。

「おいて……かないで」

呟かれた、小さな言葉。

――所詮、捨てられたお嬢ちゃん――

あの男はそう言った。

捨てられた、と。

（……捨てられた、ね）

俺は初めから一人だった。

家族を知らないし、すぐに奴隷になったからこれからもきっと、捨てられる気持ちは分からないだろう。

(…………でも)

捨てられた子供がどうなるかくらいは知っている。

嫌というほどに。

「……………な、まえ」

ポツリと女の子は呟く。

「私が……ヘルフィって呼ばれてるから……」

女の子はポツリポツリ、ゴドシークやヘルフィやらフ……フル？やらブツブツ呟いていく。

やがて黙り込み沈黙だけがしばらく続いた。

「ゴドフィル」

そうポツリと呟いたかと思うと女の子は嬉しそうに話し出す。

「うん、ゴドフィル。決まり！」

女の子はパツと先程とは違う、嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「貴方の名前はゴドフィルよ」

そう改めて告げた後にハツと気づいたような顔になり、眉を下げ申し訳ない様な顔で俺を見つめる。

「ついて……ううん、一緒に行っていていい？」

「……………好きに、すればいい」

先程とは打って変わった顔に、声に……俺はそう告げるのが精一杯だった。

「ありがとう！……あ、そうだ」

正直、食料とかどうしよう、とか思いながら女の子を見ると女の子はいきなり着ていた上品そうなロープを脱いだ。

「……………え？」

俺はいきなりの大胆な行動に追いつけて無いのだが、女の子はお構い無しにロープをビリビリ破いていく。

「こんなものかな？」

ちよっと動かないでね、と女の子は言いながらも俺の顔にビリビリ

引き裂いたロープをグルグルと巻き付けてくる。

「あ……の……」

一体何を？と問おうと声を出す前に女の子が歓喜の声を出した。

「よし、出来た！」

うん、変じゃないね、と女の子は一人頷く。

「何を、したんですか？」

今だ満足そうに頷く女の子に俺はやっと問う。

「右目にね、布を巻いたの。こうすれば右目を見られないで済むでしょ？」

その言葉に俺は目を開く。

「これで……大人達にも殴られる数は減るから」

目を見開く俺に女の子はフンワリと微笑み、告げた。

「行こう？」

いつまでも此処には居られないし、と女の子は言いながらギュッと俺の手を握る。

「これからよろしくね？」

「……はい、よろしくお願いします」

俺がそう告げると満足したのか女の子は手を離し、俺より先に一歩踏み出した。

四十話（後書き）

「ふわぁ〜……」

此処数日、又シの不規則なスケジュールに振り回されたお陰で家事や読書や悪戯とか……色々する暇が無かった。

「買い物行かないとな……」

確か今日の朝くらいは食材があったと思うけど……

（一日は持たなかったよなー……）

「この近くの市場か……」

……何処にあったっけ？

そう思いながら俺は厨房へと入る。

「ゴド、今日食材買いに行くでしょ？俺も一緒に行っていいい？」

アルはヒツコリと顔を出しながらそう言った。

「行くけど……市場だよ？」

「その市場の近くに本屋があるんだよ。そこで買いたい物があるんだけど、どうせ行くならゴドに付き合おうと思って」

一人より二人の方が楽しいでしょ？とアルは告げる。

「……そうだね。なら、朝食を食べたら行こうか？」

「うん！」

じゃ、朝食楽しみにしてるねーと言いながらアルは去って行く。

そんなアルを見て元気だな、と思ってしまいう俺は精神的に歳を取ったと思う。

（体力も落ちてきているし……）

時々している訓練、回数を増やすか量を増やすかな……

「……本当、考え方も歳を取ったものだ」

昔は体力だの考えなくても良かったのに。

俺は思わず苦笑する。

「無茶し放題だったしな……」

ある意味、楽だった気もするけど。

「……と、早く朝食を作らないとな」

俺はガサガサと少ない材料を取り出し、火を付ける。

「炒めもので軽く朝食を済ませてから……」

買い物へと行こう。

四十一話

「……ここら辺で良いですか？」

ヒョイと首を傾げ特長である少し長い赤い髪が揺れる。

「うん、別に良いよ？」

「なら、今日は此処にしましょう」

そう言う彼は昨日、暴漢に襲われていた私を助けてくれた同い年くらいの人だ。

私の、無茶苦茶なお願いも聞いてくれた。

そんな、優しい人だけれと……

（敬語……なんだよね）

ゴドフィルは奴隷だからなのか敬語で話すし、まだ私の名前すら呼んでない。

（ゴドフィルからしたら当たり前の対応なんだろうけど……）

私の家……いや、ハツフルパフ家の身分が高いからゴドフィルではなくても敬語なのは当たり前。

……でも、私は捨てられてしまった。そんな身分がない私に敬語で話して欲しくないし、名前も呼んで欲しい。

「ねえ……ゴドフィル」

この場所に着くまでに拾える分だけ拾った枝をゴドフィルは置き始める。

「敬語、止めてくれないかな？ 後、名前で呼んで……欲しい」

ゴドフィルは上下関係でもなければ、部下でもない。

対等な人間であり、私の恩人であり……友達になりたいと思っている、人間。

「敬語は好きじゃないし、名前は……私にもあるから呼んで欲しい。

あ、ヘルフィが良いな」

難しいならヘルガで良いよ、と私は付け加える。

ヘルガよりヘルフィの方が特定されにくいけど……ね。

「……いえ、俺は――「奴隷だからって言う?」……そうです」

私は癖になりつつある微笑みを浮かべる。

「あのね、ゴドフィル。私はハッフルパフ家に捨てられた。だから今の私には身分が無いの。敬語なんて使わなくて良いわ。名前を呼ぶ事を避けなくても良い」

「……でも、貴女は“人間”です。俺――私達奴隷とは違う」

その言葉に私は俯く。

(……何が?)

何が違うのだろうか?

(ハッフルパフ家にも彼らは居たけど)

彼らは私達と何も変わらない。

食事をし、睡眠を取り、体を洗う。

同じ様な扱いの屋敷しもべ妖精みたいに体の構造が違う訳でもない。

彼らは“人間”だ。

私は顔を上げ、ゴドフィルの顔へと両手を伸ばす。

ジッと、先程の言葉が当たり前の様に見えるゴドフィルの頬を私はパチンと軽く叩いた。

そのまま、ギュッと頬を持ち抓る。

「よく聞いて。私の居た家にも、奴隷は居た。彼らは私と何も変わらない。眠るし、食べ物は食べる。火傷もするし、赤い血だってながれる。……これが人間じゃない?……違う。私達も、ゴドフィルも人間なの。同じ、人間」

ゴドフィルは少し驚いた様な顔になる。

「……皆はゴドフィルを人間じゃない、奴隷だって言っているんだと思う。なら私はゴドフィルを“人間”だって何回も言う」
だから、と続けながらも私はスッと手を離す。

「友達になろう?」

私一人じゃ寂しいし、と付け加えながら私は手を差し出す。
ゴドフィルを見ると彼の目は揺れていた。

「と、もだち、ですか……?」

「うん。敬語でもなくて、対等に名前を呼び合う。辛い時は一緒に乗り越え、嬉しい時は一緒に喜び、悲しい時は一緒に分け合う。それが友達」

私はジッとゴドフィルを見つめる。

「友達に……なってくれる？」

彼は戸惑っているような表情で私の差し出した手を見ていた。

「敬語は少しずつで良いよ。急には変えられないから。でも……私は君と友達になりたいな」

私は最後にそう告げる。

後はゴドフィルが決める事だ。

言いたい事は全て伝えたしね。

ゴドフィルは眉を潜め難しい顔で悩んでいるみたいで暫くは沈黙が続いた。

沈黙の中、私は辺りを見回すとこの場所に辿り着いた時は日が斜めになっていたのに、日が傾き辺りは夕暮れとなっていた事に気づいた。

そんな時間が経つくらいに私とゴドフィルは話し、悩んでいるなんて……気づかなかった。

多分、ゴドフィルはまだ気づいていないだろう。

「ゴド――」

私は返事は遅くていいから準備をしよう？　と言う為に口を開いた瞬間、ギュウツと手を握られる。

「ヘル……ファイ」

恐る恐る、彼はそう言った。

……多分、これが今の彼の限界。

でも、彼にとっては大きな勇気が必要だったはず。

私は頬を緩めながら手に力を入れる。

「これからも友達として、よろしくね。ゴドフィル？」

夕暮れの、暖かい色を背景にゴドフィルはゆっくりと、頷いた。

四十一話（後書き）

「これと、これと……後何を買ってないかな」

色とりどりの商品が並ぶ中、俺はパプリカを取りカゴへ入れる。

「暫くはまた来ないだろうからな……少し多めに買うか」

俺が赤や黄色のパプリカへ手を伸ばした時だった。

「ゴド！これどう？食べれる？」

（アル？）

アルの声が聞こえ、伸ばしていた手を引っ込みアルへと顔を向ける。

「食べれるって一体何を………本当に何それ？」

長年料理をしてきた俺だけれど、アルの持っていた食材は何だか分からなかった。

（……いや、その前に食材なのかな？）

全体的には白色でグニグニと蛸みたいな足が八本以上あり、頭は見えない上に何かデロツとしていて形すら不定形。

「……………アル、それ元に戻してこい」

「えー……食べれないのか」

……食べる前に生き物か分からないし俺もあのグニグニデロツは流石に捌けないぞ。

クルリと向きを変え、アルはあのグニグニを戻す為に買い物へ来ただろう人混みの中へ消えていく。

（何処から持って来たんだろう……）

少し、アルがあれを持って来た店――あんなものを食材として売っている店が気になったけれど、俺は再びパプリカへと手を伸ばした。パプリカをカゴへ入れ、目についた赤い林檎を手にとった瞬間だった。

「うぎゅ……！」

――……真横から俺にドシンとぶつかったのは。

四十二話（前書き）

『グラッド』……初めは確か検索をし、古い英語で幸運みたいな単語をもじって付けたんですが……

この小説を書く際、再度調べたら出て来なくて「あれ？あれはうちの妄想？」と思いはじめるくらいでして……

もう、似たような物を引っ張りだして名付けの理由にしました。

……何でもメモる方が良いですね。

四十二話

数日前、ヘルファイから友達になろうと言われた。

最初は勿論、戸惑った。

奴隷は人間より下の階級。

見下され、暴力を振るわれる事が日常で当たり前。

そんな俺が友達？

ヘルファイはそれから何か話していたけど俺は話し半分でしか聞いてなくて、グルグル混乱していた。

普段使わない脳みそを使って、今までの事を整理し考えた。

奴隷の俺と、女の子が言う“友達”になる、って事がどういう事か。いっぱい、いっぱい頭が痛くなるほど考えても分からなくて、でも女の子は手を差し出し待っていた。

(……何か、あったら)

もし、俺で何かあったらその時に“友達”を無かった事にすればいい。

そこにたどり着いて俺は、やっと差し出された手を握った。

(……………あ、)

そしてそこで女の子がヘルファイ……だっけ？

そう呼んで欲しいって言っていた事を思い出した。

「ヘル……ファイ」

だから俺は小さく、そう告げた。

すると女の子……ヘルファイはニツコリと笑いこう告げた。

「これから友達として、よろしくね。ゴドフィル？」

これが、先程言ったように数日前の出来事。

この数日で歩くだけなら、とヘルファイに練習させられ敬語はまだ綺麗に抜けてないけれど名前くらいならすんなり言える様に進歩した。そして現在……俺とヘルファイは朝から歩き続けていた為、木陰で休憩をしている。

「あ、ねえ、ゴドフィル」

ひよいと顔を俺へと向けながらヘルフィは言う。

「その頭の上にいる鳥の名前なに？」

「……………え？」

鳥の、名前？

「……………付けてないの？」

「……………」

黙りこむ俺にじゃあどうやって呼んでたの？とヘルフィは問う。

「……………鳥って呼んでまし……呼んでた？」

「……………私に聞かれても分からないな」

困った様な顔で、でも楽しそうにヘルフィは答える。

（……………どう呼んでたっけ？）

呼んで……………無かった気がする。

「名前が無いなら付けてみたら？」

名前が無いなんて寂しいもんね、とヘルフィは言う。

（……………名前）

名前、かあ……………

「……………あ、そうだ」

不意にヘルフィが言う。

「ゴドフィル、知ってる？昔、ずーっと昔に皆に好かれてるジググラトと言う建物があって……………えーっと、確かそれは『高い峰』だったかな？そう呼ばれてるって」

「この子に、ピッタシだね。『高い峰』」

高い峰……………

「ぴった……………し？」

あの、嘴を頭に突っ込んで絶命させる鳥が高い峰？

（……………高いかなあ？）

「うん」

ニコォーと笑いながら俺の言葉に肯定するヘルフィ。

（ジググラト……………ジググラト……………）

……言いにくい。

(ジググラトを少し変えて)

ジググラット……いや、グラッド?

「……グラッド?」

『キュウ?』

今まで黙って俺の頭に乗っていた鳥がモゾモゾと動きながら鳴いた。

「グラッド? 良い名前ね」

モゾモゾと動いていると――グラッドをヘルフィはヒョイと自分の膝へ下ろし抱える。

「私、ヘルフィ。よろしくね? グラッド」

『キュウ』

バタバタと答えるように羽を動かしグラッドは鳴いた。

「かわいいー」

その姿を見たヘルフィはギュッとグラッドに抱き着いた。

『ギュウ……』

グラッドはパタパタと力無く羽を動かし苦しそうに鳴く。

「ヘルフィ、とー……グラッド苦しそう」

離さないと窒息しちゃうよ? と付け加えるとヘルフィはすぐさまグラッドを離れた。

「ご、ゴメンね?」

『キュー……』

羽をダラリと下げ弱々しいがグラッドはヘルフィに答える。

グラッドが無事なのが分かったからなのかヘルフィはホッと安堵したように息を吐きグラッドを撫で始める。

グラッドは気持ちが良いのか目を閉じて寝ようとしていた。そんな、ほのぼのとした光景から視線を離し俺は空を見上げる。

(……怪しいなー)

今日の空は晴れ。だけれど風上の方に曇り雲がある。

(雨雲……か?)

それとも雨じゃなくて雪かな?

(どちらにしても危ない)

長時間当たると体温が下がり風邪を引きかねない。

「……ヘルフィ、まだ歩けま……る？」

「……………へ？」

ヘルフィを見ると彼女はキョトンとし、そう言う。

俺はそんなヘルフィにスツとあの曇り雲指を指す。

「風上に曇り雲がある。雨か……雪なら今のうちにしのげる場所を見つけないと」

「あ、本当だ」

そう言いながらヘルフィはスツと立ち上がる。

「この小さな木陰……木じゃ少し、しのげないもんね」

そう言ってヘルフィは休んでいた木を見る。

「グラッド、ゴドフィルの所に戻ってくれる？」

『キュウ！』

ヘルフィの言葉が終わると共にグラッドは羽ばたき俺の頭へと向かう。

バササとグラッドが俺の頭へと着陸したの確認したヘルフィがニッコリ笑って言う。

「出発進行ー！」

楽しそうに言うヘルフィと俺をまるで背中を押すように突風が吹いた。

四十二話（後書き）

「す、すみません！」

取ろうとした林檎が宙をまい、再度空中で掴むと同時に謝罪がされる。

（この……声）

フワリとする魔力。

「ヘル……ガ？」

俺は林檎をカゴへ入れ、ぶつかった人を見る。

「……ゴドリック？ゴドリックだよね？」

そこには初めて会った時となら変わらない——否、髪型等は変わらないが、初めて会った時より大人に……綺麗になったヘルガがそこに居た。

「……随分、綺麗になったね」

大人になったヘルガを見て、驚きながらも俺はそう告げる。

「……目が、見えるの？」

俺の告げた言葉を聞き、目を見開き驚いたようなヘルガがそう告げる。

「右目あるだろう？」

俺はクスクスと笑いながら告げる。

「……ゴドリック！」

ヘルガが涙ぐんだかと思えばガバツと抱き着いてきた。

「……良かったね。本当に、良かった」

ギュツと抱き着きながらヘルガは言う。

「……ヌシの面倒臭がりのおかげだけどね」

まるで自分の事のように言うヘルガに俺は少し嬉しくて、ついそんな言葉を告げてしまった。

「それでも、だよ」

キュツと衣服を握られた感覚が肌に伝わる。

暫くして気がすんだのかヘルガはトンツと下りた。

「久しぶり、ゴドリック！」

ヘルガは、数十年振り――いや、何千年振りの笑顔でそう告げた。

四十二話（前書き）

やっと更新出来ました！

四十三話

「……ヘルフィ、大丈夫？」

「うん。まだ行ける」

月が出ない夜。

その日は星だけしかなく、明かりが足りないからいつも以上に暗くなる夜。

そんな日を狙ったかのように湧き出てくる金稼ぎの奴ら。

そいつらの狙いは――ヘルフィだ。

ハッフルパフ家に捨てられた子供。

そのヘルフィを捕まえれば、ハッフルパフ家に身代金を要求する事は出来なくても魔法省は身分が上であるハッフルパフ家の子供だから身代金を払う可能性が高いから、と殴り倒した奴を脅せば素直に教えてくれた。

（……馬鹿馬鹿しい）

ハッフルパフ家から捨てられたならヘルフィはもうハッフルパフ家だとは認められてない。

――例え、本人がハッフルパフと名乗っても。

だからハッフルパフ家は身代金を出さずにヘルフィを見捨てる。

そこまで分かっているのに、何で分かてないんだろう？

ハッフルパフ家が認めていないならばヘルフィは魔法省からもハッフルパフとは見られない。

ただの孤児として見られてしまい、身代金を出したりはしない。

「居たぞ、ハッフルパフ家の餓鬼だ！」

真っ暗闇の中、響く野太い声。

「……………行、こう」

俺はギュッとヘルフィの手を握る。

……まだ、この暗さにヘルフィは慣れてないらしいし。

「……………うん」

俺はヘルフィに気をつけながらも駆け出した。

「見つけたぞ！」

フゥーフゥー、と荒く息を切らしながらも俺達の前に阻む数人の人間。

「これで……貧乏から抜けられる！」

奴らは歓喜の声と共にジリジリと距離を詰めて来る。

(……………仕方ない)

いくら孤児とは言え元はあのハツフルパフ家。

だから血とかは見慣れて無いだろうし、見せるべきでも無いだろうと俺はなるべく大量に血が出てしまう殺しはしなかった。

殺るとしてもグラッドが嘴で留めを刺すくらい。

(でも、そうは言ってられないな…………)

多数対二人。

しかもヘルフィは戦力にならないし、狙われている。

血がどうのとかは言っていられない。

俺はシュルリと隠し持っていた暗器の一つ……鋼糸を手取る。

「ヘルフィ、動かないで、ね？」

ヘルフィと違い夜目は効くけれど、俺は一応念を押した。

「……………うん」

小さく、コクンと頷く様な気配を感じ俺はギュッと鋼糸を握る。

(先ずは……)

一人一人首を斬るよりも巻き付け、数人一気に殺った方が効率が良い。

こちらは一人だし。

そう思った俺は素早く暗闇の中を敵に気づかれぬように走り回る。

（一人、二人―…三人）

走ったり飛んだりしてグルグル敵の首に鋼糸を巻いていく。

（四人……五人）

気配は後一人……すぐ近くに立っている一人か。

（こいつで、終わり）

ヒュッと地面を蹴り宙に浮いている間にグルグル鋼糸を巻き付ける。
トンとなるべく音が出ないように着陸し、鋼糸を少しずつ伸ばしながらヘルフィの前へと戻る。

「先程から何も言わなくなったな？ ついに諦めたか？」

「案外一緒にいた餓鬼に見捨てられたのかもな！」

ゲラゲラと笑い声が暗闇に響く。

（……じゃあ、ね）

俺は握っている鋼糸を少し引き寄せ握る。

「じゃあ早くハッフルパフ家の餓鬼を―…」

急に辺りは静まり返り僅かにゴトンと首が地面に落ちた音が聞こえた。

「な、何……？」

不安そうにヘルフィはキョロキョロ辺りを見回す。

「ゴドフィル？」

不安そうに呼んだヘルフィに俺は手を握り言う。

「……大丈夫。あいつらは……退治したから」

何故か“殺した”とは言えなくて、俺は言葉を濁した。

「そう……」

ホッと安心したような声がヘルフィから漏れる。

（……片付けないと）

死体はどうしようも無いから放って置いて……

手に握っている鋼糸だけを回収しないとね。

俺はシュルシュルとヘルフィに分らないように巻いていく。

ポタポタと血が滴っていたけれど……仕方なく素早く回収した。

「……ごめんね」

ポツリとヘルフィから聞こえた言葉。

(…………ごめん?)

ごめんとは、何の言葉だろう?

「ゴドフィル、行こう?」

「あ、は…………うん」

巻き終え回収出来た鋼糸をサッと隠し入れながら俺はヘルフィに答える。

「今日は…………川の近くにね」

そう言って暗闇の中微笑んでいたヘルフィはなんだかいつもの笑顔ではなかった。

(……………?)

俺は、それがなんだかよく分からずにただ、足を踏み出していたヘルフィの後について行った。

四十三話（後書き）

「でも、いつ此処に来てたの？」

まだまだ嬉しいみたいでフンワリ微笑みながらヘルガは言う。

「んー……ハッキリとは覚えてない」

此処最近だと思うけど、と付け加えて言う。

「……そっか。ゴドリックはずっと働いてたもんね」

「……まあ、俺の責任だからな」

そのおかげで千年後に落とされたりしたんだけど……まあ、楽しかったしそれはそれで良かったかな？

「良く頑張ったね」

あのゴドリックが、と呟きながらヘルガは手を伸ばし俺の頭を撫でる。

（……ヘルガの中で俺はいくつなんだろうな？）

いや、ヘルガだけじゃない。

俺の周り……特に俺の同期だろうあの時代を生き残った奴らは何故か年々俺の扱いが幼い子と同じ様な気がする。

(あいつらの中で俺は本当にいくつなんだか……)

せめて年々退行していない事を祈ろう。

「ゴドリックが居るって事は……仕事は終わったんだよね？」

スツと頭から手を離しながら確認を取るようにヘルガは聞いた。

「うん。終わった……いや、終わらせたよ」

「よし！ならこれから会いに行ったり色々出来るんだね！」

満面の笑みで告げるヘルガに驚き、少し遅れながらも俺は答える。

「そうだね。これから……」「ゴド！」……あー、来たのか」

てっきりまだ時間がかかると思っていたのに。

「商品を返して来たって……誰？」

知り合い？とヘルガを見ながら問うアル。

「え……ええー！」

ご、ごごゴドリックの隠し子！？なんて事実無根な事を叫ぶヘルガ。

……頼む、驚くのは良いけど叫ぶのは止めてくれ。

四十四話

(……っ、なんで?)

ドタドタと俺は足音を立てながら駆ける。

俺の後ろには同じく足音を立てて駆けてくる複数の大人。

こいつらは別に刺客みたいな殺気も実力も無く魔力も感じない……
ただの人間。

(……今日は盗みとかしてないから追われる理由が無いはずなんだ
けど)

ただ、ヘルフィと別れて食料がないかフラフラしてただけなのに。

……なんで俺、追われているんだろう?

(ヘルフィと一緒にじゃないから良かったけれど……)

合流する前には撒かないと。

(それか殺すか)

どちらかをしないとね。

そう思い俺はクルリと向きを変えあいつらと向かい合った瞬間だった。

(………?)

視界の端から何かが俺に向かっているのが見えたのだ。

(敵!?)

運良く視界の端の左側、かつ死角に入らない左斜め横だったため俺はすぐさま敵を倒せるように体勢を変えた。

だが、瞬時に体勢を変えても間に合わなくて俺はそいつとぶつかってしまった。

「ご、ごめんなさい」

今、追われて……とぶつかった本人は慌てて話し軽く頭を下げる。

「殺されたくないならすぐに――」……ヘルフィ?」に、げた……」

俺の問う声にヘルフィはガバツ頭を上げる。

「ゴドフィル？ どうして此処に――…じゃない」

急いで逃げよう！ とヘルフィは言い俺の手を握る。

「……それはもう、無理かな？」

「……………へ？」

キョロキョロと辺りを見回せば大人・大人・おとな。

ぶつかって二言三言話す内にヘルフィを追っていた連中と俺を追っていた連中が俺達を囲んでいた。

（一人で殺れるかな……）

ヘルフィを護りつつ目測二十人くらいの大人を殺す。

（……多分、やれる。でも、）

あいつらを倒している間にヘルフィが人質になるかもしれない。

「……ゴドフィル」

トンツとヘルフィが俺の背中に当たる。

「あまり得意じゃないけど……何か武器ない？」

「……………」

……孤児である限りヘルフィもいずれ手を染め無ければいけない。

俺は静かに瞼を下げ、スツと持ち上がる。

（……確か短剣があったはず）

俺はスツと左手で鋼糸を右手に短剣を隠し場所から取り出す。

左手で鋼糸を整えつつも右手に持っている短剣をヘルフィに差し出す。

「……ありがとう」

ヘルフィの声は震えていたけれど、ヘルフィはしっかりと短剣を受けとった。

「これで、奴らに仕返しが出来る。……あの、“荒れ果てた荒野”の者達も安らかに眠れるだろう」

一、二の三で行くぞ、と大人は付け加えながら告げた。

「一、二の――…三！」

その合図と共に大人達はいっ持って来たのか武器を掲げ駆け出して来た。

俺はすぐさま近づいて来る大人達に向け奴隷訓練以来の左手で鋼糸を飛ばす。

たどたどしいものの、使えないレベルではない技術に血に濡れ錆かけてもそこそこ斬れる刃――それは駆け出して来た大人の二、三人の首を跳ね飛ばした。

ぶしやあああと吹き上がる二、三人の赤黒い血に彼らは怖じけづいたように一歩足を後ろへ下げたけれどやはり生きている年数の違いなのか、単に初めて見たのではないのかは分からないけれどすぐさま俺達を殺そうと殺気を出し、先程みたいには突っ込まず警戒をする。

むやみに突っ込んで来ないところから学んだみたいだけれど……

残念ながらその距離では足りない。

何故なら、俺の持っている鋼糸は特別製で色々と特殊だ。

その特殊の中には長さがある。

――五メートルもの長さがある。

俺は左手から先程とは打って変わる長さを再び飛ばす。

無論、彼らはそんな長さがあるとは知らない。

思いもしなかっただろう。

叫び声も上げず、ただ、ただ飛ばされた鋼糸に斬られ大量の血を吹き出すだけの大人達。

ゴトンと体が倒れるのを確認して、俺は残りの大人達に目を向ける。残り、十五名前後。

その十五名は幾つかの固まりになって俺を見たりヘルフィを襲ったりしていた。

チラリと横目でヘルフィを見るとヘルフィは上手く懐に潜りこんで、一撃で殺していた。

見る限りは助けはいらないみたい。

俺は視線をヘルフィから大人達へと向け、一番多い固まりへと鋼糸を飛ばした。

どれくらいの時間だっただろうか？

辺りはジワリジワリと夕暮れ色に染まっていく中、地は既に吸い切れ無いのか赤黒く固まった血が一面に広がっていた。

「……………どう、して」

血に染まった短剣を持ちながらポツリとヘルフィは呟く。

「この人達は襲って来たのかな？」

「……………」

荒れ果てた荒野がどうか言っていたけれど、聞いたのはそれだけ。この問いに答えられる人は誰もおらず、冬の冷たい風が吹き抜けた。

四十四話（後書き）

「……ヘルガ」

今だ俺の隠し子などと叫んでいるヘルガの口を俺は名を呼びながら塞ぐ。

「良く聞いてね？アルは俺の隠し子でも無くて他のお子さんを俺がしばらく預かってるんだよ。そして俺には子が出来るような相手もない」

「ふえー？ふうえはなー？」

「……………そこで何でロウエナの名前が出る？」

「はっへ、ふうえはなはこふうとふるのー…なふうてなひ」

「……………？」

ー…だって、ロウエナは俺の事を？

そこまで言い、ヘルガは何でもない口を塞ぐ。

「ヘルガ…………？」

俺がキョトンとしつつ催促してもヘルガはブンブンと首を横に振る。

（…………これ以上は無駄かな）

長年の付き合いでそう悟り、俺はヘルガの口から手を離す。

「ふう……とりあえず、あのそっくりな子は隠し子じゃないのね？」

俺から解放されたヘルガは一息つき、再度そう確認をする。

「ああ。預かり物だ」

人を預かり物なんて言うべきじゃないだろうが——こちらが分かりやすいしね。

「そっか。じゃあ一応自己紹介をしておこうかな？」

そう言いながらもヘルガはクルリとアルへ向き合う。

「私はゴドリックの友達のヘルガ・ハツフル——「みいつつけた」——！」

突然割り込んで来た声と共に俺達の間には大量の砂埃が舞う。

「お前達があゝの時代の奴らか？——いや、簡単に言おう。お前らは子供の時に捨てられたか？」

砂埃が晴れて来たと共に見え始めた黒髪の間人はそう告げた。

「——もし、そうなら名前を告げろ」

ズドンと両手を組み、偉そうにこの男はそう告げた。

四十五話

ここ数日はいつもより良く冷え込んでいて、雪は降り続けるし、風はビュウビュウ吹いて寒かった。そして現在、俺達は追って来る人間達から逃げる為に雨の中必死に走っていた。

「こっちだ！」

「いや、先程右へ向かったぞ！」

「左じゃなかったか？」

「馬鹿だな、真っ直ぐだ！」

……大分後方だけれど先程から俺達を確認する声が飛び交い響く。

「ヘルファイ、こっちに行こう」

俺は短く伝え右へと曲がる。

ヘルファイは息を既に切らしており返事こそ無かったが俺に続いて右へと曲がった。

……もう、限界なのかもしれない。

「……ヘル「……………」」……」

休憩しよう、と言おうとした瞬間、僅かに聞こえてきた声。

（……なんだ？）

追って来ている奴らとは違う。

あいつらの声でも無いし僅かになるほどまだ距離も離れていない。

俺は耳を澄まし、僅かな声を広う。

「……ちに……レイブ……」

「……ま、そ……に……リン……」

「ハアッ……つ、こ……い」

「しぶ……奴……だな」

（………複数？）

途切れ途切れでしか聞こえず分かったのは声が全部違うって事だけ。
（場所が分からない、か……）

複数で居場所が分からないとなるとこちらに分が悪い。

「居たぞ！こっちだ！」

会話を聞く集中力と少しでもヘルフィを休ませる事を考え、走りのスピードを大分落としていたのだがそれが仇となったようだ。

急いで声の方向へと振り返ると俺達の背後から数メートル先に人影が見えはじめる。

「……ヘルフィ、行こう」

複数の人間も気になるけど今は逃げる事が優先。

この前みたいに武器は持っていないみたいだけれど、何をされるかわからないし。

「うん……………」

ハア、ハアと辛そうに呼吸を繰り返してはいるがヘルフィは足を少し早める。

俺はチラリと近づいて来る人影を見つめ、ヨタヨタ走るヘルフィの後に続いた。

「……もう、逃げれ、ない、だろ！」

ズシャーッと突っ込む様にこけたヘルフィに手を貸し、立たせると同時に追って来ている奴らが息を切らしながらも俺達の前へと立っていた。

「随分、粘って逃げたが……ここ、までだ」

ジリジリと俺達へとにじり寄ってくる大人達。

「……ゴド、フィル……私をおい、でえっ!!」

ヘルフィが息も絶え絶えに何かを伝えようとしてたんだけど……ボフンとヘルフィは衝突され、前へとこけた。

「……わ、悪い。大丈夫か？」

サラリとした髪質に真っ黒な色。今までの誰よりも整っている顔に赤い目。

身長も俺やヘルフィと変わらないのに体全体の線が細い。細すぎる。
(……に、人間?)

こんなに細い人間なんているんだ……

「サラザール！？ちょっと早く行かないと追いつかれ——」

黒髪の子はタタツとヘルフィへ近づき手を差し出した時くらいにまた、今度は空よりも薄い水色の髪で左右に別けられているのに真ん中だけ垂れている不思議な前髪で短髪に曇天みたいだが曇天よりずっと澄んでいる目を持つ子供が黒髪の子の後からひょっこり現れた。

「ぶ、ぶつかったの？大丈夫？」

ヘルフィを起き上がらせてる黒髪の子に何となくの事情が分かったのか水色の子はそう慌てた様に言い二人に近寄った。

「……大丈夫。それよりも、二人は早く逃げて」

立ち上がったヘルフィは黒髪の子と水色の子に微笑みながらも告げた。

「……そうだな、と言いたいが」

黒髪の子が俺達の前にいる大人達を見る。

「……無理そうだ」

黒髪の子はチラリと後ろを見ながらそう答えた。

俺はその子の視線を追い、後ろを盗み見る。

そこには彼らを追っていただろう大人達。

俺達四人は前後で挟まれてしまった。

「ヘルフィ……」

俺は先程まで息を切らしていたヘルフィへ顔を向ける。

「……大丈夫」

ヘルフィはニツコリと笑った。

でも、それがいつもと違うように見えたのは俺の気違い何だろうか？

「……来るぞ」

黒髪の子がそう告げると同時に囲んでいた奴らは雄叫びを上げ俺達へと突っ込んで来た。

俺は鋼糸を握り奴らに向けて放つ。

その軌跡は予想通りに進み、奴らの首を落としていく。

「……へえ。あんた、凄いじゃない」

俺の戦闘を見てそう言う水色の子も、短剣を使っていたがハッキリ言ってヘルファイよりも上手かった。

素早く急所に一撃をいれ、抜きまた一人と殺す。

している事はヘルファイとあまり変わらないがヘルファイよりも素早く、躊躇も容赦も無かった。

「確かに、なっ」

黒髪の子は短剣一本で豪快に相手の首を撥ねる、若しくは掻き切りながら告げる。

二人の戦闘を見ていた俺は背後から迫って来ていた敵を気配で感じ、後ろを見ずに鋼糸を放ち肉塊へと変える。

俺は一度に数人を鋼糸で切り刻み肉塊へと変え、ヘルファイはあの二人は一人ずつ……しかし確実に殺していった。

それを繰り返し、人数のせいか時間はかかったが双方を追っていた奴らを殺す事が出来た。

「……君達には悪い事をしたな」

「そうね。悪かったわ」

黒髪の子と水色の子はパシャパシャと血だまりの中俺達へと向き合う。

「……………」

「別に、大丈夫。ぶつかったのだって事故だしね」

協力してくれたしね、と何を言えば良いか分からない俺に対し、ヘルファイがニツコリ笑いながら言う。

「そう？なら良かった。私達もあなた達には助かった―【ボタン】

……え？」

水色の子の話しの途中だった。

……ニツコリと笑っていたヘルファイは突然倒れたのは。

四十五話（後書き）

ザリツと音を立てながらも俺とヘルガは戦闘体勢を取る。

……最も、店が連なり客が多くいるこの場所で戦闘なんてする気はないけどね。

「……名前なんて告げて何の意味があるの？」

ヘルガは敵から目を逸らさずに問う。

（確かに……………）

敵は俺達があ時代の子供だと予測し、名前を告げろと言った。

あの時代は俺達はあだ名で呼び合っていたし、名前を告げない者もいた。

今更名前を名乗っても分かるはずがない。

「あの時代の子供の事は否定しないんだな。なら、教えてやる。俺はとある方から任務……まあ雑用を任された」

アルや、少し避難している周りの人々が何が起っているのか分からない、と言わんばかりの表情の中、敵は告げる。

「その雑用は、当時引き離された子供、又は引きこもった子供を探し出しある伝言を伝える、と言う雑用だ」

これがその対象である者のリスト、と告げながらヒラヒラ羊皮紙を揺らす。

「名前を聞いたのは単に伝言を告げた後にリストから削除する為。……さあ、お前たちの名は？」

もし、疑っているのなら微塵でも違う行動をした時に殺ればいい。あの時代の子供であるお前たちならすぐに殺れるだろう？と敵は告げる。

「……ヘルガ・ハッフルパフ」

「……ゴドリック・グリフィンドール」

俺達がそう告げた瞬間、周りはザワリと騒ぎ始め敵はガリガリとリストに書き込んでいく。

「……よし、確かに確認した。ではそのまま伝えるぞ」

敵はスウと息を吸い告げる。

「『せっかく燃やして証拠隠滅してくれたがこちらでは意味が無かったらしくてな。魔法省の奴らに当時の資料が見られて騒がしい。しかも俺がどうたらこうたら言われて最終的には奴らの意見を丸々聞いてやるハメになった。ったく、何で俺がお前らなんか賠償金なんかをやらなきゃいけないんだ。しかも国家予算でだ？あいつらの頭はボウフラだな。奴隷なんて当時では当たり前で賠償金を払う必要なんてないんだが――…まあ、そんな事になった。適当に振り込まれるか渡しに来るらしいから受けとっておけよ。受け取らなければ後々俺が面倒になる』―だそうだ」

(……………ああ)

もう、分かってしまった。

敵が言うあの方が誰なのか。

誰に頼まれ、吹き込まれて来たのか。

(俺の元主——…)

——当時魔法大臣だったあいつだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4002v/>

英雄伝説

2012年1月9日19時50分発行